ISSN 2434-1096

# 鳥羽商船高等専門学校紀要

## 第45号

令和５年３月

鳥 羽 商 船 高 等 専 門 学 校

# 鳥羽商船高等専門学校紀要目次　　第45号

令和5年3月


| タ　イ　ト　ル | | 頁 |
|---|---|---|
| 練習船鳥羽丸におけるアクティブラーニングを用いたERM(Engine-room Resource Management)の活用について | 山 野 武 彦 | 1 |
| 語法研究に文献学的手法を取り入れる際の注意点 | 鈴　木　　聡 | 5 |
| 東京第一臨時教員養成所卒業生の赴任地決定及びその後の動向に関する一考察―他機関卒業生との対比して | 鈴　木　　聡 | 28 |
| The involvement with Hori Teikichi's disarmament policy before the outbreak of the Pacific War | 枦　山　　剛 | 49 |
| 研究活動記録 | | 68 |

# 練習船鳥羽丸におけるアクティブラーニングを用いた ERM(Engine-room Resource Management)の活用について

山野 武彦 *

# Utilization of ERM (Engine-room Resource Management) by using active learning on training ship “TOBAMARU”

Takehiko Yamano *

キーワード(Key words)：練習船「鳥羽丸」(training ship “TOBAMARU”)・AL(Active Learning)・ERM(Engine-room Resource Management)

## 1. はじめに

2010 年 6 月フィリピンのマニラで開催された IMO（国際海事機関:International Maritime Organization）締約国会議で STCW 条約(１９７８年の船員の訓練及び資格証明並びに当直の基準に関する国際条約；The International Convention on Standards of Training, Certification and Watchkeeping for Seafarers,1978.）の改正案(STCW 条約マニラ改正)が採択された。この改正の一つとして運用水準の機関士の能力基準表にエンジンルームリソースマネジメント(Engine-room Resource Management：以下「ERM」という)に関する要件が追加された。これは同要件表の能力「安全な機関当直の維持」における知識、理解及び技能の要件として ERM に関する知識とその実践を求めたものである。

ERM とは機関区域においてリソース(要員、機器、情報)を適切に管理し、有効利用することにより船舶の安全運航を実現する一つの手法である。

ただし、ERM は特定の要員のみ理解し運用するものでなく全要員が等しく適切に理解し共通認識を持ち運用することが必要になる。

そこで、実際の現場経験のない学生たちに練習船鳥羽丸を用いて、船内電源喪失(ブラックアウト)時のそれぞれの役職における緊急対応訓練を行い ERM の重要性を認識し適切に運用できるよう実習を行ったので、報告する。

## 2. ERM の概要

まず、今回のマニラ改正で規定された ERM の要件は、下記 7 つである

1. リソースの配置
   主に人的なリソースに関する要件で必要な要員を適切な箇所に配置する事を表している。
2. 優先順位の決定
   優先順位は通常状態だけでなく突発的、偶発

令和 5 年 3 月 23 日受理

的な状況が発生した場合においても緊急性、妥当性また安全性を十分考慮して決定、実施しなければならない。

3. コミュニケーション
安全運航を維持するために必要な情報交換であり、要員の情報共有は ERM 要件の中でも非常に重要である。

4. 意思表示
職位に関係なく誠実に且つ平等にコミュニケーションをとるための能力である。安全運航を維持するうえで必要と判断した時には職位や任務の上下に関係なく、自分の判断を主張する必要がある。

5. リーダーシップ
ERM を実践するために特に重要となる人的要因である。機関長や一等機関士は他の要員に対する影響力を考慮し、情報共有などによる要員のモチベーションの維持を図る。また、情報を共有しやすい雰囲気作りが必要である。

6. 状況認識力
様々な状況下での危険発生の有無、環境汚染の可能性、法令に抵触する状況の有無などの不具合発生の可能性を的確に判断する能力。事故やトラブルを未然に防ぐために現状を的確に把握することが重要となる。

7. チーム構成員の経験の活用
チーム全員の経験を考慮し、活用することにより安全運航を達成しようとするものである。このためチームリーダーはチーム構成員全員の経験や経歴を知っておく必要がある。

また、管理対象となるリソースには下記 3 つがある。

1. 要員　[資格と資質に基づき適正に配置]
安全運航を維持するために配置される人員で適正な能力を有し、かつ各機器や機能の取り扱いを熟知しその機能を十分発揮する必要がある。

2. 機器　[機器の運転・保守管理、記録の管理]
安全運航に必要な機器類の機能が十分に発揮される必要がある。機器の運転管理、保守管理及びそれらの記録の管理が必要であり現状を把握することにより故障の兆候の早期発見に努める。

3. 情報　[共有、記録、適正な理解と対応]
機関区域外の情報チーム構成員が持つ情報を共有することによる優れたチームワーク、モチベーションの維持を図る。情報が不足すると現状の把握が難しく先を見越した対応が困難になる。

## 3. 実習概要

まず、実習前週の授業時に商船学科機関コース 4 年生 18 人を 4 班に分け、それぞれの班にブラックアウト(船内電源喪失)した状況及びそれぞれの役職を伝えた。実習一週目、その状況を鑑みそれぞれの班で発電機が危急停止した原因を考察・調査し、各役職毎の役割及び対処方法を話し合い、班毎の意見をまとめた。実習二週目、各班毎にまとめた意見の発表及び質疑応答を行い、各班毎のブラックアウトした状況及びその原因、対処方法の認識を全員で共有した。
それぞれの班の状況及び学生が考察したブラックアウトの原因と対応は下記のとおりである。

1 班

状況：出港時
原因：機関長の配電盤操作ミスによる運転中の発電機停止
対応：
・休止中の発電機を起動し ACB(気中遮断器)を投入。船内電源の確保を最優先する。

・主機関の回転数を下げるか停止する。
・船橋に状況の連絡をする。
・船内電源復旧後、停止した補器類の電源を復旧する。
・主機関を復旧する。
・通常運転復帰後、船橋に報告する。
・今後気を付ける。

2班

状況：入港時
原因：発電機過負荷による危急停止
対応：
・三等機関士　直通電話にて船橋に現状を報告する。
・機関制御室で異常を調べる。
・一・二等機関士　機関室へ行き故障個所を直す。
・発電機始動後、不必要な電気系統のブレーカーを切る。

3班

状況：航海中
原因：F.O.(燃料油)が無くなり回転数が低下し周波数低下による発電機危急停止
対応：
・機関長　機関制御室で指揮
・一・二等機関士、繰機長　現場で作業
・三等機関士　船橋に現状報告。連絡係
・予備発電機起動、船内電源復旧。
・船内電源復旧後、手動で補器類の電源投入。
・主機関運転、通常航海に復帰。

4班

状況：停泊中
原因：燃料抑制ピストンがスティックし発電機起動後解除されず負荷の増加に対し回転数が上がらず周波数低下による発電機危急停止
対応：
・陸上電源に切り替える
・機関長・三等機関士　予備発電機起動。
・船内電源復旧後、船内に一斉放送
・危急停止した発電機の原因究明。
・発電機不良個所修理後、試運転。

実習三週目、練習船鳥羽丸船内で主発電機のACB(気中遮断器)を手動で引き外し、任意でブラックアウトの状態をつくりだした。船橋、機関制御室、機関室に学生を配置し、それぞれの班で考察した対応が実際に可能か、それぞれの場所でどのような状況になって、どの様な機器の警報が発報するのか、どこの非常灯が点灯するのかを確認した。また船内電源復旧後、どの機器が自動復帰して、どの様な機器が手動で復帰させないといけないか、船内電源復旧後には、各場所ではどのような事態が起こるのかを確認した。

上記を踏まえ、学生たちが考えた非常時の対応が実際の状況の現場で対処可能か、また、初めてブラックアウトを経験して感じたこと、ERM の重要性など、レポートの提出を求めた。

レポートは、下記のような内容が多くみられた。

1. ブラックアウトするとわかっていても船内でアラームが鳴り響いて怖かった。
2. 昼だったこともあり、機関室スカイライトから明かりが入っていたが、機関室は非常灯だけが点灯し暗く作業はできないと感じた。
3. 非常時はお互い信頼しあって、コミュニケーションをとることが大切だと感じた。
4. トラブルの対応も大切だが、それ以前にトラブルを起こさないように努めることが大切だと感じた。
5. 実際ブラックアウトが起こったらパニックになり、復旧が難しそうだと感じた。
6. 少ない情報から素早い判断が必要だと感じた。
7. 机上で考えていた事と現場では大きく状況が

違っていた。

8. ブラックアウト時、使える機器と使えない機器を理解しておかないといけないと思った。
9. 非常灯の点灯箇所が部屋の出入り口、階段の乗降口等の危険個所だとわかった。
10. 自動始動機器の順番が分かった。

学生の提出したレポートに対し、コメントを書いて返却することにより、お互いの考えを共有し、さらに非常時の対応、ERM の必要性を十分理解することができたと思う。

今回の反省点

ブラックアウト状態が初経験の学生に対して、事前に非常灯の点灯箇所の確認とアラームの発報状況及び、船内電源復旧後の自動始動機器の復帰順序及びその秒数を確認するように伝えてあった。しかし、それに意識が集中しすぎて、他の事象が見えていなかった。

非常時それぞれの役職の役割及び船内各所との連絡方法は学生たち自身で考えていたため、班によって違うことがあった。

特に実際の現場を経験していない学生にとって固有名称や特別な現象等々理解できない部分がたくさんあった。

ブラックアウト状態では、発電機の冷却水ポンプも停止するため、発電機原動機が無冷却連続運転となり熱負荷が大きくなる。この為、長時間のブラックアウト状態を継続することが困難であった。

## 4. まとめ

甲板部はチームとして船舶の安全運航を達成していること対し、機関部はそれぞれの機関士が担当の機器を適切に管理する、いわば個の集まりのような感じであった。しかし、このマニラ改正により、機関部もチームとして安全運航を達成するような要件が追加された。同時に追加された BRM(ブリッジリソースマネージメント：Bridge Resource Management)の重要性は随分前から言われており、その実習方法もほぼ確立されている。それに対し ERM は実習方法が確立されておらず、手探りの状態である。そこで、まだ未経験者の学生が ERM の重要性を理解し運用できるよう、アクティブラーニングを用いた実習修方法を考えた。もちろん経験が少ないため理解できない部分は多々あったが、最後のレポートでフィードバックすることで、以前より理解を深めることはできたと思われる。また学生だからこそアクティブラーニングに対し積極的に取り組み、グループ内での討論、発表や活発な質疑応答など予想以上の結果が得られた。さらに練習船鳥羽丸を用いて実際にブラックアウトの現象を経験したことで、知識の定着につながったと思われる。

今後の展開として、引き続き学生に対する ERM の実習方法の確立と実習教材の開発を基に、乗船経験が 2～3 年の若年船員に対し有効な ERM の研修方法とその実習教材の開発も進めていきたい。

最後に本紀要を執筆するにあたり助言をいただいた先生方、ありがとうございました。

□参考文献

[1]船舶安全学研究会　“新訂船舶安全学概論”
株式会社成山堂書店　2018 年 3 月 28 日

# 語法研究に文献学的手法を取り入れる際の注意点

# Cautions in introducing a bibliometric approach to the study of word usage.

鈴木　聡
Satoshi Suzuki

Keyword:聖書(Bible),シェイクスピア(Shakespeare),版(Edition),検索サイト(Search engine),引用(Citation)

Abstract

I read with great interest "Semantic Change and Idiomatization of Would" by Dr. Yagi Katsumasa, Professor Emeritus of Kwansei Gakuin University, in "The Journal of English Grammar and Usage No. 29. In particular, Dr. Yagi is a leading figure in Phraseology in Japan. It is noteworthy that Dr. Yagi presented this paper, especially from the perspective of the history of English studies, which is very interesting. However, when I read the survey on the state of modern English, I realized that there were very serious problems with the following five points. The problems are related to (1) the Bible, (2) Shakespeare, (3) ideas about editions, (4) search engine and (5) citations. I will explain them in this order.

『英語語法文法研究第 29 号』に掲載された八木克正氏の「Would の意味変化とイディオム化」(以降八木(2022))を興味深く読んだ。八木氏は日本を代表する Phraseology の第一人者である。その八木氏が今回の論文を発表したことは注目に値し,中でも,英学史的な視点からの考察は非常に興味深いものがあった。しかし,近代英語の実態調査を読んだときに,以下の 5 点に大きな問題があることに気が付いた。その問題点は(1)聖書,(2)シェイクスピア,(3)版についての考え方,(4)検索サイト及び(5)引用といった文献学に関するものである。以下順を追って説明する。

## 2　聖書について

八木(2022)では,Wycliffe Bible, New Matthew Bible, King James Version, New Century Version, The Voice, Amplified Bible, Revised Geneva Translation の 7 点の聖書の版を取り上げているが,取り上げ方に問題がある。

令和 5 年 3 月 23 日受理

## 2.1 Wycliffe Bible

最初に Wycliffe Bible について述べる。八木(2022)では ① Matthew 27:22 と② Mark 15:12 を例に挙げている。

① What then shall I do of Jesus, that is said Christ[which is said Christ]？
② What then will ye that I shall do to the king of Jews？

八木(2022)によれば、今回使用した上記の例は Bible Gate[1)]という検索サイトを使用したことが明記(P116)されている。

しかし,筆者が所持している Bosworth and Waring(1888、以降 Bosworth(1888))では該当箇所の記述は以下の通りである

① What therefore shal I do of Jhesu, that is seid Crist?
② What therefore wolen ye I shal do to the king of Jewis?

さらに今回は Textus Receptus Bibles(https://textusreceptusbibles.com/Wycliffe/40/27：以降 TRB)という検索サイトを使用した。このサイトの趣旨は以下のとおりである、

MasonSoft Technology Ltd

From the Editor:

My name is Keith Mason, and for the last 12 years, I have managed a Christian Internet Publishing and Service company in the English Midlands. At MasonSoft Technology, we aim to spread the word of God by bringing together the resources to create a greater understanding of the scriptures.

MasonSoft Technology is supported by an independent group of Christian theologists, technologists, and linguists. We are not affiliated with any single church or religious organization. Instead, we are an interdenominational group studying Christian revelation and serving God's purpose.

Thanks to a willing group of friends and volunteers, MasonSoft Technology now has one of the largest collections of digital Reformation Bibles, Manuscripts and Bible Study texts available on the Internet today.

Keith Mason

Managing Editor
MasonSoft Technology Ltd

(以上 https://textusreceptusbibles.com/Home/AboutUs)

このTRBで掲載されている聖書は神学者,技術者,言語学者が関与しており,BGWが一般読書人を対象に現代用に綴りを変更した書籍を対象としているのに対し,TRBは対象としていないのを特徴としている。実際,筆者が後述するMatthew Bible1537のファクシミリ版とAuthorized Version1611[2)]の翻刻版と全く同じである。(もっとも,だからと言って,必ずしもこのサイトにも全く問題がないわけではないが,そのことについては後述する)。そこで,筆者はTRBを使用して,八木(2022)とBosworth(1888)の文章の比較を行った。なお,TRBの該当箇所は以下の通りである。

① What thanne schal Y do of Jhesu, that is seid Crist?
② What thanne wolen ye that Y schal do to the kyng of Jewis?

これを見ると,Bosworth(1888)とTRBの記述は八木(2022)が参照したBGWよりも類似していることがわかる。同時に八木(2022)で提示した記述は,上記二点と比較して,綴りが現代的であること,さらに[ ]の中に関係代名詞whichを使用した文の提示されている。これに対し,Bosworth(1888)とTRBでは関係代名詞whichを使用した文章は明示されていない。では,この差はどこから来るのか。実はTRBのWycliffeは1382年版に,そして,Bosworth(1888)は1389年版に基づいている。

そこで次に八木(2022)が基としたBGWについて調査を行った。その結果,八木(2022)で提示された上記2例と同じ文が以下に掲載されていた。

① https://www.biblegateway.com/passage/?search=Matthew%2027&version=WYC
② https://www.biblegateway.com/passage/?search=Mark%2015&version=WYC

さらに筆者は上記2例がこれまで提示したBosworth(1811)とTRBの文章と極端に異なるため,この掲載した文の基となった版情報を確認した。すると,このWycliffe版に関しては“Publisher: Terence P. Noble Copyright Information Wycliffe Bible Copyright © 2001 by Terence P. Noble. For Extensive Use, please email terry@smartt.com for further information.”(https://www. biblegateway. com/versions/Wycliffe-Bible-WYC/#copy)に記載されていることが判明した。さらにTerence P. Nobleを調査した結果,“Wycliffe's Bible: A Modern-Spelling Version of the 14th Century Middle English Translation”(https: //www.amazon.co.jp/-/en/Terence-P-Noble/dp/1470149389)という文献に行き当たった。つまり,BGWが掲載しているWycliffeの文はあくまでも現代英語の綴りに変更したものなのである。同書について以下の説明が記載されている。

A modern-spelling edition of the 14th-century Middle English translation of the Bible by John Wycliffe and John Purvey, the first complete English vernacular version, with an Introduction, Endnotes, Conclusion, and Bibliography. This is a compilation of Wycliffe's New Testament, the 2011 revision of the first modern-spelling edition of the Wycliffe New Testament, published in 2001, and its companion volume, Wycliffe's Old Testament, a modern-spelling edition, also published in 2001 and revised in 2010.

そして,この文献の刊行が 2001 年であることから,先述の BGW の版情報とも一致した。このことから,八木(2022)が提示し 2 文は原典に基づいた文から引用されていないということが判明した。もちろん,原典ではなく,現代的な綴りで問題ない場合もある。例えば,我々が論語の文を引用するときは書き下し文で書かれた文献を採用し,原文を記載しない場合もある。しかし,今回の場合は,近代英語の実態調査であり,文献学的な面での調査である。そのため,原典に忠実でなくては,時代ごとの語彙・語法の変遷を正確に把握することはできない。実は,原典に基づかなかったために八木(2022)は次の New Matthew Bible で決定的なミスを犯している。

## 2.2 New Matthew Bible

筆者は八木(2022)が Wycliffe 版の次に New Matthew Bible を 16 世紀の代表的な聖書として提示した時に違和感を覚えた。その理由は,英訳聖書の歴史を顧みた時に,Wycliffe 聖書の次に取り扱われる聖書は Tyndale 版だからである。そして，この Tyndale 版をもとにして作成された聖書が Matthew Bible である。正確に言うならば,Tyndale 版と Coverdale 版をつなげ合わせたものが Matthew Bible である。さらに言えば,筆者は 16 世紀に New Matthew Bible が存在したということをこれまでに聞いたことがなかった。そこで,八木(2022)を注意深く読んでみると,「(21) New Matthew Bible (1537-1549. Matthew Bible の改訂版）」(P123)と記載されているのに気が付いた。そこで,Matthew Bible と Tyndale 版に関して永嶋大典『英訳聖書の歴史』（研究社、1988、以降永嶋(1988)）で確認すると,New Matthew Bible が 1537-1549 年に出版されたのではなく、Matthew Bible の出版年が 1537-1549 であることが確認できた。この結果,「New Matthew Bible(1537-1549. Matthew Bible の改訂版)」ではなく,「New Matthew Bible (Matthew Bible (1537-1549)の改訂版）」ということである。さらに永嶋(1988)は Matthew Bible の中身は「ティンダル訳聖書とガヴァディール訳聖書をつなぎ合わせもの」（P78）,「新約は再び「ティンダル訳」【ただし 1535 年版】に依存している。」(P78)と記載されていることから,Matthew Bible を調査するのであれば、Tyndale 版と Matthew 版の両方を調査する必要があることも再確認できた。だが,八木(2022)は① What shall I do then with Jesus who is called Christ?と② What will you have me do then with him whom you call the king of the Jews? の 2 例を挙げ,「(21) ②の what will you have me do は Shakespeare の時代より先だが,この will を丁寧な would に換えて Shakespeare 時代につながったと考えることができる。」(P124）,「6. 総合的考察 6.1.まとめ　これまでの考察と実例の検討から,次

のことが明らかになった。① Shakespeare 以前から will/would you have NP do の形があった。」(P 128)」と結論付けを行っている。

そこで,再度八木(2022)が参考にした BGW について調査を行った。すると,確かに八木(2022)に記載された 2 例を確認することができた。

① What shall I do then with Jesus who is called Christ?(https://www.biblegateway.com/passage/?search=Matthew%2027&version=NMB)
② What will you have me do then with him whom you call the king of the Jews? (https://www.biblegateway.com/passage/?search=Mark%2015&version=NMB)

しかし,筆者はこの New Matthew Bible についてもう少し詳細を知りたいと思い,さらに調査を行った。すると,New Matthew Bible は現代人が Matthew Bible を読むには読みづらいために現代に合わせて改訂されたものであり,しかも 21 世紀になってから刊行されたもの,つまり,現代英語であることが判明した。このことは BGW にも記載されていた。

Version Information

The New Matthew Bible (NMB) is a gentle update of the 1537-1549 Matthew Bible, which was an important Bible of the English Reformation. It contained the Scripture translations of two men, William Tyndale and Myles Coverdale.

The New Matthew Bible is not a new translation but is the original work with only obsolete spelling, language, and grammar updated. The New Testament has been completed-, and the Old Testament is in progress. The editor, Ruth Magnusson Davis, works from an original 1549 rag paper Matthew Bible, a reprint of the 1537 edition. (https:// www. biblegateway.com/version/New-Matthew-Bible-NMB/)

さらに詳しく見ていくと,以下の情報があることにも気が付いた。

The project to update the Matthew Bible

In 2009, editor Ruth Magnusson Davis, a retired lawyer with a degree in languages, founded the New Matthew Bible Project to re-publish the Matthew Bible with minimal updating. William Tyndale once wrote, “words that are not understood, profit not.” The goal of the NMB Project is to make the Matthew Bible understandable for the profit of readers today. In 2016 the New Testament was published as *The October Testament*. Davis has also written the world’s only history of the Matthew Bible, called *The Story of the Matthew Bible*, in two parts.

Few are aware that the Matthew Bible formed the base of the Great Bible, and then the Geneva Bishops' and King James versions, which were all subsequent revisions. However, people will recognize the familiar language. Davis has guarded the historic language and all the truth, spirit, and teaching of the original work, yet with careful attention to grammar and linguistics to make the meaning clear.

*The October Testament*, the New Testament of the New Matthew Bible

More information about the New Matthew Bible Project, is at:
www.baruchhousepublishing.com
www.newmatthewbible.org
（以上 https://www.biblegateway.com/versions/New-Matthew-Bible-NMB/）

これを見ると,New Matthew Bible は 2009 年から始まり,2016 年に新約聖書が完成していると記載されていることがわかる。このことからもわかるように,New Matthew Bible の英語は 16 世紀の英語ではなく,21 世紀の英語だということである。

しかし,New Matthew Bible が Matthew Bible(1573-1549)を念頭に置いている以上,その基となった Tyndale 版の英文が New Matthew Bible に使用されていたのではないかと疑念を持つ人もいるだろう。

そこで,筆者は上記の Bosworth(1888)と The New Testament Translated By William Tyndale 1534 A Reprint of the Edition of 1534 with the Translation Prefaces and Notes and the Variants of the Edition of 1525 Edited for The Royal Society of Literature by Hardy Wallis with an Introduction by the Rt.Hon. Isaac Foot (Cambridge University Press 1939、以降 RSL) ,さらに Matthew Bible のファクシミリ版である Matthew's Bible 1537 Edition Combining the translation of William Tyndale & Myles Coverdale Edited by John Roger With An introduction by Dr. Joseph W.Johnson(Hendrickson Bibles, 2009,以降 1537 版)と TRB の四点を使用して調査を行った。

①What shall I do then with Jesus who is called Christ?

What shall I do then with Jesus ,which is called Christ?(Bosworth 1888)),
What shall I do then with Iesus which is called Christ?(RSL, 1939)
What shall I do then with Jesus which is called Christ?(1537 版, 2009)
What shall I do then with Iesus which is called Christ? (TRB：https:// textusreceptusbibles.com/Tyndale/40/27)

② What will you have me do then with him whom you call the king of the Jews?

What will ye then that I do with hym whom ye call the kynge of the Jewes? (Bosworth 1888)
What will ye then that I do with him whom ye call the kynge of the Iewes?(RSL,1939)
What will ye then that I do with him who ye call the kynge of the Jewes? (1537 版,2009)

①の例文ではその他の例文と使用されている関係代名詞が異なっている。②の例文は八木(2022)の What will you have me do then with him whom you call the king of the Jews?と全く異なっているのが一目瞭然である。この上記四点の綴りが異なっている理由は,Bosworth(1888)は 1526 年版を,RSL(1939)と TRB は 1534 年版を,Joseph W.Johnson (2009) は 1537 年版を使用しているからである。なお,②では TRB の例文を上げていないが、その理由は後述する。本来、Matthew Bible を調査するのであれば、筆者のように Tyndale 版と Matthew 版の両方を調査する必要がある。しかし,残念ながら,八木(2022)で Tyndale 版も,Matthew 版の本体も調査した形跡が一切見られない。それどころか,21 世紀に改訂された New Matthew Bible を 16 世紀に出版された聖書として誤解して論じた結果,間違った指摘を行ってしまった。むしろ,筆者としては 1526 年版と 1534 年版,1537 年版で②の例文の関係代名詞が whom から who に綴りが変化してきていること,I と J の揺れを指摘しておきたい。

## 2.3 Authorized Version of the Bible (King James Version)に ついて

次に Authorized Version of the Bible(AV)について調査を行った。八木(2022)は King James Version という言い方をしているが,もともとイギリス(この聖書はご存じのようにイギリスで出版されたものある)では Authorized Version of the Bible(AV)と呼ばれており,King James Version といういい方はアメリカでの呼び方[3)]である。そのため,八木(2022)で提示された BGW においても Authorized(King James )Version と King James Version の 2 種類に分類している。通常であればどちらでも構わないが,歴史的に考えれば,Authorized Version の方が知られていること,また BGW の版情報においても Authorized (King James)Version の版情報の方が,King James Version の版情報よりも詳細に説明されているため,ここではあえて Authorized Version of the Bible の略語である AV を採用したことを予め断っておく。また,八木(2022)の(14)Would to God we had died in the land of Egypt(欽定訳聖書 *Exodus*16:3)では出典として「欽定訳聖書」と記載しているが,聖書の項目では King James Version と使い分けているが,その使い分けに関しては説明がないので不明である。なお,(14)の例の問題点については後述する。

① What shall I do then with Jesus which is called Christ?

What shall I doe then with Iesus, which is called Christ? (TRB)
What shall I doe then with Iesus, which is called Christ? (研究社版(1985))
What shall I do then with Jesus which is called Christ?(Zondervan(1991))[4)]

② What will ye then that I shall do unto him whom ye call the King of the Jews?

What will yee then that I shall do vnto him whom ye call the King of the Iewes? (TRB)
What will yee then that I shall do vnto him whom ye call the King of the Iewes? （研究社版(1985)）
What will ye then that I shall do unto him whom ye call the King of the Jews? (Zondervan(1991))

八木(2022)で扱われている AV は一見して,TRB と異なっている点がいくつかあるのかわかる。例えば,TRB の doe の箇所が do,Iesus が Jesus,yee が you,vnto が unto,Iewes が Jews になっている。しかも,TRB で記載されている文は筆者所蔵の The Holy Bible An Exact Reprint in Roman Type, Page for Page of the Authorized Version Published in The Year 1611 with an Introduction by Alfred W, Pollard(OUP, Oxford, Kenkyusha, Tokyo,1985、以下研究社版(1985))と同じものであり,八木(2022)とその基になった BGW で扱われているのは上記に挙げた Zondervan(1991)と一緒である。では,この差はどこから来るのか。実は,先述した,筆者が所蔵している研究社版(1985)には寺澤芳雄著『翻刻版　欽定英訳聖書―文献学的・書誌学的解説』(以下寺澤(1985))という解説書がついている。そしてこの寺澤(1985)には「付録 AV 諸版校合表」という項目がある。そこでこの項目を調べると以下の記述があることに気が付いた。

| | AV | Later Editions |
|---|---|---|
| Matthew | | |
| : | | |
| : | | |
| 27：22 | Pilate said | Pilate saith,1629. |

(寺澤(1985)、P102)

見てわかるとおり,偶然にも今回の調査項目であるマタイ 27 章 22 節が含まれていたのである。そこで,再度 BGW と Zondervan(1991),TRB 及び研究社版(1985)の記述と BGW の記述に関する調査を行った。

Pilate saith unto them, What shall I do then with Jesus which is called Christ? (BGW)
Pilate said vnto them, What shall I doe then with Iesus, which is called Christ? (TRB)
Pilate said vnto them, What shall I doe then with Iesus, which is called Christ? (研究社版(1985))

その結果,TRB と研究社版(1985)はオリジナルの 1611 年版に基づいており,BGW は 1629 年版又はそれよりも後の版に基づいている可能性があるということが判明した。以上の点から,もしも語形変化等に関して文献学的に扱う場合は,オリジナルの 1611 年版と後の版の違いにも必然的に気を使う必要がある。少なくとも,取り上げる例文が 1611 年版であると明示するのであるならば,1611 年版を確認しなくてはならない。なお、同書ではマルコ 15 章 12 節に関する言及はなかったが,これはマルコに関しては確かに綴りの変化はあれ、時制の変更がなかったからだと考えられる。なぜなら,1611 年版ではマタイ 27 章 22 節では said と過去形が使用されているのに対し,1629 年版では saith と 3 人称単数現在形が使されているからである。また,八木(2022)で使用した② What will you have me do then with him whom you call the king of the Jews?という表現が仮に AV の 1629 年版で記載(実際にはこれまで述べてきたように記載されてはいないが)されていたとしても，それはシェイクスピア以後になることも付け加えておく。なぜなら，シェイクスピアの生没年は 1564-1616 で今回参照した 1629 年版はシェイクスピアの没後 10 年以上経過してから出版されているからである。

## 2.4 聖書の版について

次に New Century Version, The Voice, Amplified Bible, Revised Geneva Translation の取り上げ方である。

各書の詳細は以下のサイトに譲るが、1 点だけ例として The Voice を挙げておく。
https://www.biblegateway.com/versions/New-Century-Version-NCV-Bible/
https://www.biblegateway.com/versions/The-Voice-Bible/
https://www.biblegateway.com/versions/Amplified-Bible-AMP/
https://www.biblegateway.com/versions/Revised-Geneva-Translation-RGT-Bible/)

The Voice に Previously most Bibles and biblical reference works were produced by professional scholars writing in academic settings. The Voice uniquely represents collaboration among scholars, pastors, writers, musicians, poets, and other artists.とあるように従来の聖書学者だけではなく,牧師,作家,ミュージシャンそして詩人といった幅広いジャンルの人々とのコラボレーションとなっている。さらに読んでいくと,The Voice は Wycliffe, Matthew そして AV とは異なり訳し方が従来の word for word だけではなく thought for thought で訳出されていることが以下の記述から判明した。

Two other related descriptors are used to situate a Bible translation in the field. Some claim their translations are "word-for-word" in contrast to those that are "thought-for-thought." Word-for-word translations generally claim to be more literal and therefore superior to those that are thought-for-thought. The critique is sometimes made that thought-for-thought

translations reflect the interpretive opinions of the translators and are influenced by the contemporary culture more than word-for-word translations. (https://www.biblegateway.com/versions/The-Voice-Bible/)

確かに各個人が様々な版で聖書を読むのは自由だが,年代的な言語変化を調査する場合には統一されたテキストを使用しなければならない。さらに言えば,用途や目的によって異なる聖書を単純に現代英語版だからとの理由だけで,それまでの Wycliffe や AV と同列に並べて版の比較・検討をおこなうというのは疑問が残る。「では版の比較はどのように行ったらいいのか」と言えば,基本は以下のような配列になる。この配列は筆者の独断によるものではなく,2014 年にバイブルハウス南青山の HP に英語聖書の歴史に関する特集（https://biblehouse.jp/?mode=f16）の中で二松學舍大学国際政治経済学部教授の本多峰子氏の解説(以降本多(2014))で同様の記述が掲載されている。ただし,本多(2014)では Wycliffe の記述から開始されており,OE に関する言及はなされていない。なお,括弧内の数字は全て出版年である。

1　OE(995)[5)]
2　Wycliffe(1389)
3　Tyndale (1526)
4　Authorized Version(AV)(1611)
5　Revised Version(RV)(1885)
6　American Standard Version(ASV)(1901)
7　Revised Standard Version(RSV)(1952)
8　New Revised Standard Version(NRSV)(1989)
9　English Standard Version(ESV)(2001)

このうち１と２はラテン語から，３以降はギリシャ語とヘブライ語からの翻訳である。なお,RV と ASV はほぼ同じものだが,若干異なる箇所もある。もともと RV を作成する際にアメリカの聖書学者も参加したが，その意見が反映されなかったために作成したのが ASV である。そして RV を改訂したのが,RSV,そしてそれをさらに改訂したのが NRSV である。そして NRSV の後にできたのが ESV である。ただし,注意しなければならないのは,ESV の Preface を見ると，NRSV への言及がなく,RSV への言及に留まっている。そのため,ESV は NRSV ではなく,RSV の改訂版として作成されたものと判断できる。実は、筆者は現在各聖書の版を使用して言語変化の調査を行っているが,ESV は NRSV の表現よりも RSV の表現を踏襲している傾向がたびたび見られることも付言しておく。残念ながら,八木(2022)では,用途・目的等を一切度外視し,単純に現代に出版されている聖書という位置づけだけで版の重要性を無視して調査を行った。その結果,本来ならば New King James Version(NKJV)や The Revised Geneva Translation(RGT)と同じ位置づけの New Matthew Bible (NMB) を 16 世紀の英語と判断し,間違った結論を導き出してしまったのである。

## 3　Shakespeare の作品の版について

そしてこれは次の「Shakespeare の作品から」にもいえることである。これは上記 2 点ほど深刻ではないが,文献学的にいえば,八木(2022)が今回提示した作品がどの版に基づいて論述しているのかが不明である。中でも気になったのが,以下の 3 例である。

(15) They that, when Richard lived, would have him die.(2 HenryⅣ, Ⅰ.i.101)
(16) I would have nothing lie on my head:…(Merry Wives of Windsor, Ⅱ.i.167-168)
:
:
(19) And that you would have me to do?(Othello, Ⅳ. ii.229)

例えば,筆者が所持している、Peter Alexander(1951 以降 Alexander(1951))では(15)は They that, when Richard liv'd, would have him die.に,(16)は I would have nothing lie on my head.となっている。つまり(15)は省略形を,(16)は punctuation が異なっているのである。そこで筆者は,八木(2022)で提示された(15)と,Alexander(1951)の違いを確認するために First Folio(1623)の復刻版を使用して該当箇所の再調査を行った。その結果,First Folio(1623) は They that, when Richard liv'd, would have him die.となっており,Alexander(1951)と同じであることが判明した。また,(16)に関しては I would have nothing lye on my head:となっており, (16) の punctuation が First Folio(1623)と同じで Alexander(1951)が異なっていることが判明した。ただし、(16)の lie は First Folio(1623)では lye で綴りが異なっていることから、First Folio を使用していないことが判明した。つまり、この時点で(16)の例文を 17 世紀の英文の例として提示するのは必ずしも適切とは言えないということである。また、(19)と Alexander(1951)は同じ文章が掲載されているが,First Folio(1623)と対照させた結果,(19)と Alexander(1951)は文尾が Question mark(?)で終了しているものの,First Folio(1623)では Full Stop(.)で終了していることが判明した。なお,筆者は上記 3 か所の引用箇所について赤字を入れて書き換えたが,これについては後の「6. 引用について」で詳述するが,(15)のヘンリー四世のように Part 1 と Part 2 がある場合は,作品の前にアラビア数字を置いて,どちらのパートであるかを先に出すというのが基本である。また,八木(2022)で示した引用箇所は Act が異なっており、正確には Act1,Scene 3,L 101 で赤字のように記載する。なお,Line は使用する版に依って変動があるが,今回は Alexander(1951)に基づいたものである。

ところでこの Shakespeare をどの版で読むべきかという点に関しては,筆者がこの八木(2022)を読んで思いついたのではなく,既に半世紀以上前にシェイクスピア学者の日高八郎(1920-1997)氏が『斎藤勇博士古希記念論文集』(研究社、1956)の中で「Shakespeare をどの版で読むべきか」(以降日高(1956))[6]を発表している。日高 (1956)はこの中でシェイクスピアの作品として Tempest[7]を取り上げ,版の種類として First Folio, Globe 版,Oxford 版,New Shakespeare 版,Penguin 版,Alexander 版,Sisson 版,Arden 版,市河三喜版,小林淳男版の 10 点を挙げているが,実際に調査したのは First Folio から Sisson 版までとし,その 7 点を選んだ理由[8]も述べている。そして日高(1956)は各版の違い,中でも punctuation における意

味の違いについて言及[9]している。最終的には日高(1956)はどの版でも構わない[10]と述べているが,それは日高が想定しているのは専門家ではなく,general reader(一般読者)[11]だからである。事実,日高(1956)は「しかし,くどいようだが,小論の目的はSha.の本文乃至その他の専門研究者にとって,どの版が好ましいのかを論ずることにあるのではない。Sha.の専門研究者にとっては(単に本文研究する人々に限らず,)おそらくQuartoやFolioの諸版は座右の書であるはずである。しかし,一般読者にSha.の古版をおしつけることは,pedanticにすぎ,悪い意味でacademicといえよう。つまり現実において一般読者の要求に應ずる版が必要となってくるのである。現に以上の諸版も,Sha専門家のためのeditionであると同時に,それ以上に一般読者のための全集という意図があることは明らかである。」(P690-P691)と述べている。今回,八木(2022)が提示した文献学的な論考の場合はやはり日高(1956)同様どの版を使用したのか,またその版を選択した理由も簡単に述べる必要があった。なぜなら版に依ってpunctuationはもちろん,単語の語形も変化する。それによって,単語の語形がいつごろ変化したのか,あるいはいつごろまでにはその用法が一般的に広まったのかを想定する資料となるからである。そのため,文献学的な例として挙げる場合は,現代的な綴りではなく,当時の綴りやpunctuationを確認するためにどの版を使用したのかを明記する必要があった。残念ながら,八木(2022)ではその点について一切言及されていない。確かに,八木(2022)の最初の脚注によれば,今回の調査にはShakespeare Searchという検索サイトを使用したと記載されている。だが,筆者もこのサイトを確認したが,この検索サイトがどの版に基づいて作成されたのかについては不明であった。もちろん,一般的な読者がシェイクスピアの名言等を検索する分にはこのようなサイトは便利かつ有用であることは間違いない。しかし,研究対象として,なおかつ文献学的に分析する場合は原典を調査する必要が出てくる。残念ながら,八木(2022)の場合は版情報や原典を確認せずに,検索サイトのみを使用して調査を行ったことで,今回の論考で誤った結果を導き出すことになってしまったと考えられる。補足になるが,筆者が先述した一般読者と日高(1956)の考える一般読者には若干開きがある。日高(1956)の考えるgeneral readerとはthe educated but non-scholarly publicであり,日高自身がそれに含まれている[12]との考えから,日高が想定している読者層は現在の一般的な読者層よりも高い層であると考えられる。

## ４　文献学における版の重要性について

ここで,文献学における版の重要性についてあらためて例を出しておく。例えば,新約聖書のマタイによる福音書6章9節から13節にはいわゆる「主の祈り」が記載されている。しかし、一般的にプロテスタント系[13]の教会で主の祈りをする場合は以下のような文である。

天にまします我らの父よ。
願わくは御名（みな）をあがめさせたまえ。
御国（みくに）を来たらせたまえ。
みこころの天になるごとく、
地にもなさせたまえ。

我らの日用（にちよう）の糧（かて）を
今日も与えたまえ。
我らに罪を犯すものを我らが赦（ゆる）すごとく、
我らの罪をも赦したまえ。
我らを試（こころ）みにあわせず、
悪より救いいだしたまえ。
国と力と栄えとは、
限りなく汝（なんじ）のものなればなり。
アーメン。

ところが現在日本で刊行され,プロテスタント系で使用されている『口語訳聖書』,『新共同訳聖書』、『新改訳聖書 2017』には「国と力と栄えとは,限りなく汝（なんじ）のものなればなり。アーメン」に該当する箇所が 13 節の本文には記載されていない。これは,初期キリスト教ではなかったもので,あとから付け加えられたものであるとの考えに基づいている。事実,岩隈直(1989)『希和対訳新約聖書マルコによる福音書上』(山本書店）で扱われているギリシャ語テキストには該当箇所は含まれていない。岩隈(1989)によれば,「なぜなら御国と権能と光栄とはえいえんにあなたのものですから,アーメン」を入れる写本があるが,この頌栄は後のものであろう。」(P74)と述べていることからも,上記の考えを支持していることがわかる。Wikipedia にも「主の祈り」の最後の頌栄部分は,伝統的なラテン語訳聖書（ヴルガータ）[14]には書かれておらず,ヒエロニムスがヴルガータを訳した時代よりも後の時代においてギリシャ語聖書の『マタイによる福音書』6 章 13 に付け加えられたものと考えられる。」(https: //ja.wikipedia.org/wiki /%E4%B8%B B%E3%81%AE%E7% A5%88%E3%82%8A)と書かれているが,筆者はこの見解には疑問を持っている。その理由は,ギリシャ語からゴート語に訳出したウルフィラと上記のウイキペディアでも言及されているヒエロニムスの生没年によるものである。なぜなら,ウルフィラは 311 年頃から 383 年[15]の人物で,ヒエロニムスは 347 年から 420 年[16]の人物だからである。そして,ウルフィラの訳出したゴート語聖書にはこの頌栄箇所が記載されている。しかも,ウルフィラのゴート語訳聖書は「奴隷訳」といわれるぐらいギリシャ語聖書に忠実であることが知られている。実際,筆者もゴート語訳とギリシャ語聖書を対照して四福音書を読んだが,確かに忠実な訳であった。このことから,私見としては既にウルフィラの時代にギリシャ語聖書にいわゆる頌栄部分が含まれたテキストがあったものと考えている。なお,筆者が参照したゴート語訳の聖書及びゴート語関係の文献は以下の 7 点である。

1　Dr, Mortiz Heyne 著 Uifila ode runs erhalten Denkmäler der gotischen Sprache. Text, Grammatik und wörterbuch,1874(以降 Heune(1874))
2　Wilhelm Streitberg 著 Die Gotische Bibel,1908-1910, (以降 Streitberg(1908-1910))
3　Wilhelm Streitberg 著 Die Gotische Bibel 第 2 版,1919, (以降 Streitberg (1919))
4　Wilhelm Streitberg 著,Piergiuseppe　Sccardigli 補遺 Die Gotische Bibel,2000(以降 Streitberg (2000))

5　W.Braune・K.Helm 共著 Gotische Grammatik,1952,(以降 Braune(1952))
6　Joseph Bosworth・George Waring 共著　The Gospels -Gothic,Anglo-Saxon, Wycliffe and Tyndale Versions(1888)
7　Joseph Wright 著 Grammar of the Gothic Language Second Edition,1954(以降 Wright(1954))

Heyne(1874)はゴート語のテキストと文法や語彙を扱っているが,対照すべきギリシャ語聖書は扱っていない。Streitberg(1908-1910)は最初テキストだけを 1908 年に,語彙集を 1910 年に出版した 2 巻本で刊行された。その後,内容を若干訂正するとともに 1 巻本として刊行されたのが Streitberg(1919)である。さらに,Piergiuseppe Sccardigli が補遺を行い,新たに 1 巻本で刊行されたのが Streitberg(2000)である。Streitberg(1908 年から 2000 年に出版された全ての版,以降(1908-2000))は Heyne(1874)とは異なり,ゴート語だけではなく,対訳としてギリシャ語聖書を反対側に掲載している。5 の Braune(1952)はゴート語の文法書だが,Reading テキストに上記の箇所が含まれている。また,6 の Bosworth(1888)はゴート語,古英語,Wycliffe, Tyndale の四福音書がすべて含まれている。Wright(1954)は英語によるゴート語の文法書であるが,四福音書から抜粋されたものであり,部分的にゴート語とギリシャ語の対訳形式で扱っているものとそうでないものとに分かれている。なお,この文献は左側にゴート語,右側にギリシャ語が記載されているが,この記載方法は文献によって異なる。例えば,Stritberg(1908－2000) では左側にギリシャ語本文が,右側にゴート語本文が記載されている。そして,この 7 点に共通するのはいずれも主の祈りの頌栄箇所とみなされている「国と力と栄えとは,限りなく汝（なんじ）のものなればなり。アーメン。」がゴート語本文に含まれているということである。なお,Streitberg のギリシャ語対訳聖書と Wright の文法書に関しては,ギリシャ語本文にも頌栄部分が含まれている。では,ウルフィラが底本としたギリシャ語テキストは何かといえば,「今日ビュザンティオン本文（Byzantine text）と称されるものの最も初期のタイプであって,4 世紀後半にクリューソストモス（Chrysostomus,アンティオキア生まれ,コンスタンティノポリス主教[398-404],407 年歿）が用いた本文はこれと非常に近いものであったらしい。－中略―しかし,底本が最初期のビュザンティオン本文の有力な 1 写本であったことは確実であるとしても,それを厳密に決定することは所詮不可能である。」（千種眞一『ゴート語の聖書』,大学書林,1990,P12）と述べられている程度のことしか判明していない。なお,Wikipedia では「伝統的なラテン語訳聖書（ヴルガータ）には書かれておらず」とあるが,果たしてそれもどこまで真実なのだろうか。確かに原(2010)にも「ヒエロニムス（Eusebius Sophronius Hiero-nymus、340 年頃～420 年）が完成したとされるローマ・カトリック教会のラテン語訳聖書「ウルガタ Vulgata」では,どうなっているのか。「ウルガタ」は、1592 年 版（versio Clementina）等,いくつかの重要な校訂版を経て,1979 年の「新ウルガタ（Nova Vulgata)」に至っている。Nestle-Aland, Novum Testamentum Latine（Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1984）は,その基礎の上に出版されている)。これによると,「マタイによる福音書」6 章 13 節に頌栄の言葉はない。」[17]とあるが,果たしてそこまで断言できるものなのだろうか。筆者がこのように考えるのは(1) エラスムス校訂『新約聖書 1516 年版復刻版』,臨川書店,1989,(2)Biblia Sacra Sive Testamentum Vetus et Novum Ex Linguis Originalibus in Linguam Latinam Translatum Additis Captium Summariis et Partitionibus à Sebastiano Schmidt, SS.Th.D, Sumptibus JOH FRID SPOOR Bibliop, Argentorati,

1697, (3)Biblia Sacra VVLGATE EDITIONIS Sixti et Clementis VIII PONTT. Maxx IVSSV Recognita Atqve Edita, Romae,1859、(4)Biblia Sacra Vulgate, Deutsche Bibelgesellschaft, 1994 の 4 点の文献を所蔵しているからである。これらによれば,(1)と(2)は quia Tuum eft regnum & potential &gloria in fecula;Amen と確かに頌栄の部分が記載されている。そして,(3),(4)に関しては頌栄部分が記載されていない。(1)に関し,水垣(1989)は「エラスムスは文献学者として,なるべく多くの,良質の写本を基礎にしようと考えたはずであるが,実際に用いたのは数種類の小文字写本にとどまる。これらは 12,13 世紀の写本で,ビザンチン・テクストあるいはコイネー・テクストなどと呼ばれる,本文学上価値の低い本文を含むものである。バーゼルにいたエラスムスは,小文字写本より価値の高い,8 世紀の大文字写本 E07(Codex Basilensis)を利用することも不可能ではなかったであろうが,これは彼の考慮には入らなかった。新約の写本で新約全巻を含むものは,むしろ稀である。エラスムスが数種類の写本を用いたといっても,巻によって異なる写本を基にせざるを得なかったのは当然である。特に「ヨハネの黙示録」を含む写本は,ロイヒリン (Reuchlin) から借用して初めて見ることができたが,これも末尾の 22 章 16―21 節を欠くものであったから,エラスムスはやむなくこの部分を「ウルガータ」からギリシャ語に訳しかえして本文に入れた。もとより誤りを避けることはできなかった。他の箇所でも,ラテン語本文に基づいてギリシャ語本文に修正を加えたところがある。単一のギリシャ語写本しかない場合,それが『ウルガータ』とくい違っていても,『ウルガータ』の読み方をくつがえすだけの証拠力があるとは必ずしも言えないからである。―中略―エラスムスが採用したギリシャ語本文の根本的な問題は,何よりも,比較的新しい小文字写本を基礎としたことにある。これらの写本には、元来の本文にはない句や文が付加されていたり,べつの読み方がとられている箇所があり,エラスムスは必然的にこれらを採用することになった。以下略。」(P14-P15)[18]とあること,さらにヒエロニムスよりも以前のウルフィラのゴート語訳聖書では頌栄部分が含まれていることから,既に 4 世紀のビザンチン写本には頌栄の箇所が含まれていた可能性は高い。この他にもゴート語訳聖書にラテン語の影響も少なからず影響があることも指摘[19]されている。なお,千種(1990)に「ウルフィラの死後 20 年ほどしか経ていない 5 世紀初めには,ゴート人聖職者スンニア(Sunnnia)とフレテラ(Fretela)がゴート語訳旧約聖書詩篇の校訂作業にあたり,いくつかの異同箇所の真正の読み方について,当代の権威ヒエローニューモス(Hieronymus)[20]に助言を仰いでいる。」(P13)とあることからも,ゴート語訳聖書の新約部分はウルフィラが,旧約はそのあとのゴート人聖職者が完成させており,ヒエロニムスの影響は新約には及んでいなかったと考えられる。もしも及んでいた場合は,Vulgate で記載されていないことから判断しても,ゴート語訳聖書も頌栄箇所を削除されていた可能性が考えられる。なお、忘れてはならないのはエラスムスは文献学者でもあるが同時にカトリックの司祭であったという点である。確かにギリシャ語本文は比較的新しい写本だったかもしれないが,上記の記述からもわかるようにヴルガータはきちんとしたものがあったはずである。さらに言えば,エラスムスが司祭としてこの頌栄箇所が不適切であると考えれば,ヴルガータには含まれていないことからも,エラスムスは該当箇所を削除したはずである。しかし,エラスムスの『新約聖書』1516 年版のギリシャ語はもちろん,ラテン語にも頌栄は記述されている。このことからも,エラスムスが参考にしたヴルガータの中に頌栄箇所が本当に存在していなかったのかが疑問である。なお,この 3 年後の 1519 年に出版されたエラスムスの『新約聖書第二版』が英国の AV やドイツのルター訳の底本[21]となったのはよく知られているが,AV もルター訳もプロテスタントの聖書で

ある。(2) の Sebastian Schmidt はルター派の牧師(プロテスタント)であるが,ラテン語訳聖書の出版にも関係している。そしてこのラテン語訳聖書にはエラスムスの『新約聖書』1516 年版と同様頌栄が含まれている。なお,Schmidt(1697)には Vulgate(ヴルガータ)という文字はないが,これも Schmidt がプロテスタントだったことが影響しているものと考えられる。なぜなら,ヴルガータはカトリック教会に関係しているからである。

以上版の重要性について述べた。もちろん,筆者の論でも仮定の部分が少なくない。しかし,仮定の話をする場合でも,文献学的記述を行う場合には常に根拠資料を提示することが大事であることを述べておきたい。

## 5　検索サイトについて

次に検索サイトについて述べておく。現在,様々な検索サイトが存在するが,その全てが必ずしも研究用に適しているわけではない。確かに,各種文献を収集・調査するのは金額的にも時間もかかるのは確かである。それに対し,検索サイトを使用すれば安価で時間短縮できて便利なのは間違いない。しかし,そういった検索サイトにも過ちや研究には不向きな版を使用しているケースがあることを忘れてはならない。そしてそのような検索サイトを研究用に使用する場合は,そのサイトを吟味・調査したうえで使用しなければならない。同時に検索サイトも誤解や誤植を含んでいることも忘れてはならない。仮に、そのようなことがあった場合は,そのサイト管理者に連絡を取り内容の確認・訂正を求めることが可能か否かも利用する場合は確認しておく必要がある。残念ながら,八木(2022)の提示した Shakespeare Search という検索サイトにはそういった情報がなかった。もしかしたら,筆者が気づかなかっただけという可能性もあるかもしれないが,その場合でもわかりにくいという時点で改善する必要があるはずである。これに対し,筆者が提示した TRB には上述した情報が記載されている。もっとも,この TRB に関しても誤記が必ずしもないわけではない。筆者もこのサイトの誤記に気が付き, 確認してほしい旨連絡し,修正されたものもあるが,変更されていない箇所もある。例えば,Tyndale 版のマルコ 15 章 12 節では。TRB は What will ye then that I do **wt** him whom ye call **ye** kynge of **ye** Iewes? (https://textusreceptusbibles.com/Tyndale/41/1) と記載されている。だが、RSL では What will ye then that I do with him whom ye call the kynge of the Iewes?と記載されている。これの何が問題かといえば,TRB の赤字の箇所が RSL と異なっている点にある。そして,TRB も RSL も使用している版はともに 1534 年版である。しかも RSL はファクシミリ版であり,その箇所には wt は with,ye は the と記載されていることから,赤字箇所は TRB のタイプミスである。そこで,筆者はこのサイトにその旨を連絡したが,今のところ修正されていない。このことからもどんなサイトでも誤記・誤解は存在するということを覚えておかなければならない。なお,同様の理由で,筆者が,Shakespeare の検索サイトを使用する場合には George Mason University の Open Source Shakespeare(https://www.Opensource shakespeare.org/)の方を参照する。その理由はこのサイトの以下の記述にある。

Open Source Shakespeare attempts to be the best free Web site containing Shakespeare's complete works. It is intended for scholars, thespians, and Shakespeare lovers of every kind. OSS includes the 1864 Globe Edition of the complete works, which was the definitive single - volume Shakespeare edition for over a half century.

これを見ると元々大学 が関与しているだけあって研究用としても考えられたサイトであり,しかもGlobe 版が採用されていることがわかる。補足になるが,Open Source Shakespeare で(15)の文章を検索したところ,このサイトの文は,(15)の文を除き,First Folio(1623)と Alexander(1951)と同じであった。また,(16)に関しては punctuation を含めこのサイト,すなわち Globe 版と同じであった。(19)は First Folio(1623)を除き,Alexander(1951)及び Globe 版も同じであることが判明した。なお,Globe 版は 19 世紀であることから,八木(2022)が使用した Shakespeare Search で使用されている版が Alexander(1951)よりも新しい版である可能性が考えられる。

## ６　引用について

(12) I Would fain know.(William Shakespeare, M*uch Ado About Nothing* ,Ⅲ.v.28)

I Would faine know what you haue to say. (First Folio (1623))
I Would fain know what you have to say. (Alexander (1951))
I Would fain know what you have to say. (Shakespeare Search)
I Would fain know what you have to say. (Open-Source Shakespeare)

(13) I would I knew her mind. (William Shakespeare, *King Richard Ⅲ,* Ⅰ.ⅱ.192)

I would I knew thy heart. (First Folio (1623))
I would I knew thy heart. (Alexander (1951))
I would I knew thy heart. (Shakespeare Search)
I would I knew thy heart. (Open-Source Shakespeare)

(14) Would to God we had died in the land of Egypt(欽定訳聖書　*Exodus*16:3)

Would to God wee had died by the hand of the Lord in the land of Egypt,…(研究社、1985)
Would to God wee had died by the hand of the Lord in the land of Egypt,…(TRB:https://textusReceptusbibles.com/KJV1611/2/16)
Would to God we had died by the hand of the Lord in the land of Egypt,… (Zondervan,1991)

Would to God we had died by the hand of the LORD in the land of Egypt,…(BGW: https:// www. bible gateway. com/passage/?search=Exodus+16%3A3&version=AKJV

最後に例文の引用方法についても述べておく。八木(2022)の(12)～(14)と,筆者が取り上げた First Folio(1623),Alexander(1951),Shakespeare Search, Open Source Shakespeare,研究社(1985),TRB, Zondervan(1991),BGW の 8 点の記述が異なっている。例えば,(12)と(13)シェイクスピアを例に取り上げているが,八木(2022)では,I would fain know. と know の後ろは Full Stop(.)で終わっている。しかし,他の文献ではその後に what you have to say が続いており,say の後で Full Stop(.)になっている。この差がどのようにして発生したかは定かではないが,八木(2022)がこの形で記載されている文献を使用したか,本来ならは I Would fain know…、または I Would fain know～とするところを校正ミスで Full Stop(.)にしてしまったか,あるいは論文の著者である八木氏がこの what 以下の記述がない形で覚えており,確認せずにそのまま記載してしまったのいずれかの可能性が考えられる。(13)に関しては,八木(2022)の提示した文は該当箇所には存在しなかった。では,なぜこのような事態になったのだろうか。実は,今回の調査で筆者も八木(2022)が使用した Shakespeare Search を使用して先述した(12)とこの(13)の調査を行った。その結果,Shakespeare Search で I would I knew を入力すると,thy heart, in what particular action to try him,そして his mind の例がそれぞれ上中下に並んで記載されていた。そして,thy heart が King Richard Ⅲに,in what particular action to try him が All’s well that Ends Well, his mind が The Two Gentlemen of Verona からの引用として挙げられていた。おそらく,八木(2022)は例文と出典箇所を見誤ったものと考えられる。ただし,his を her に間違ったのは,おそらく先入観によるものではないだろうか。この点に関しては神のみぞ知るである。また,先述の「3. シェイクスピアの版について」でも,少しだけ言及したが,シェイクスピアの文を引用する際の引用方法にも注意したい。八木(2022)ではシェイクスピアの引用箇所を示す際に聖書の「マルコ 15:12」と同じ記載をしているが,一部、二部のある作品は作品名の前にアラビア数字を,Act はローマ数字の大文字又はアラビア数字を,Scene についてはローマ数字の小文字かアラビア数字を,そして最後に Line をアラビア数字で記載するのが一般的であり,八木(2022)のような「M*uch Ado About Nothing* ,3:5」といった記載はしない。事実,日高(1956)は Tempest を使用して各版の Punctuation を比較する説明として,「まず,Ⅰ.ⅱ.208-215 を比較してみる。」(P682)とあること,さらに細江逸記の『シェイクスピアの英語』(篠崎書林、1951、以降細江(1951))においても「Swifter than the moones sphere―*Midsummer Night’s Dream*,Ⅱ.ⅰ.7」(P34)と記載されている。なお,この記載方法は決して筆者,細江(1951)そして日高(1956)といった一部の特有の記載方法ではなく,現在でもシェイクスピア関係の文献や論文では一般的に行われている記載方法である。異論のある方は是非,検索して確認していただきたい。(14)については,AV1611 の本来の Exodus(出エジプト記)16 章 3 節の該当箇所の文は研究社版(1985)と TRB で提示されている文である。すでに述べたように Zondervan (1991)と BGW は 1629 年以降の版だと考えられるからである。しかし,その四点と比較しても八木(2022)が提示した文が極端に短いのが一目瞭然である。これは一体どういうことなのだろうか。恐らく八木(2022)は本来であれば,Would to God wee had died by the hand of the Lord in the land of Egypt,……あるいは,

Would to God wee had died 典…in the land of Egypt,〜、のように記載しなければならない箇所を,何らかの理由でby the hand of the Lordの箇所を省略してしまったものと考えられる。いずれにせよ,文献学的研究をする場合は省略する場合でも明確に説明すべきであり,明確な説明もなく文を変更するのはやはり問題である。残念ながら,八木(2022)はそれらの処置を行わずに,省略した文を記載したために,本来とは異なる文を記載することになってしまったのである。

では,このようなミスはどのようにしたら防げたのだろうか。それは必ず原典を確認することである。そしてできれば複数の原典にあたり,自分の覚え間違いがないか,あるいは途中で原典が変更されていないか等を確認することである。

なお,八木(2022)には検索サイトのURLが記載されていないが,これは再現性の必要性から引用文献一覧でもよいので記載しなくてはならない。

## 7　終わりに

以上様々な意見を述べてきたが,中には学術論文の僅かな史的考察のためにここまで調査する必要があるのかと思われる方もおられるだろう。確かに単なる雑談レベルであれば様々な意見や考察を聞くのは楽しいものであるし,個人の自由な発言であるので,そのことについて筆者が何かを言う権利は一切ないと考えている。しかし,歴史的な面を考察し,それを学術論文として発表するのであれば,明確な文献を提示する必要があることに異存がある方はおられないはずである。勿論,筆者の論にも憶測の域を出ないものもある。ただし,その場合でもそのように考えた根拠となるものを提示したはずである。

かつて筆者が学部生だった頃は,英語発達史は必修科目であった。そのため,学部生時代に直接OE,MEの文献を授業で読んだ。その際,当時助教授だった担当の熊澤佐夫先生[22)]から個人的に誘われOEの文献講読会に参加した。熊澤先生は「英語史を本当に理解するには,OE・ME・MODEの知識だけではだめだ。英単語をみればGk・Lat由来の単語が多いのがわかるはずだ。だから英語史を理解するにはＧｋ・Latの学習経験も必要だ。さらに言うとOEを理解する上で,他のゲルマン系の古典語との対比も重要だから,OHG、ON,Gothのどれかは学習しなくてはならないし,そのためにはドイツ語に関する知識もなくてはならない。なぜなら,今あげたような分野の文献はドイツ語の文献が圧倒的に多いからだ。」と言われ,その流れで筆者は熊澤先生からOE・Goth・Gk・Latを個人的に指導していただいた。もっとも,当時筆者の所属していた学部は大学院がなかったことから,同じ大学の文学部の大学院に進学したため,Goth・Gk・Latはその後独学することになったが,OEとGothは今でもなんとか読めるが,GkとLat.中でもLatはほとんどものになっておらず,恥ずかしながら,いまだに上達していない。大学院ではOEは児玉仁士先生[23)],MEは清水阿や先生[24)],MODEは日高八郎先生[25)]に指導を受けた。こういった諸先生方から筆者は文献学についての考え方を学んだ。

確かに今の時代からすれば,文献学は最先端の学問分野とは言えないだろう。しかし,学術論文として文献学を扱う場合は,それなりの根拠資料を提示する必要があること,まして他分野から文献学的手法を導入する場合は,その手法をよく理解したうえで導入する必要性があることは忘れてはならない。

## 注

1)　筆者が確認したところ,このサイトはBible Gateではなく,Bible Gatewayであることが判明した。そのため,筆者はあえて略語をBGWとした。

2)　アメリカではKing James Versionと呼ばれるが,この聖書を作成したイギリスではこの名で知られている。

3)　永嶋大典著『英訳聖書の歴史―附:邦訳聖書小史』に「しかし,前述したように国王ジェイムズⅠの強力な推進力によって実現した子の英語聖書が,イギリスでは一般にThe Authorized Version of the Bible「欽定訳聖書」,アメリカでは通例King James BibleまたはKing James Version「ジェイムズ王聖書[訳]」と呼ばれているのは,共に実情にふさわしい名称である。」(P116、研究社、1988)とある。

4)　The Holy Bible Containing the Old and New Testaments translated out of the original tongues, and with the former translations diligently compared and revised, by His Majesty’s special command ―Authorized King James Version Words of Christ printed in letter, Zond-ervan Bible Publishers,1991

5)　この995という数字はBosworth and WaringのGothic, Anglo-Saxon, Wycliffe and Tyndale Gospels(1888)に基づいたものである。

6)　日高(1956)P675- P693

7)　日高(1956)P679

8)　日高(1956)P680-P682

9)　日高(1956)P682-P690

10) 日高(1956)P693

11) 日高(1956)P675

12) 日高(1956)P679

13) 個人的な事情になるが,筆者は聖学院高校(プロテスタント,ディサイプル派)の卒業生である。そのため,カトリックのことについては不詳のため,あえてプロテスタントの主の祈りを提示した。

14) 筆者も,先述した永嶋もVulgateの読みとして「ヴルガータ」を採用している。しかし,後述する原は「ウルガタ」,水垣は「ウルガータ」を採用している。本来なら,どれかに統一すべきなのだろうが,文献の記述の正確性を重視して,あえて統一していないこととした。

15) 小塩節『「神」の発見―銀文字聖書物語』P26,教文館,2017

16) 加藤哲平『ヒエロニュムスの聖書翻訳』P33,教文館,2018

17) 原真和「主の祈りと頌栄」『聖和論集37号』所収,P33,聖和大学,2010

18) 水垣渉『エラスムス校訂「新約聖書」1516年初版復刻本 付録〈解説〉』P14-P15,臨川書店,1989

19) 千種眞一『ゴート語の聖書』(大学書林,1990)には「ゴート語訳に少なからず混在する西方型本文の読み方,なかんずく古ラテン語訳的要素の出所をどのように説明すべきかという問題も看過できない。翻訳に際して,既にいくつか存在していた古ラテン語訳(Old Latin Versions[Vetus Latina].2世紀に北ア

フリカで始まり 3 世紀にヨーロッパに流布して Itala とも称された）が参照されたことは十分に考えられるし,ウルフィラが使用したギリシャ語本文にラテン語的伝統がすでに入り込んでいたかもしれない」(P12)とある。

20）本文中のヒエロニムスと同じ

21）研究社版(1985)には「“:For thine is the kingdome,and the power, and the glory, for euer, Amen.”が、Die gantze Helige Schrift,deudsch des Dr, Martin Luther 1545, BandⅡ(Manfred Pawlak, Verlagpsgesellschaft MBH, Herrsching.1972)には“DENN DEIN IST DAS REICH/ VND DIE KRAFT/ VND DIE HERRLIGKEIT IN EWIGKEIT AMEN.”(1976)と記載されている。なお,本書はルター訳聖書の復刻版であるが,該当箇所は全て大文字で記載されていたため,あえてそのままとした。

22）熊澤佐夫(1939-2013)　神奈川県立高校教諭を皮切りに幾徳工科大学(現神奈川工科大学)助教授を経て,大東文化大学助教授・教授。藤井基精の高弟。専門は古英語・ゴート語・ギリシャ語・ラテン語。著書に日本英語教育協会の『アメリカ社会常識語事典』(藤井基精と共著),研究社の『キープ　写真で見る英語百科』(執筆者)等がある。

23）児玉仁士(1931-2021)　獨協高校教諭を皮切りに獨協大学講師・助教授・教授。市河三喜門下の鈴木重威の高弟。専門は古英語・中英語・フリジア語。研究社の『新英和大辞典第 5 版』(執筆者・編集協力者),『英語語源辞典』(執筆者),『キープ　写真で見る英語百科』(執筆者)といった英語の辞典・事典関係だけでなく,日本で初めての『フリジア語文法』,『フリジア語辞典』,『日本語フリジア語辞典』(以上大学書林)を完成させた。鈴木重威門下として苅部恒徳,毛利秀高の諸氏がおられる。また,児玉氏がフリジア語に興味を持ったのは鈴木重威の示唆によるものである。なお,鈴木重威は中島文雄,佐々木達とともに市河三喜の後継者候補として名前が挙がっていた人物である。最終的には市河の後継者に中島文雄が選ばれ,鈴木は当時第一高校教授であったが,その後立教大学を経て東京都立大に,佐々木は東京大学講師から東京外事専門学校（現東京外国語大学）に移動した。鈴木が都立大学移動後古英語・中英語での中心的な大学になったのは周知の事実である。鈴木が監修し,児玉・苅部・毛利が執筆した古代英詩三部作『ベオウルフ』『宗教詩』『哀歌』(以上研究社)は古英語研究における主要文献となっている。

24）清水阿や(1911－2012)　東京学芸大学名誉教授・大東文化大学元教授　福原麟太郎の高弟。研究社『新和英大辞典(編集主幹勝俣銓吉郎』(執筆者),講談社『和英辞典(編集主幹　清水護・成田成寿』(執筆者)といった英語の辞書関係だけでなく,『ローマ字で引く国語新辞典(福原麟太郎・山岸徳平共編)』の実質的な著者である。アーサー王研究の第一人者であり,研究社から出版された『アーサー王伝説研究』はその分野の主要文献となっている。この他に『アーサーの死　八行連詩』『アーサーの死　頭韻詩』『マーリンの誕生：または子の父親発見』『アーサー(ユーサー・ペンドラゴン子息)の悲運』『全訳王の牧歌十二巻』『トリスタンとイーソルド　韻文劇』(以上ドルフィンプレス)がある。また,『ローマ字で引く国語新辞典』は研究社から,『アーサー王伝説研究』はドルフィンプレスから復刻版が出版された。なお,『マーリンの誕生：または子の父親発見』の作者はウイリアム シェイクスピアとウイリアム⊡ロウリーの共作である。

25）日高八郎(1920－1997)　旧制府立高校(現東京都立大学)教授を皮切りに東京大学教養学部助教授・教授を経て東京大学名誉教授・東海大学(特任)教授・日本シェイクスピア協会常任委員・日本学術会議会

員・世界文学会会長等歴任。中野好夫の高弟。同じ中野門下には小津次郎(東京大学名誉教授・日本シェイクスピア協会会長)がいる。なお,日高氏と小津氏はともに 1920 年生まれだが,学年としては小津氏の方が 1 学年上である。シェイクスピアをはじめディケンズ,エリオット,ハクスリー,モーム,コンラッド,ジョイス,スティーブンソン,マンスフィールド等幅広い作家を研究対象とした。代表的な翻訳書にディケンズの『大いなる遺産』,スティーブンソンの『ジキルとハイド氏』,モームの『スパイ物語』等がある。岩波書店の『広辞苑第 4 版』のイギリス文学の項目も執筆している。学習院大学名誉教授の中野春雄氏は教え子で、中野好夫の令孫である。(https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E9%AB%98%E5%85%AB%E9%83%8E を参照)

**<参考文献>**

**1　聖書 関係**

1 Joseph Bosworth・George Waring 共著：The Gospels -Gothic,Anglo-Saxon, Wycliffe and Tyndale Versions,1888
2 Hardy Wallis 編・Rt.Hon. Isaac Foot 解説： The New Testament Translated By William Tyndale 1534 A Reprint of the Edition of 1534 with the Translation Prefaces and Notes and the Variants of the Edition of 1525 Edited for The Royal Society of Literature ,Cambridge University Press ,1939
3 John Roger 編・Dr.Joseph W.Johnson 解説：Matthew’s Bible 1537 Edition Combining the translation of William Tyndale & Myles Coverdale, Hendrickson Bibles, 2009
4 永嶋大典『英訳聖書の歴史』,研究社,1988
5 Alfred W. Pollard 解説：The Holy Bible An Exact Reprint in Roman Type, Page for Page of the Authorized Version Published in The Year 1611 Oxford University Press, Oxford, Kenkyusha, Tokyo,1985
6 寺澤芳雄『翻刻版　欽定英訳聖書―文献学的・書誌学的解説』,研究社,1985
7 本多峰子：英語聖書の歴史,https://biblehouse.jp/?mode=f16、2014
8 『口語訳聖書』,日本聖書協会
9 『新共同訳聖書』,日本聖書協会
10『新約聖書＜和英対照＞新改訳聖書 2017/ESV』,いのちのことば社,2018
11 岩隈直『希和対訳新約聖書マルコによる福音書上』,山本書店,1989
12 小塩節『「神」の発見―銀文字聖書物語』,教文館,2017
13 加藤哲平『ヒエロニュムスの聖書翻訳』,教文館,2018
14 Dr, Mortiz Heyne 著 Uifila ode runs erhalten Denkmäler der gotischen Sprache. Text, Grammatik und wörterbuch,Dunk und Verlag von Ferdinand schöningh、1874

15 Wilhelm Streitberg 著 Die Gotische Bibel,Carl winter’s Universtätsbuchandlung,1908-1910
16 Wilhelm Streitberg 著 Die Gotische Bibel,第 2 版、Carl winter's Universtätsbuchandlung,19 19
17 Wilhelm Streitberg 著,Piergiuseppe Sccardigli 補遺 Die Gotische Bibel,Carl winter's Universtätsbuchandlung,2000
18 W.Braune・K.Helm 共著 Gotische Grammatik,Max Niemeyer Verlag/Halle/Saale/,1952
19 Joseph Wright 著 Grammar of the Gothic Language Second Edition,Oxford University, Press,1954
20 原真和「主の祈りと頌栄」『聖和論集 37 号』所収,聖和大学,2010
21 水垣渉『エラスムス校訂「新約聖書」1516 年初版復刻本 付録〈解説〉』,臨川書店,1989
22 千種眞一『ゴート語の聖書』,大学書林,1990
23 Die gantze Helige Schrift, deudsch des Dr, Martin Luther 1545, 2 Vol,Manfred Pawlak, Verlagpsgesellschaft MBH, Herrsching.1972

## 2 シェイクスピア関係

1 Peter Alexander 編：The Complete Works of William Shakespeare, Collins Press,1951
2 明星大学出版部:明星大学 20 周年記念 コンパクト版 シェイクスピア ファーストフォリオ MR.WILLIAM SHAKESPEAR’S COMEDIES<HISTORIES,&TRAGEDIES,1623,雄松堂 1985
3 日高八郎「Shakespeare をどの版で読むべきか」『斎藤勇博士古希記念論文集』所収,研究社,1956
4 細江逸記『シェイクスピアの英語』,篠崎書林,1951

## 3 検索サイト

1 Bible Gateway：https://www.biblegateway.com/
2 Textus Receptus Bibles(https://textusreceptusbibles.com/Wycliffe/40/27)
3 George Mason University :Open Source Shakespeare (https://www. opensourceshakespeare.org/
4 Shakespeare Search :https://www.rhymezone.com/shakespeare/
5 Wikipedia： https://ja.wiki pedia.org/wiki /%E4%B8%B B%E3%81%AE%E7% A5%88%E3%82%8A

# 東京第一臨時教員養成所卒業生の赴任地決定及びその後の動向に関する一考察―他機関卒業生との対比して

# A Study on the Destination of Graduates the First Temporary Teacher Training Institute of Tokyo and Trends Afterward: A Comparison with Graduates of Other Institutions

鈴木　聡
Satoshi Suzuki

Keyword:東京第一臨時教員養成所(The First Temporary Teacher Training Institute of Tokyo),東京高等師範学校（Tokyo Higher Normal School）,学歴コンプレックス(Academic Background Complex),赴任先(Destination)、成績(Grade)、待遇(Treatment)

Abstract

This paper is based on the investigation of 6 graduates of The First Temporary Teacher Training Institute of Tokyo (TFTTIT), 2 graduates of Higher Normal Schools (1 from Hiroshima Higher Normal School and 1 from Tokyo Higher Normal School), 3 graduates of Tokyo Imperial University, 2 graduates of the Tokyo Foreign Language School, and 1 successful candidate for Secondary School Teachers' Certification approved by the Ministry of Education, 14 histories in total. The results of this survey are summarized in Tables 1 and 2 at the end of this report. Referring to these tables, this report discusses how the destination of TFTTIT graduates was determined and how the process was subsequently followed.

## １　はじめに

臨時教員養成所(臨教)は明治 35 年～大正 3 年、大正 11 年～昭和 4 年、昭和 15 年～18 年の異なる三期に渡って設置された中等教育教員養成機関である。しかし、その実態については判明していない部分が多い。原因はその時々の社会情勢に応じて設置されたこと、さらには当時の卒業生のほとんどが鬼籍に入っ

令和 5 年 3 月 23 日受理

ていること、さらに個人情報保護法により、明確な資料を入手できないことによるものである。そのため、臨教の卒業生に関しては① 学歴コンプレックスがあり、一人前の教員として扱ってもらえない[1)]、② 高等師範学校や文理科大学の卒業生はナンバースクールや交通の便がいい学校に赴任するが、臨教の赴任先は新設の旧制中学校や高等女学校である[2)]と否定的なイメージで語られることが多い。また、高等師範学校においても、③ 赴任先は旧制中学校を基本として、成績優秀者は師範学校(師範)に、成績の悪いものは高等女学校(高女)や実業学校に決定される[3)]と言われている。だが、果たしてこれらの説はどこまで真実なのだろうか。そこで筆者は、東京高等師範学校附設東京第一臨時教員養成所(東臨教)卒の尾崎乕四郎、奥田愛正、松川昇太郎、鈴木長作（鈴木(長)）、岩野由紀夫、野村春雄(野村(春))をベースとして、高等師範学校(高師)卒の濱林生之助(広島高等師範学校、広高師)、米山芳成（東京高等師範学校、東高師)、東京帝国大学(東京帝大)卒の佐々木達、山本忠雄、安良岡康作、東京外国語学校(外語)卒の小稲義男、小川芳男、文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験(文検) 合格者の鈴木清(鈴木(清))の計 14 名の履歴の調査を実施した。それをまとめたものが巻末の表 1 と表 2 である。これらの表を参照しながら、上記三点を踏まえたうえで、東臨教の卒業生の赴任先がどのように決定され、その後どのような経緯をたどったかについて他の機関の卒業生と比較・考察したものである。なお、今回の調査対象者の中で濱林と安良岡の年代が多少異なっているが、あえてこの二名を含めた理由は広高師出身の濱林が旧制帝国大学(帝大)進学や旧制高等学校教員検定試験(高検)に合格せずに旧制中学校(中学)である福島県立福島中学校(福島中、現福島県立福島高等学校、前身は福島県立第三中学校)教諭から実業専門学校である小樽高等商業学校(小樽高商)に教授として栄転していること、安良岡は東京帝大卒であるが、尾崎と同時期に東京学芸大学(学芸大)に勤務していたにも関わらず、叙位・叙勲では尾崎と差をつけられ、東臨教卒で公立高校長だった鈴木長作と同じ叙位・叙勲だったことによるものである。

## 2　学歴コンプレックスがあり、一人前の教員として扱ってもらえない。

一般論として臨教出身者は学歴コンプレックスがあると考えられているが、果たしてそれは真実なのだろうか。仮に学歴コンプレックスがあるとしたら、それを克服するために研究科や高検合格を目指した人物はどのくらいいたのだろう。そこで、今回の 14 名に関しては可能な限り国立公文書館デジタルアーカイブを使用して調査を行った。そのうち、全体の約 60%近い 8 名[4)]に関しては詳細な資料を手に入れることができた。残り 6 名[5)]に関しては、追悼集・自叙伝・研究書・論文の形で刊行されたものである。さらにこの 14 名中半数の 7 名[6)]が Wikipedia に掲載されている。ただし、本稿では国立公文書館デジタルアーカイブを通じて得た資料や追悼集等直接筆者が調査・購入したものを優先とし、Wikipedia に関してはあくまでも補完的に使用した。そのため、本稿の表に記載されている内容が Wikipedia と異なる場合もある[7)]ことを最初に断っておく。

はじめに、表 1 に基づいて述べていくことにする。今回調査を行った東臨教卒業生(尾崎、松川、奥田、鈴木（長)、岩野、野村(春))の 6 名の中で卒業後新たに進学や検定試験を受験したものは尾崎及び松川の 2 名である。尾崎は東臨教を卒業後に師範の教員を経て東臨教の母体である東高師の研究科に入学している。しかし、尾崎は研究科を修了することなく、在籍 2 年目で中退をしている。当時の東高師には専攻科

と研究科の２種類が存在し、専攻科はいまでいう大学院相当で、ここを卒業すると、無試験で旧制高等学校教員になることができた。そのため、専攻科の受験には高師本科を卒業していることが条件[8]になっている。これに対し、研究科は「生徒ハ本校卒業生中ヨリ学校長之ヲ選抜シ文部大臣ノ認可ヲ經テ入学セシムルモノトス」[9]と記載されているだけなので、東高師附設である東臨教卒でも受験することが可能であった。正確に言うと、専攻科を受験できない東臨教の学生に対し、門戸を開き、本科卒と同等の扱いをすることを目的とした可能性が考えられる。その理由は、臨教全体が大正 15 年以降に 3 年制になるが、それ以前の就学期間は 2 年間で、現在の短大に近いものだった。そのため、研究科を修了することで、本科卒と同等になったものと考えられる。現在、このシステムに近いのが高専及び短大である。高専も短大も本科卒業後に学内に設置された 2 年制の専攻科を卒業すると学士を取得することが可能となる。なお、中等教育機関の教員になる場合はこの研究科修了という学歴はあまり影響を与えていない。つまり、研究科修了者が未修了者と比較して出世が必ず早くなるという保証は一切なかったのである。鈴木(長)の東臨教の同級生で後に埼玉県立行田女子高校長になった櫻井傳三という人物がいる。この人物は東臨教を卒業後研究科に進学するが、高校長になったのは鈴木(長)の 5 年後[10]だったことが判明している。次に高検の合格者の例として松川を取り上げる。松川が東臨教を卒業後最初に赴任したのは三重県立松阪商業学校(現三重県立松阪商業高等学校)という実業学校である。その後、表 1 にあるように松川は当時難関であった高検に合格し、湘南プランのリーダーになったが、現在の国家公務員Ｉ種に相当する高等官に昇任したのは、表 2 に記載されているように、高検合格や湘南プランで実績を出す以前の 24 歳の時である。そのため、学歴コンプレックスがあったから、高検を受けたのかといえば、否定もできないが必ずしも肯定もできない。さらに、表 2 を見ると、松川の高等官への昇任の速さは東京帝大を卒業して 2 年目に広高師教授として赴任した山本に匹敵する。そして、奇しくも山本が高等官に昇任した時の年齢も 24 歳と松川と同年齢である。尾崎と松川の例だけを見ると、やはり臨教出身者は学歴コンプレックスがあったのではないかと考えられなくもない。しかし、他の者は東臨教卒業後、一切進学も検定試験も受験した形跡は見当たらない。さらに調査をした結果、今回の調査対象者達は生徒達からの評判も決して悪いものではなかった。例えば、奥田は東臨教卒業後実業学校である三重県立志摩水産学校（現三重県立水産高等学校）に着任後、1 年たたずに母校の鹿児島県立大島中学校(大島中、現鹿児島県立大島高等学校(大島高校))の校長自らが勧誘のため訪問し、転任したことが分かっている。なお、奥田は後に同校で校長となる。さらに、奥田は生徒達からも「アイショムー」（大島の方言で「愛正兄さん」の意味）と呼ばれ敬愛される存在であった。現在も大島高校の正門には奥田の胸像が設置[11]されている。鈴木(長)に関しても、国立公文書館デジタルアーカイブに保管されている功績調書に「旧藩校の流れをくむ名門秋田中学生への教育に心血を注ぎ若くしてその語学の指導力には定評があった。」と記載されていること、さらに最初の赴任地である秋田県立秋田中学校(秋田中、現秋田県立秋田高等学校、前身は秋田県立第一中学校)の同窓会に恩師としてわざわざ埼玉から秋田まで呼ばれている[12]。しかも、鈴木(長)の秋田中での在職期間はわずか 3 年という短期間であったにもかかわらずである。さらに、鈴木(長)が児玉高等学校(児玉高校)校長だった時の教え子で昭和 33 年卒業生の卜部正氏から「人柄がよく、偉ぶらない優しい先生でした」との証言を筆者は直接得ている。また、東臨教で鈴木(長)の同級生だった岩野は卒業時に母校である東京府立第四中学校(府立四中、現都立戸山高等学校)に校長の深井鑑一郎により直接採用[13]されている。深井は明治 31 年か

ら昭和 13 年まで 40 年にわたり同校の校長を務めた人物である。退職後は富士見高等女学校(現富士見中学高等学校)の校長や城北中学(現城北高校)の創設者の一人[14)]でもある。そのため、岩野が府立四中で学歴コンプレックスを抱えたとは考えにくい。しかも、岩野は教え子である政治評論家の細川隆一郎の言論活動五十五周年の会の発起人に中曽根康弘、竹下登、宮澤喜一といって大物政治家が名を連ねる中で唯一恩師として参加[15)]している。野村(春)に関しても国立公文書館デジタルアーカイブに保存されている功績著書に「生徒の指導にあたっては、極めて熱心であり、個々の生徒と交わりよく特性を理解し、常に周到な準備をかかさず、計画性を持って臨んだ。」と記載されている。以上のことからも、臨教出身＝学歴コンプレックスと断言するのは過言である。

### ３　高等師範学校や文理科大学の卒業生はナンバースクールや交通の便がいい学校に赴任するが、臨教の赴任先は新設の旧制中学校や高等女学校に赴任する

杉森(2000)によれば、「また,高等師範学校や文理科大学出身の中等教員は,「モデル」教員として配当されたものの,量的には中等教員の本流たり得なかったという実態がある。彼らの待遇は中等教員の中でも相対的に優遇されていたから,「ナンバースクール」や交通の便が良い学校に振り分けられることが多く,新設の中学校や高等女学校にとって，高等師範学校から教員の配当を受けるのは困難なことであった。－中略－これらの新設校を中心に,官立の養成学校である臨教の出身者を,準「モデル」教員として積極的に高額で採用しようとしたものと考えられる。」[16)]と述べられている。確かに広高師卒の濱林は卒業後、鹿児島県立川内中学校(川内中、現鹿児島県立川内高等学校、前身は鹿児島県立第二中学校)[17)]、米山は大阪府立住吉中学校（住吉中、現大阪府立住吉高等学校、前身は大阪府立第十五中学校、）はナンバースクールであり、尾崎が赴任した千葉県立長狭中学校(長狭中、現千葉県立長狭高等学校)や松川が赴任した神奈川県立湘南中学校(湘南中、現神奈川県立湘南高等学校)はいずれも新設であった。その点だけで見れば、確かに杉森の記述は正しい。だが、表 1 にあるように、鈴木(長)が赴任した秋田中は第一中学校(一中)であり、岩野が赴任した府立四中もナンバースクールであることから、必ずしも臨教だからナンバースクールに赴任できないというわけではなかった。しかも濱林はともかく、米山の赴任先はナンバースクールとはいっても二桁の数字、つまり新設校に近い学校である。これに対し、鈴木(長)と岩野の赴任先は、一桁のナンバースクールである。このように言うと、鈴木(長)の場合はナンバースクールではあるが、東北地方の学校であり、米山は近畿地方の大都市である大阪の学校であると考える方もいるだろう。だが、岩野が赴任したのは東京であり、しかも数字は一桁の四中である。さらに表 1 を見てもらうとわかるが、東京帝大卒の山本が赴任したのは広島第一中学校(広島中、現広島県立広島国泰寺高等学校)と中国地方の一中である。このことから判断しても、臨教だから、ナンバースクールに行けないわけではなく、しかも(詳細は後述する)山本や鈴木(長)のその後の昇任等から判断しても、「一中とはいっても地方だから大したことがない」と容易に断定できないこと、さらに鈴木(長)と岩野は高師本科卒の米山よりも良い学校に赴任している点も忘れてはならない。

### ４　赴任先は旧制中学校を基本として、成績優秀者は師範学校に、成績の悪いものは高等女学校や実業学

**校に決定される**

この件に関して、山田(2002)は広高師をベースとしたと断りを入れた上で「一方で、高等女学校とその他の学校(ほとんどが実業学校であった)を適任校とされた者の比率は低いが、その多くが「良」「可」という成績の者であった。高等女学校は成績が「可」の者のうち、二三・八%、その他の学校は一六・七%が適任校とされている。成績が「優」で高等女学校を適任校とされたものの比率は一四・〇%であるが、そのほとんどが師範学校、中学校ともに適任校とされたものであった。このことを考えれば成績が「優」で高等女学校のみを適任校とされた者の比率は非常に低くなっていると言えるだろう。　結局、適任校の指定は中学校を基本とし、それに成績の良いものには師範学校、成績の悪いものには高等女学校、実業学校が加えられるという形式だったようである」[18)]と述べているが、果たしてそれもどこまで断言できるのだろうか。確かに、東臨教卒でも、尾崎が師範、奥田、松川が実業学校、鈴木(長)、岩野が中学、そして野村(春)が小学校と赴任先が様々に別れている。なお、野村(春)については後述する。しかし、だからと言って、鈴木(長)と岩野が平均的で、尾崎が優秀、奥田、松川の成績がよくなかったと果たして断定できるのだろうか。

確かに東臨教卒業後に奥田と松川の両名の最初の赴任先は上述のように実業学校である。しかし、奥田は 9 か月、松川は 1 年でともに中学に転任している。実は、当時の教育界では高等官(現在の国家公務員)と判任官(現在の地方公務員)の二種類の教員が存在していた。高等官は旧制大学(大学)や高等学校(高校)では教授が、助教授が判任官、中学では校長が高等官で、教諭の中で高等官と判任官に分かれていた。そして、大学や高師を卒業してなれるのは判任官であり、高等官には教員としての実績を積まないとすぐにはなれなかった。事実、広高師本科卒で、英語教育界で伝説的な人物である濱林も、高等官に昇任したのは 30 歳の時である。これに対し、松川と山本の両名は若干 24 歳で昇任している。しかも松川は東臨教を 20 歳で卒業し、教員四年（実業学校に一年、旧制中学に赴任して三年）目でのことである。なお、現在では公立学校教員は地方公務員になるが、当時の公立学校教員は出向命令は文部省、任命権者は判任官の場合は自治体、高等官の場合は内閣、そして給与支払いは判任官、高等官にかかわらず自治体になっていた。事実、鈴木(長)は秋田中や埼玉県立熊谷中学校(熊谷中、現埼玉県立熊谷高等学校、熊谷高校、前身は埼玉県立第二中学校)への出向命令は文部省だが、判任官当時の秋田中及び熊谷中への任命権者は秋田県と埼玉県である。一方、鈴木(長)が高等官昇任後の埼玉県公立中学校教諭としての熊谷中への任命権者は内閣である。給与に関してはいずれの場合も各自治体(秋田県・埼玉県)である。この給与システムが戦後公立学校教員が国家公務員から地方自治体所属の地方公務員に変更されるきっかけになったと考えられる。なお、この制度に現在でも近いのは警察である。警察は警視までは地方公務員、警視正以上は国家公務員と分類されているからである。

他の例としては、表 1 にあるように外語を卒業し、後に東京外国語大学(東外大)学長になった小川芳男も最初の赴任先は高女である。これも「小川の成績が悪かったから、赴任先は中学ではなく、高女になった」と断言できるのだろうか。確かに小川の最初の赴任先は高女だったが、その次の赴任先は米沢高等工業学校(米沢高工、現山形大学工学部)という実業専門学校である。その人物が在籍中に「成績が悪かった」とは考えにくい。なお、小川のように中等教育機関から高等教育機関である実業専門学校に教員として移

動した例に先述の濱林と山本[19]がいる。確かに山田(2002)が基にしているのは広高師ではあるものの、東高師や東臨教、さらには外語や東京帝大で大幅に基準が変更されているとも考えにくい。例えば、表 1 にある東京帝大卒の佐々木、山本、安良岡の三名を比較・検討すると、卒業後に佐々木は東京帝大の副手を、山本は広島中に、安良岡は旧制長野県立長野師範学校(長野師範)に赴任している。つまり、佐々木は大学に残り、山本はナンバースクールに、安良岡は師範に赴任したのである。しかも、後に佐々木は東京外事専門学校(外事)に教授として赴任、山本も翌年には広高師教授として赴任、その後広島文理科大学教授に昇任している。これに対し、安良岡が教授になったのは、師範が昭和 18 年に中等教育機関から高等教育機関への昇格を経て、さらに学芸大へ包括・昇格後のことである。このことは、他の 2 名が比較的早く教授に昇任したのに対し、安良岡の場合は師範が大学に昇格後の昇任だったことを示している。このことから、優秀な場合は、大学に残るなり、実業専門学校の教授（高師の分類は実業専門学校）に赴任し、必ずしも中等教育機関である師範の教員にはならなかったということである。実際に、佐々木が東京帝大に残り副手や講師をしていた時期は東京帝大教授市河三喜の後任を誰にするか決めている最中だった。その後任候補として名前が挙がっていたのが中島文雄(京城帝国大学(京城帝大)教授)、鈴木重威(第一高等学校(一高、現在の東京大学教養学部)教授)、佐々木(東京帝大講師)の三名であった。最終的には京城帝大教授だった中島文雄が市河三喜の後任ということで、東京帝大教授に就任した。そして鈴木重威は一高教授退職後立教大学教授を経て都立大学教授へ、佐々木は外事教授として赴任後、学制改革で東外大教授へとなり、定年まで在職していた。。しかし、最終的な評価に関しては東京帝大卒の佐々木より外語卒の小川の方が上であることも忘れてはならない。小川は佐々木と外事及び後継の東外大の同僚だったが、学長になったのは小川だからである。以上の点から判断しても、東京帝大に限定されるかもしれないが、優秀な人物は必ずしも師範に赴任するとは限らなかったと考えられるのである。

次に安良岡と同時期に学芸大に在職していた尾崎について取り上げていく。尾崎と安良岡とは対照的な学歴で、安良岡の東京帝大卒に対し尾崎の学歴は東臨教卒である。正確には尾崎は師範を経て東臨教を卒業後東高師の研究科中退の経歴の持ち主である。これに対し、安良岡は中学・一高を経て東京帝大を卒業した超一流のエリートである。尾崎は、東臨教を卒業して最初に赴任したのは師範だが、研究科を中退後の赴任先は中学である。これに対し、安良岡の赴任先は定年退官するまで一貫して師範(学芸大は師範が包括・昇格した学校)であり、師範以外の経歴はない。これを従来の説を参考にするならば、尾崎が臨教時代は優秀だったので師範に赴任できたが、研究科は中退したために師範ではなく中学に、安良岡はバリバリのエリートなので、中学ではなく、師範に赴任させたととらえがちである。しかし、先述したように、東京帝大卒の佐々木や山本が中等教育機関としての師範には赴任していないことから判断すると、師範への赴任が優秀である証とは言い難い。では、帝大卒の進路は中学ではなく、最初から師範へと決められていたのだろうか。これに関しては、鈴木(長)の埼玉県立熊谷中の同僚教員に東京帝大卒の杉森久英(直木賞作家)がいたことからも、帝大卒の教職の進路＝師範と決定されていたとは考えられない。しかも安良岡と同じ東京帝大卒の山本は師範ではなく、中学教諭から広高師教授に赴任していることからも、中学よりも師範の方に優位性があるとはいい切れない。そもそも、本当に優秀ならば、佐々木や山本のように中等教育機関ではなく、高等教育機関に赴任したはずである。

筆者がこのように判断したのは、尾崎の功績調書と安良岡の履歴書を対比した時に、二人の昇任人事の差に気が付いたからである。尾崎は昭和 22 年の 45 歳の時に東京第一師範学校(第一師範)教授に昇任しているにもかかわらず、2 年後の昭和 24 年の 47 歳の時に第一師範が学芸大に包括されたときに講師に降格人事になってる。これに対し、安良岡は昭和 22 年の 27 歳の時に第二師範女子に着任し、2 年後の昭和 24 年の 29 歳の時に第二師範女子が学芸大学に包括・昇格されると、助教授に昇任している。おそらく、この差は、尾崎の最終学歴が東臨教卒という実業専門学校であるのに対し、安良岡が東京帝大卒という学歴の差によるものと考えられる。この点に関しては筆者の「戦前～戦後初期における高等教育機関の教員人事に関する一考察 」(『鳥羽商船高等専門学校紀要 第 44 号』 PP5-18、2022)があるので、興味のある方はそちらを参照していただきたい。もっとも、最終的には尾崎は昭和 26 年の 49 歳の時に学芸大世田谷分校(現在この地は学芸大学付属小学校及び中学校となっている)の教授に、昭和 30 年の 53 歳の時に学芸大教授に昇任している。一方、安良岡は昭和 46 年、すなわち助教授に昇任してから 24 年後の 51 歳の時に教授に昇任していることからも、実績としては尾崎の方が安良岡よりも評価が高かったものと考えられる。なお、私見になるが、学生の赴任先の振り分けは成績よりも学生の性格やその時代の教員の欠員状況等によって、赴任先が師範や中学や高女、さらに実業学校に振り分けられた可能性もあったのではないかと考えている。また、表 1 にもあるように、学歴だけで判断すれば、尾崎、佐々木、山本、安良岡の四名の中で一番優れているのは一高―東京帝大の安良岡で、次が第八高校―東京帝大の佐々木、大阪高校―東京帝大の山本、そして最後が師範―東臨教―東高師研究科中退の尾崎である。

以上の点を踏まえて判断すると、赴任先を「中学校を基本として、成績優秀者を師範学校、成績の悪いものを実業学校や高等女学校」と判断するのは早急であると考えられる。

## ５　高師や臨教の成績はその後の人生で全く関係なかったのか

では、「高師や臨教での成績は全く関係なかったのか」と問われれば、矛盾するようにだが、全く関係なかったとは言い切れない。このことに関し、東臨教の野村(春)、東高師の米山の二名について取り上げていくことにする。最初に野村(春)だが、野村(春)は東臨教卒であるにもかかわらず、最初の赴任先は埼玉県北足立郡芝尋常高等小学校(現埼玉県川口市立芝小学校)の代用教員であり、訓導ではない。これは当時としては非常に珍しい人事である。通常、高師や臨教は正規教員の教員養成機関であり、代用教員養成機関ではない。しかも、東臨教は東高師附設の中等教育教員養成機関であり、初等教育教員養成機関ではない。実は、野村(春)が東臨教を卒業した昭和 6 年は、昭和恐慌が始まり、改善されたのは昭和 10 年になってからである。例えば、野村(春)と同年に外語を卒業した小川が 4 月に新潟県立高田高等女学校(高田高女、現新潟県立高田北城高等学校)に教諭心得として赴任した時の給与が 80 円、9 月に教諭になったときに 90 円となったが、以後昭和 10 年に米沢高工に助教授として赴任するまで一切の昇給はなかった[20)]。なお、小川が赴任当初の教諭心得というのはあまり知られていないが、これは言ってみれば仮免許である。当時の中等教育機関の免許は教員養成機関である高師関係（東高師・広高師・東臨教等）を卒業すれば、すぐに教員免許が交付されたが、外語の場合は半年程度経てから交付される状態であった。そのため、外語出身の小川の場合も当初は教諭心得だったが、これは制度上の問題であり、決して成績が悪かったため

に、すぐに教諭になれなかったわけではない。さらに小川[21]によれば、小川の高田高女に赴任した同期に広高師卒の野村喜代左ヱ門（野村(喜)）という人物がいたことが記載されている。そこで疑問になるのが、先述した野村(春)である。つまり、野村(春)と同年に卒業した小川や野村(喜)は中等教育機関の高女に赴任しているのに対し、野村(春)は、高女はもちろん、実業学校にも赴任することなく、初等教育機関で代用教員として教員人生が始まっているのである。これは一体何故だろうか。その答えが成績である。一般的に当時の師範、高師及び臨教はお金のかからない給費制の学校として認識されているが、筆者が調査したところ、必ずしもそれは正確ではないことが判明した。これから述べることは広高師の方が不明なために制度全体のこととして断言することはできないが、当時の東高師と東臨教には給費生と特別学生と私費生の三種類の学生が存在していたことが判明している。そして、今回調査対象となった東臨教の尾崎、奥田、松川、鈴木(長)、岩野はすべて給費生[22]で、野村(春)は私費生[23]だったことも判明した。つまり、給費の対象外学生ということである。これは入学時の成績で決定され、卒業まで変更することがなかったものと考えられる。つまり、入学時点でその後の人生も既に決定していた可能性があるということである。先述したように野村(春)が東臨教を卒業した昭和 6 年当時は昭和恐慌であった。そのため、学校としても給費生に関しては何としてでも就職先は確保しなければならなかったし、確保したのだろう。だが、私費生に関してはそこまで手が回らなかった可能性が想定される。勿論、野村(春)が私費生でも東高師であればなんとか中学や高等女学校の教員に採用された可能性はある。というのも、野村(春)と同年に東高師を卒業した米山も私費生だった[24]が、卒業後は住吉中に赴任しているからである。しかし、残念ながら野村(春)の場合はそうではなかった。そのため、初等教員として履歴を始めることになったのである。[25]もっとも、恐慌が過ぎて機会が戻ってくれば、本来は東臨教卒業していることから、中学の教員になることはできた。野村(春)の場合は東臨教卒業から 7 年後になるものの、埼玉県立粕壁中学（現埼玉県立春日部高等学校、前身は埼玉県立第四中学校でナンバースクール）に教諭として赴任している。卒業から 7 年は経過しているものの、初任の赴任先の中学としては数字が一桁であることから、米山の場合と比較しても決して悪くはない。しかも、野村(春)が粕壁中の後に赴任した学校は埼玉県立浦和中学校(浦和中、現埼玉県立浦和高等学校、前身は埼玉県立第一中学校)であることからも、人事としては悪くないと考えられる。また、先述した鈴木(長)の同級生で東臨教卒業後に研究科に進学した櫻井は鈴木(長)と比較して五年遅く公立高校長になったが、この櫻井もまた私費生[26]だったことが判明している。そこで、次に出身校や給費か私費かによってその後の教員としての待遇にどの程度の影響があったのかについて検討していくことにする。

## ６　出身校（高師と東臨教）と給費・私費別による教員としての待遇に対する影響

では、出身校と給費・私費による教員になってからの待遇に差はあったのだろうか。ここでは高師と東臨教について述べていくことにする。私見になるが、高等官への昇任の順番としては原則として、① 東高師(給費生)、② 東臨教(給費生)、③ 東高師（私費生）、④ 東臨教（私費生）の順であったと考えられる。ただし、個人の能力によっては、②が①を上回ることもあった。このことは、先述した東臨教卒の松川(給費)の方が広高師卒の濱林よりも早く高等官に昇任していることから判断したものである。そして

松川の次にくるのが尾崎(給費)、濱林(広高師本科)となり、奥田(給費)と鈴木（長)・(給費)、岩野(給費)、米山(私費)、野村(春)・(私費)へと続いていく。松川ほどではないが、尾崎も広高師出身の濱林よりも高等官への昇任時だけでなく、その後も早かった。なお、松川に関しては神奈川県立湘南高等学校長を早期退職した後に神奈川大学の教授に就任したところまでは判明しているが、それ以降の足取りは不明ではある。しかし、これまでの経歴から判断すると、尾崎と同じ位階勲等になっている可能性が高いと想定される。尾崎は 49 歳に高等官三等に昇任して以降、位階の昇任スピードが遅くなるのに対し、濱林は 48 歳以降も昇任のスピードは速くなっている。その理由は、濱林は 51 歳の時に学内の役職として生徒主事を兼任しているからである。これは現在の国立高等専門学校の学生主事(副校長)に該当すること、さらに主事は管理職であり、これは教授職と兼任する併任職になっている。さらに、濱林はその後も校長事務取扱を併任し、実質的な学校運営をする立場にあった。これに対し、尾崎の功績調書に学長や学部長といった管理職としての記録が記載されていない。つまり、尾崎は一教授としての退官だが、濱林の場合は管理職としての退官のために、結果として尾崎よりも上位に昇任したのである。実は、こうした管理職になると一教授としてよりも上位の官位官等になるというのは決して珍しいことではない。表 2 を見ると、勲二等旭日重光章(旭日重光章)や瑞宝重光章(瑞宝重光章)を授与されている人物は学長や学部長経験者である。このように言うと、「その理屈で行くと濱林の叙勲は尾崎の勲三等旭日中授章(旭日中授章)より一段階下の勲三等瑞宝中授章(瑞宝中授章)なのはおかしいのではないか」と疑問を持たれる方もいるかもしれないが、濱林は定年退職予定年に在職中に亡くなっている。このため叙勲は瑞宝中授章だが、叙位は他の学長、学部長経験者と同じ「従三位」である。さらに、濱林の実績から判断すると、戦後にどこかの新制大学教授に就任することも可能だっただろう。そうなれば、濱林もこの表の小川(旭日重光章)や山本(瑞宝重光章)のように勲二等か最低でも尾崎と同じ旭日中授章になった可能性は否定できない。そして濱林を高師出身の標準と考えた場合、鈴木(長)と奥田はそれほど遅い昇任ではない。なぜなら、本来高師は四年制の学校であるのに対し、奥田、鈴木(長)、岩野の在籍していた東臨教は二年制の学校だったからである。そのため、昇任の際に 2 年程度の差をつけられていても決して不思議ではない。なお、臨教全体が三年制の学校になったのは鈴木(長)と岩野が卒業した大正 15 年 4 月からである。そのため、野村(春)は以前の東臨教の卒業生とは異なり、三年制の東臨教の卒業生である。そして、東臨教の高等官への予想平均昇任年齢は 34 歳である。このことから、奥田(給費)と鈴木(長(給費))の高等官への昇任年齢は比較的平均的だと考えられる。奥田は高等官になった年齢や昇任の速度も鈴木(長)とほぼ一緒であった。ただし、奥田は昭和 21 年 43 歳の時に大島中の校長に任命されている点から判断すると、この時点で高等官四等に任官していた可能性が考えられる。そのため、そのまま教員を継続していたならば、鈴木(長)と同じ叙位叙勲になったものと考えられる。しかし、太平洋戦争後、奄美大島が日本と分離され、さらに日本に復帰後は教職ではなく、生命保険会社に勤務したことで、国家公務員としての業績が計算されなくなった可能性が考えられる。実際、奥田の叙勲理由は教育・研究功労ではなく、昭和 42 年～50 年 3 月まで鹿児島県県会議員として二期選任されたことによる地方自治功労によるものである。高師に関しては濱林と米山(私費)の二名だけのこともあり、平均を出すことは不可能だが、高等官への昇任時の年齢が濱林は 32 歳、米山が 38 歳であることから、通常の高師卒は臨教卒よりも若干早く昇任し、高師卒でも私費学生の場合は臨教給費生より昇任がおそくなること、さらに臨教の私費生は高師本科の私費生よりもさらに昇任が遅くなった可能

性が考えられるということである。もちろん、同じ学校を卒業しても、卒業後の本人の能力次第で出世は大きく変化する。例えば、鈴木(長)と岩野は東臨教の同級生でともに給費生であるが、鈴木(長)は勲四等旭日小授章(旭日小授章)だが、岩野は勲五等瑞宝双光章(瑞宝双光章)で鈴木(長)の三段階下である。

補足になるが、叙勲に関する規定は平成 15 年に改訂されているが、今回の調査対象者は全員改訂以前の規定に基づいているため、旭日章の下が瑞宝章[27]となっている。これにより、旭日小授章の下が、瑞宝小授章、その下が勲五等旭日双光章、そしてその下が瑞宝双光章となるため、岩野の叙勲は鈴木(長)の三段階下に該当する。では、岩野と鈴木(長)はいったいどこで差がついたのかといえば、繰り返しになるが、判任官から高等官への昇任速度である。これから述べることは岩野に関する官位官等を示す詳細な功績調書が不明なため、本人の記述[28]と、同級生の鈴木(長)及び同年代で旧制高校を中退し、文検に合格し、岩野と同じ職位(新制中学校長)で同じ叙勲でだった鈴木(清)の功績著書及び岩野と同年代に旧制東京府立中学教諭だった米山の履歴書を参考にして筆者が推定・復元したものを基にしたものである。また、米山は履歴書に昭和 22 年に内閣より陞叙 2 級の記録があるため、その時の年齢を表 2 に記入した。岩野は昭和 21 年に 40 歳で新宿区立牛込第三中学の校務主任、その後教頭を併任し 5 年 5 か月在籍し、続く同区の落合第二中学校長を皮切りに、世田谷区千歳中学、大田区馬込中学を経て練馬区大泉中学を最後に退職、実に公立中学校長を 14 年 6 か月歴任していたことが判明している。なお、当時の教頭は現在の小中高の固定職とは異なり、国立高等専門学校の主事(副校長職) と同様の併任職であり、これになるにはそれ以前に教務（校務）主任を経験したのちに、教頭を併任することになっていた。そしてこの教務(校務)主任になるには旧制の高等官である必要があった。このことを理解する上で参考になるのが表 2 の鈴木(長)の履歴である。鈴木(長)は 34 歳の時に高等官七等に昇任し、42 歳の時に、教務主任になっているが、実はその 3 年前の 39 歳の時に既に高等官五等に昇任していることが功績調書から判明している。さらに、教務主任になった翌年、つまり 43 歳の時に初の校長事務取扱を、翌年 44 歳の時に教頭職を併任すると同時に二度目の校長事務取扱を受けていることが功績調書に記載されている。以上のことから判断すると、岩野は鈴木(清)のように 38 歳で高等官、教頭職で 40 歳、そして校長で 46 歳、その後在任中に高等官四等程度になったと想定される。なお、旧制中学及び新制高校の校長は校長になった時点で高等官四等になるが、新制中学校長はそれより一段階低い高等官五等になる。では、筆者が、鈴木(清)の例も参考にした上で、岩野が 38 歳で高等官に昇任したと判断した根拠は何か。それは、米山の履歴書[29]である。米山は昭和 22 年 1 月 31 日付で「陞叙二級」の辞令を内閣から受けている。実はこの二級職は戦前の高等官待遇であり教頭等の役職に就くことのできる立場である。この下には三級職があり、これが戦前の判任官待遇の一般教諭であり、一級は校長職である。以上の点から判断すると、岩野は最初の赴任先である牛込第三学校に赴任する以前に高等官に昇任していたものの、高等官に昇任するスピードは、同級生の鈴木(長)よりも遅かった可能性が考えられる。その判断基準の一つが功績調書と履歴書である。鈴木(長)の功績調書には「昭和 21 年 4 月 1 日「勅令 213 号により地方教官に任ぜられ、二級に叙せられ、現在学校勤務を命ぜられ従前の俸給を受く」との記述があるが、前年の昭和 20 年 2 月 1 日に高等官五等待遇となって既に母校熊谷中に在任していたため、校長に次ぐ管理職相当とみなされていた。実際、戦後に鈴木(長)が児玉高校の校長として赴任するまでは熊谷高校で校長事務取扱や教頭職を兼任していたのは先に述べた通りである。同様に野村(春)の功績調書にも「昭和 21 年 4 月 1 日　勅令 213 号公立学校官制任用令をもって三級の地

方教官となり埼玉県立浦和中学校勤務を命せられる」との記述がある。この功績調書によれば、野村(春)も昭和 16 年 3 月 30 日に既に粕壁中から浦和中に赴任している。また岩野と同じ東京都で旧制中学の教員をしていた米山の履歴書も「昭和 21 年 4 月 1 日　勅令 213 号公立学校官制に依り地方教官に任し三級を叙せられ現在勤学校勤務を命ぜられる　東京都」との記述がある。このことから判断すると、通常であれば、岩野も鈴木(長)や野村(春)、米山のように以前から着任していた勤務校にそのまま在任できたはずである。しかも、鈴木(長)も岩野もともに当時在任していた学校は母校である。それにもかかわらず、鈴木(長)は母校である熊谷高校にそのまま在籍していたのに対し、岩野は新制中学に移動している。なぜか。考えられる可能性としては、当時、新制中学を作るにあたり校長や教頭といった管理職にふさわしい人物を東京都が探していた可能性が考えられる。

この当時は旧制中学の校長以上は戦争協力者ということで、公職追放[30]になっていた。そのため、教務(校務)主任が実質、学校運営を担わざる負えない状況にあった。中には「それは教頭の役目では」と考える人もおられるかもしれないが、先述したように、当時の教頭は現在と異なり固定職ではなく、併任職であった。そしてこの教務(校務)主任になるには当時の官等で言うと校長（高等官四等）の下の官等、すなわち高等官五等相当が担当することになる。鈴木(長)は昭和 20 年に高等官五等に昇任しており、熊谷中の校長後任問題も決定していなかったため、鈴木(長)を熊谷中から他の学校に移動させることができなかったものと考えられる。野村(春)に関しては三級、つまり、一教諭に過ぎず管理職にするにはまだ実績が足らなかった。岩野と同じ都内の旧制中学で教員だった米山も上野中学(現東京都立上野高等学校、前身は第二東京市立中学校)からそのまま東京都立江東工業学校の校長として赴任するまで同じ学校に勤務していたが、米山が旧制の高等官七等相当に昇任したのは昭和 22 年である。つまり、いずれは管理職になるにしても、昇任したばかりのものを新制高校や新制中学の教務主任や教頭にするわけにはいかなかった。では、岩野はなぜ中学校の校務主任、教頭で赴任したのだろうか。おそらく岩野の官位が高等官七等から六等に切り替わる時期だったからだろう。つまり、高等官五等の者には在任校の教務主任や教頭に、高等官七等に昇任したばかりの者にはいきなり管理職は荷が重すぎる。そこで、高等官七等としての実績をすでに持っている人物を新制中学の教務主任や教頭に適任と判断したため、岩野は新制中学の方に移動することになったものと考えられる。なお、高等官七等になったものが、高等官六等に昇任前に七等のまま別の学校に赴任するという例は過去にもある。例えば、濱林は福島中教諭から小樽高商教授へと移動したが、濱林は福島中時代に既に高等官七等になっていたが、小樽高商に赴任するときも高等官七等として赴任[31]している。以上のことから判断すると、岩野は鈴木(長)よりも出世が遅かったために新制高校の管理職にはなれず新制中学の方に移動したと考えられるのである。同時にここで疑問が残る。つまり、一見、東臨教を卒業してすぐに東京府立のナンバースクールに移動した岩野の方が秋田中に赴任した鈴木(長)よりも、優秀なイメージがある。しかし、果たしてそうだろうか。東京帝大卒の山本が最初に赴任したのは広島中、鈴木(長)が赴任した秋田中も一中であったことを考慮すると、成績の本当に優秀なものは地方でも一中に赴任させていたのではないか。つまり、東京府内のナンバースクールに赴任したとしても、地方の一中に赴任したものよりも成績優秀だったとは必ずしも限らないということである。なお、鈴木(長)が秋田中の後に赴任した熊谷中学も二中である。最終的に岩野は旧制中学教諭から新制中学教諭として移動したことにより、出世コースから外れたと考えられる。この点については野村(春)について述べるときに詳しく言

及する。

米山に関しては、正確な官位官等については判明していない。そもそも筆者が、この人物にたどり着いたのはある一冊の書籍がきっかけだった。その書籍とは門脇厚司著『東京教員生活史研究』(2004)の扉の写真[32]に無記名で「男子教諭」とだけ記載された履歴書が掲載されていた。もっとも、この写真には出身地、誕生日、学歴、赴任先については詳細に記載されていたため、東高師の名簿を使用し、米山であると確認できた。さらに米山の名前を調査したところ、最終赴任先までは確認することができた。そのため、高等官七等は米山の履歴書の「陞 2 級内閣」を、高等官四等は都立江東工業高等学校長になった年に設定した。この校長になった年を高等官四等としたのは、鈴木(長)の功績調書では児玉高校長に就任した年に「高等官四等」と記載されていること、さらにこの後述べる野村(春)の功績調書にも埼玉県立与野高等学校長になった年に「高等官四等」と記載されていることから判断した。その他の官位官等の動きは米山が高等官位なったときの年齢と同年代の人物、すなわち岩野の時と同様に鈴木(清)の功績調書と鈴木(長)の功績調書等を基に算出した。ただし、米山は東高師では私費生ではあったものの、優秀で人望のある人物だったことはは間違いない。このことは、昭和 41 年から昭和 45 年まで「日本地学教育学会」の会長を務めただけではなく、日本古生物学会の研究紀要である『化石』80 号[33]において会員の氏家宏氏の追悼文で氏家氏が米山からの影響を受けたと記されていることからも判断できる。さらに、2020 年 6 月に出版された朝日生命経営情報マガジン『Asahi Business Club』Vol290 に掲載されている株式会社ソフケン代表取締役の駒村武夫氏のインタビューの中で駒村氏が米山から卒業時に贈られた言葉を励みにしてきた[34]と述べていることからもその人物像がうかがうことができる。なお、叙位・叙勲に関しては国立公文書館デジタルアーカイブに正式な書類がないため不詳だが、高等官に昇任した年齢と校長に就任した年齢と退職時の年齢は判明していること、また尾崎や鈴木のように学会の会長も歴任していることから、米山が大学教員になっていた場合は尾崎と、高校教員だった場合は鈴木(長)と同じ叙位・叙勲である可能性は高いと考えられる。最後に野村(春)だが、野村(春)は私費生であったが、岩野が新制中学へ移動したのと異なり、そのまま新制高校の教員を続けたことで、最終的な出世としては悪くはなかったと考えられる。その根拠は野村(春)の瑞宝小授章に対し、岩野は瑞宝双光章を授与されているからである。この野村(春)叙勲は岩野の二段階上に該当する。つまり、野村(春)は戦後も新制高校教員を継続できたためにこの叙位・叙勲になれたが、岩野は新制中学に移動したために、教員としての出世は早い段階で止まってしまったということである。しかも、校長になった年齢は岩野が 46 歳で、野村(春)は 51 歳と岩野の方が 5 歳も若く、しかも校長として赴任した数も野村(春)の 1 校に対し、岩野は 4 校と数も野村(春)より多い。それにもかかわらず、所属先の差により、叙勲では岩野は野村(春)に大きく差がつけられたということが言えるだろう。さらに、野村(春)の功績調書によれば高等官昇任への正式な辞令は受けておらず、叙位・叙勲を受けるにあたり逆算して算出した推定年齢が記載されており、その年代から判断すると初任官相当の年齢は 46 歳である。

つまり、岩野が中学校長になった年齢で初めて高等官七等相当に任官したことになる。ところで、野村(春)は鈴木(長)と同じ高校長で、鈴木(長)と同様に埼玉県英語教育研究会会長、全国英語教育研究団体連合会副会長といった学会の要職についていたにもかかわらず、叙勲は鈴木(長)の旭日小授章の 1 段階下である瑞宝小授章、叙位は鈴木(長)の二段階下である従五位であることから、鈴木(長)と野村(春)の差は東

臨教での給費か私費かという差が影響しているとも考えられる。なお、この従五位という位階は岩野と同じ新制中学校長だった鈴木(清)と同じことから、野村(春)は叙位においては新制中学校長と同程度と判断されたということである。補足になるが、表 2 に岩野の叙位も記載したが、これは岩野が鈴木(清)と職位と叙勲が同一であったことから、筆者が想定して記載したものであることを断っておく。この他にも鈴木(長)が公立高校長として赴任した数は 3 校であるのに対し、米山は 2 校、野村は 1 校であることから、東臨教(給費)、東高師(私費)、東臨教(私費)という並びになっていることも非常に興味深い。以上の点から、一番の差は所属先の影響が大きかったが、出身校が東高師か東臨教かとともに給費生か私費生かによってその後の待遇に影響があった可能性が考えられる。

## 7　出身校（実業専門学校系と帝大系）による教員としての待遇に対する影響

ここでもう一つ気になる点が出てくる。それは東高師、東臨教、広高師といった高師系卒及び外語卒と言った実業専門学校卒の教員と帝大卒の教員には待遇面で何か特別な差があったのだろうかという点である。そこで再度表 1 を見ると、高等官への昇任速度が一番早いのはやはり東臨教の松川と東京帝大の山本である。官位官等においても初期はこの二人はほぼ同じペースで並んでいた。途中から、山本の昇進スピードが松川よりも早くなっているが、おそらくこれは先述した岩野と野村(春)のケースと同じで、山本の所属が高等教育機関、なかでも旧制帝大に準ずる文理科大学に変更されたのに対し、松川が中等教育機関の所属だったことによる差が生じたものと考えられる。しかし、中には「松川が優秀だったとしても所詮は東臨教出身で、東京帝大の山本とはレベルが異なる」と感じる方もいるだろう。だが、果たして本当にそうだろうか。ここで注目すべきなのは小川芳男である。小川は外語を卒業後、高田高女、米沢高工、外語を経て外事、東外大教授となり最後は学長まで務めた人物である。そのため最終的な官位官等は従三位高等官二等となっている。そしてこの官位官等は濱林、山本と同じである。これに対して東京帝大卒の佐々木は正四位高等官三等で小川の一段階下である。安良岡は従四位高等官三等と官位は同じ東京帝大卒の山本の二段階下で、官等は一段階下になっている。さらに言えば、安良岡は同じ学芸大教授だった尾崎及び同じ東京帝大卒の佐々木と比較しても官等は一緒であっても官位は一段階下になっている。これは学歴がいかに優れていたとしても、最終的には就職後の実績が重視されるということである。では、尾崎の方が安良岡よりも評価が高かった理由はなにか。安良岡は尾崎と比較し、いったいどこで差がついたのだろうか。安良岡に関する書類は専修大学の紀要[35]に発表されているものに限定されるため、明確には断定できないが、安良岡は学内外における役職に一切ついていなかった可能性が考えられる。筆者がこのように判断した理由は、先述した尾崎が学内はともかく、学外では日本社会科教育学会会長を歴任している記載が功績調書や学会誌で確認できるが、専修大学紀要においては、安良岡の学術的内容に関する記述はあるものの、学内外での役職等に関する記載が一切なされていないからである。さらに安良岡の官位官等は東臨教出身の鈴木(長)と全く同一だが、表 2 でもわかるように、鈴木(長)は学術的著作に関しては安良岡とは対照的に全くないが、鈴木(長)は校長という管理職だけではなく埼玉県外国語教育研究会(現埼玉県高等学校英語教育研究協議会)の創設メンバーで副会長を、全国高等学校視聴覚研究協議会副会長、埼玉県高等学校視聴覚教育研究協議会初代会長等学会活動が評価されたものと考えられる。なお、安良岡は天

下りするまで一貫して国立学校に勤務していたこと、さらに叙位・叙勲が鈴木(長)と同じことから、官位官等の推移は鈴木(長)と同じであると考えられるため、表 2 には参考として鈴木の推移年齢を記入した。同様の例として、上智大学の小稲義男も注目に値する。小稲は小川と同様に外語卒で研究社の『新英和中辞典』の第 3 版から第 5 版の編集委員及び『新英和大辞典』の第 5 版の編集主幹を歴任した偉大な英語学者であるが、最終的な叙勲は同じ大学教授の尾崎や佐々木と同様の旭日中授章ではなく、鈴木(長)や安良岡と同じ旭日小授章である。しかも、小稲の出身校は外語で、尾崎の東臨教や東高師研究科中退の学歴に劣っているわけではない。むしろ、当時の外語は東高師と同じ実業専門学校であり、尾崎とは異なり本科を卒業していることで学歴としては尾崎よりも上である。それにもかかわらず、小稲の方が尾崎よりも評価が低い理由は何だろうか。私見としては三点考えられる。一点目は、小稲の評価が低かったのは所属機関が国公立という公的機関ではなくなったからである。事実、今回の調査対象者は小稲を除きすべて国公立の学校の教員であり、旧制の官位官等は天皇の官吏[36]である高等官に与えられるものであった。ところが、小稲の所属は私学の上智大学である。今でこそ、私大の教員も国公立大の教員と同等の評価をされているが、かつては国公立大学の教員の天下り先でもあった。このことは表 2 にも表れており、在職中に亡くなった濱林と、在職先の非常勤講師だけを行っていた佐々木を除くと、尾崎、山本、小川、安良岡は国立大学を定年退官後私大の教授になっている。なお、鈴木(長)も大学教員のケースに似ており、定年退職後私学の高校の副校長に就任している。もっとも、小稲も昭和 2 年に外語を卒業後、東京高等商船学校を皮切りに清水高等商船学校を経て東京商船大学(商船大)という国立学校の教員で、昭和 29 年の 47 歳の時に上智大学に移籍[37]してきたことがわかっている。二点目の疑問は、「なぜ小稲の評価は鈴木(長)と同じだったのか」という点である。しかも小稲の学問的業績は鈴木(長)よりもはるかに上であるにもかかわらず、である。この疑問に対して、私見になるが、国立学校の教員だった時点での官位官等である。小稲は最終的な叙勲時の年齢が鈴木(長)ほぼ同じ年齢(小稲は 77 歳、鈴木(長)は 75 歳)で、叙勲の種類(旭日小授章)が同じであることから、恐らく鈴木(長)と同じ官位官等の推移をしてきたものと考えられる。そこで、小稲にも安良岡の場合と同様に鈴木(長)の推移年齢を記入して判断すると、47 歳は小稲が高等官四等、すなわち商船大の教授に昇任していたと想定される時期に該当する。そして小稲が商船大で教授になっていた場合は高等官四等だった可能性が考えられる。これは佐々木が外事に教授として赴任してきたときの官等が高等官四等であったことから判断したものである。反対に小稲がまだ教授に昇任せず助教授だった場合には、高等官五等であったと想定される。では、実際に小稲はこの時期に教授に昇任していたのか否かというと、詳細な書類がないのであくまで私見になるが、恐らく教授に昇任していたと考えられる。その根拠は尾崎が師範学校教授になったのが 45 歳であること、上智に移籍した時に教授であったこと、さらに鈴木(長)の叙勲と同じであることから、恐らく鈴木(長)が児玉高校の校長になった 45 歳程度で教授になった可能性があると判断した。もっとも、小稲が商船大在任中に助教授だった可能性も完全には否定はできない。その理由は上述したように、当時の私学は国立大学教員の天下り先だったことから、国立大学助教授が私大では教授として採用されたという可能性も考えられるからである。現代においても、国立大学の准教授が国立高専に採用される場合は教授に採用されるケースがあるが、それと同じであると考えるとわかりやすい。他にも、後述するが、小稲と同じ上智大学教授刈田元司の叙勲から判断したものである。補足になるが、表 2 の小稲の最終叙位と叙位の授与形式は不明だが、鈴木(長)と安良岡から想定し

て記載したものである。このように言うと、「上智に移動したとはいっても、その後長く研究をしていたわけだから、そのままというのはおかしい」と考える方もおられるだろう。確かに、小稲は移動後 24 年にわたり上智大学で教鞭をとってきた。しかし、それはあくまでも私学での話であり、国立学校ではない。しかも、小稲は商船大や上智在籍中に学部長や学長といった管理職や学会の会長・副会長といった要職にもついた形跡がみられない。そのため、仮に上智に移籍後の経歴[38]までを推定として計算しても、最終的に高等官三等相当に到達するか否かという程度だったものと考えられる。筆者がこのように判断した根拠は先に触れた刈田元司の叙勲である。刈田は 1912 年生まれで、年齢は小稲より年下であり、出身大学も上智大学で、上智を卒業後助手から講師、助教授、教授に昇任した生粋の上智人であり、小稲とは異なり生粋の私学出身者である。この刈田は小稲が昭和 59 年 77 歳で叙勲した翌昭和 60 年 73 歳の時に小稲より二段階上の旭日中授章を授与されている。刈田も国立公文書館デジタルアーカイブに資料が掲載されていないため、詳細は不明だが、刈田が小稲よりも上の叙勲をした理由は、刈田は単著が多く、学内においては学部長を、学外においてはアメリカ文学会会長、日本英文学会理事を歴任[39]したことによるものだと考えられる。このため、国立大学教授同等と判断されたものと考えられる。ただし、同じ学部長経験者だった山本と比較すると、山本が瑞宝重光章であったのに対し、刈田は山本の一段階下の旭日中授章であり、通常の国立大学教授と同等の扱いである。つまり、当時の私大の教員は国立大学の教員と比較して 1 段階に見られていた可能性があるということである。。このことから判断すると、国立大学教員の定年前に私大に移動したことから、小稲の業績は一段階低く評価された可能性が考えられる。三点目の理由としては、確かに小稲は鈴木(長)よりも学問的業績はあるものの、その学問的評価が必ずしも正当に評価されなかった可能性があるということである。この点については 1991 年に研究社の『英語青年』10 月号に刈田による小稲に対する追悼文に「学者としての業績はゴールズワージとグレアム・グリーンの翻訳 2 点の外は、すべて研究社発行の辞書の編纂で、『僕の新英和辞典』(32 年)、『新簡約英和辞典』(31 年)、『新英和中辞典』(42 年～第 5 版、60 年)、その他学生や一般人を対象とした辞典のほか、『新英和大辞典』の 3 版(28 年)以来編集者の一人として、第 5 版(55 年)では編集代表として、この「英和大辞典」の完成に力を尽くされた。」(P36)とあることからも刈田の小稲に対する学問的評価を垣間見ることができる。勿論、この文章を書いた刈田も辞書学者としての小稲を高く評価はしている。しかし、日本で辞書学が学問的に高い評価を得るようになったのは実はそれほど古くはなく、どちらかといえば、まだこの 20 年～30 年程度である。特に辞書の多くは、単著というよりは、多くの研究者による共著形式が多いことから、単独の業績ととしては評価されにくい傾向がある。まして、当時は今よりも辞書学はマイナーな分野であった。そのため、小稲の業績は適正に評価されず、結果的に公立高校長である鈴木(長)と同格と判断されたのではないかと考えられるのである。

## 8　まとめ

以上のことから、必ずしも出身大学が帝大だから高く評価され、臨教だから、生徒に馬鹿にされ、学歴コンプレックスをかかえ、しかもあまり待遇にも恵まれていないというわけではなく、むしろ帝大卒と同等の扱いを受けている場合もあるのが判明している。つまり、最終的な評価は就職してからの評価が重

要であり、学歴ではなかったということである。なお、本稿はなるべく様々な資料を収集・分析・検討した結果に基づいた考察するようにはしているが、どうしても明確な資料が不足することから、推論で判断せざるを得ない部分も少なくない。この推論部分に関しては今後何らかの資料を発掘したうえで、確認・修正していきたいと考えている。

注

1) 竹中龍範著「英語教員養成史における第一次臨時教員養成所―第五臨時教員養成所の場合」『日本英語教育史学会研究第 26 号』P52、注４、日本英語教育史学会、2011
2) 杉森知也著「中等教員の「計画的養成」臨時教員養成所―1922～1932 年頃における実態の検討から」『研究紀要第 60 号』P131,日本大学文理学部人文科学研究所,2000)
3) 山田浩之著『教師の歴史社会学』、P198、晃洋書房、2002
4) 尾崎乕四郎・松川昇太郎・鈴木長作・野村春雄・佐々木達・山本忠雄・小川芳男・鈴木清の８名
5) 奥田愛正・岩野由紀夫・濱林生之助・米山芳成・安良岡康作・小稲義男の６名
6) 尾崎乕四郎・松川昇太郎・佐々木達・山本忠雄・小川芳男・安良岡康作・小稲義男の７名
7) Wikipedia には尾崎は東京学芸大学を定年退官後「聖徳大学短期大学部教授」と記載されているが、国立公文書館所蔵の『平成３年 11 月死亡者叙位・叙勲　第 155 冊　件名　叙位について(尾崎乕四郎)』の履歴書では、「聖徳大学講師」と記載されていることから、本稿でも「聖徳大学講師」として記載した。
8) 国立国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵『東京高等師範学校・第一臨時教員養成所一覧　自大正 14 年４月～至大正 15 年３月』(1926)によれば,専攻科の入学資格条件は以下のようになっている。

「第三十七條　専攻科
　生徒ハ左ノ資格ヲ有スル者ニ就キ学校長ノ特ニ適当ト認ニムル者ニ限リ入学セシム
一　本校及ビ廣島高等師範学校本科専修科卒業生
二　内外国ニ於ケル官公私立ノ高等ナル学校ノ卒業生
三　多年教職ニ従事シ相当ノ学識経験ノアル者」(PP46-47)

9) 国立国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵『東京高等師範学校・第一臨時教員養成所一覧　自大正 14 年４月～至大正 15 年３月』(1926)によれば,研究科の入学資格条件は以下のようになっている。

「第三十一條　研究科
生徒ハ本校卒業生中ヨリ学校長之ヲ選抜シ文部大臣ノ認可ヲ經テ入学セシムルモノトス
学校長ハ前項ノ外授業上差支ナキ場合ニ於テ左ノ資格ヲ有スルモノニ就キ特ニ適当ト認ムルモノニ限リ入学セシムルコトヲ得
一　内外国ニ於ケル官公私立ノ高等ナル学校ノ卒業生

ニ　多年教職ニ従事シ相当ノ学識経験ノアル者」(PP45-46)

10)　鈴木聡著「臨時教員養成所卒業生の動向に関する一考察―東京高等師範学校と東京第一臨時教員養成所卒業生を対比して」、『鳥羽商船高等専門学校紀要第 39 号』、PP30-31、鳥羽商船高等専門学校、2016

11)　平田暉子著『父奥田愛正追想録』PP67-88　広報社、1991

12)　秋高だより　昭和 52 年 6 月 25 日号　3 面に「卯申会(入学 50・卒業 45 記念)全国同期会開かる」の記事の(恩師)の項目の中で鈴木長作(埼玉)」が記載されている。

13)　太田壽吉著「深井奨学財団と岩野先生」『「東京市小石川区第六天町 7 番地」改訂版』所収、P50、私家版、2001

14)　深井鑑一郎 https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B7%B1%E4%BA%95%E9%91%91%E4%B8%80%E9%83%8E

15) 岩野由紀夫著『「東京市小石川区第六天町 7 番地」改訂版』PP130-131、P136、私家版、2001

16) 杉森知也著「中等教員の「計画的養成」臨時教員養成所―1922～1932 年頃における実態の検討から」『研究紀要第 60 号』P131,日本大学文理学部人文科学研究所,2000)

17) 東博通著『北の街の英語教師―濱林生之助の生涯』、P21、開拓社、2007

18) 山田浩之著『教師の歴史社会学』、P198、晃洋書房、2002

19) 濱林は福島県立福島中学校から小樽高等商業学校に教授として、山本は広島第一中学から広島高等師範学校に教授として転出している。

20) 履歴書」『平成 2 年 8 月死亡者叙位・叙勲　第 113 冊　件名　叙位について(小川芳男)』所収　国立公文書館所蔵

21) 小川芳雄著『私はこうして英語を学んだ』、P88、TBS ブリタニカ、1979

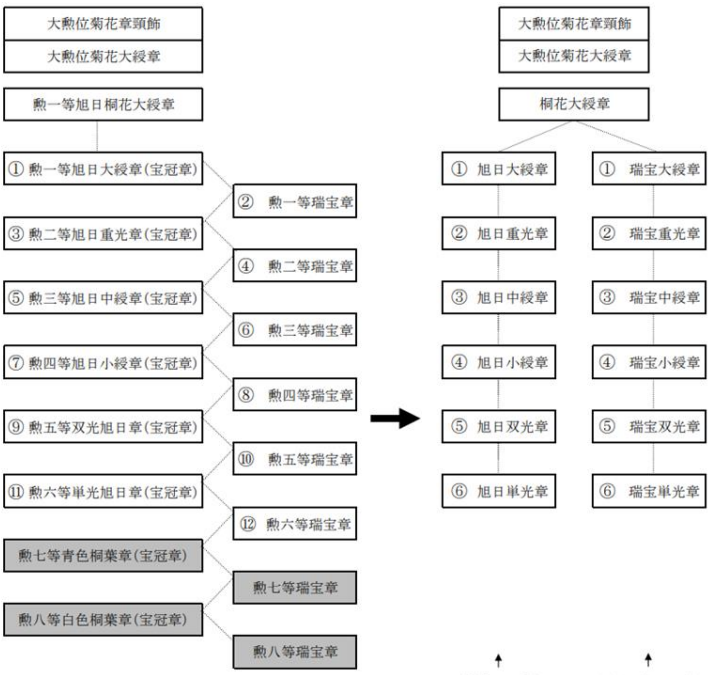
22)『昭和五年度 東京文理科大学・東京高等師範学校・第一臨時教員養成所一覧』PP429-436,東京文理科大学、1930

23)『昭和五年度 東京文理科大学・東京高等師範学校・第一臨時教員養成所一覧』PP425,東京文理科大学、1930

24)『昭和五年度 東京文理科大学・東京高等師範学校・第一臨時教員養成所一覧』PP179,東京文理科大学、1930

25) 秦郁彦著『官僚の研究―日本を創った不滅の集団』に「とくに「大学は出たけれど」のあいことばがはやった昭和初年の大不況には、警視庁巡査や市役所の臨時雇員で食いつないだ例も見られた」(P29)とあることから、野村(春)もこのケースに該当したものと考えられる。

26)『昭和五年度 東京文理科大学・東京高等師範学校・第一臨時教員養成所一覧』PP429-436,東京文理科大学、1930




（平成 29 年 6 月 19 日有識者会合資料６(栄典制度の概要）P6

27）https://www8.cao. go.jp/shokun/yushikisha/290619shiryo6.pdf）

28）岩野由紀夫著『「東京市小石川区第六天町 7 番地改訂版」PP132－133、私家版、2001

29）門脇厚司著『東京教員生活史研究』扉写真 xii、学文社、2004

30）渡部昇一・百田尚樹共著『ゼロ戦と日本刀』、P188,PHP 文庫、2015

31）鈴木聡著「濱林生之助に関する一考察―濱林はなぜ小樽高等商業学校教授に転出できたのか」『鳥羽商船高等専門学校紀要第 37 号』招収、P56、鳥羽商船高等専門学校、2014

32）門脇厚司著『東京教員生活史研究』扉写真 xii～xⅳ、学文社、2004

33）猪郷久義著「氏家宏氏を悼む」日本古生物学会研究紀要、『化石』80 号所収、PP72-74、2006（https://www.jstage.jst.go.jp/article/kaseki/80/0/80_KJ00004381556/_pdf）

34）駒村武夫著「暮らしに役立つアイデア豊かなモノづくり『ユビラーク』、『ラクパネ』などヒット続々」、『Asahi Business Club Vol.290 6 月号』所収　朝日生命、2020

35）秦郁彦著『官僚の研究―日本を創った不滅の集団』に「明治憲法体制においては「官吏ハ天皇陛下及天皇陛下ノ政府ニ対シ忠順勤勉ヲ主トシ……職務ヲ尽スベシ」(官吏服務紀律第一条)とあるように、官吏は天応に忠誠を誓い国会(議員)が国民を代表する二元対立型であった。」（P43）とある。

36）専修大学学会編「安良岡康作教授履歴・業績」『専修人文論集　第 41 号―西川善介教授・小宮曠三教授・安良岡康作教授退官記念号』所収、PP186－198、1988　※本来「退官」は「官」という字が入っていることからもわかるように、この言葉は国立学校の教員の退職に使用すべきで、私学である専修大学の場合は「退職」もしくは「退任」とするべきだが、恐らく当時の編集担当者があまり詳しくなく、「退官」としたものと思われる。

37)　コトバンク刈田元司 https://kotobank.jp/word/%E5%88%88%E7%94%B0%20%E5%85%83%E5%8F%B8-164268

38) 通常は公務員としての在籍時までをカウントするため、小稲は途中退職したので、47 歳時点までのカウントになる。そのため、筆者は小稲は 47 歳時点で東京商船大学教授で高等官四等相当であったと考えている。なお、退職後でもカウントされる場合は何らかの公的役職(例えば、私大の学長等)を担っている場合のみである。

39) 刈田元司著「透明な学者小稲さん(小稲義男氏追悼)」『英語青年 10 月号』所収、P360、研究社、1991

参考文献

1　竹中龍範著「英語教員養成史における第一次臨時教員養成所―第五臨時教員養成所の場合」『日本英語教育史学会研究第 26 号』、日本英語教育史学会、2011

2　杉森知也著「中等教員の「計画的養成」臨時教員養成所―1922～1932 年頃における実態の検討から」『研究紀要第 60 号』、日本大学文理学部人文科学研究所,2000)

3　山田浩之著『教師の歴史社会学』、晃洋書房、2002

4　国立公文書館：『平成 3 年 11 月死亡者叙位・叙勲　第 155 冊　件名　叙位について(尾崎乕四郎)』

5　国立公文書館：『職員の採用について(松川昇太郎)』日本ユネスコ委員会

6　国立公文書館：『平成 2 年 8 月死亡者叙位・叙勲　第 104 冊　件名　叙位について(鈴木長作)』

7　国立公文書館：『平成 4 年 7 月死亡者叙位・叙勲　第 101 冊　件名　叙位について(野村春雄)』

8　国立公文書館：『昭和六十一年・内閣人事公文・叙位・第 175 巻　件名番号 001　東京外国語大

9　国立公文書館：『平成 3 年 8 月死亡者叙位・叙勲　第 115 冊　件名　叙位について(山本忠雄)』

10 国立公文書館：『平成 2 年 8 月死亡者叙位・叙勲　第 113 冊　件名　叙位について(小川芳男)』

11 国立公文書館：『平成 2 年 4 月死亡者叙位・叙勲　第 57 冊　件名　叙位について(鈴木清)』

12 鈴木聡著「臨時教員養成所卒業生の動向に関する一考察―東京高等師範学校と東京第一臨時教員養成所卒業生を対比して」、『鳥羽商船高等専門学校紀要第 39 号』、鳥羽商船高等専門学校、2016

13 平田暉子著『父奥田愛正追想録』、広報社、1991

14 国立国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵『東京高等師範学校・第一臨時教員養成所一覧自大正 14 年 4 月～至大正 15 年 3 月』、東京高等師範学校、1926

15 秋田高校同窓会監修『秋高だより　昭和 52 年 6 月 25 日号』、秋田高校、1977

16 東博通著『北の街の英語教師―濱林生之助の生涯』、開拓社、2007

17 小川芳雄著『私はこうして英語を学んだ』、TBS ブリタニカ、1979

18 『昭和五年度 東京文理科大学・東京高等師範学校・第一臨時教員養成所一覧』、東京文理科大学、1930

19 岩野由紀夫著『「東京市小石川区第六天町 7 番地改訂版」私家版、2001

20 門脇厚司著『東京教員生活史研究』、学文社、2004

21 渡部昇一・百田尚樹共著『ゼロ戦と日本刀』、PHP 文庫、2015

22 秦郁彦著『官僚の研究―日本を創った不滅の集団』、講談社学術文庫、2022

23 駒村武夫著「暮らしに役立つアイデア豊かなモノづくり『ユビラーク』、『ラクパネ』などヒット続々」、『Asahi Business Club Vol.290 6 月号』所収　朝日生命、2020

24 猪郷久義著「氏家宏氏を悼む」日本古生物学会研究紀要、『化石』80 号所収、2006

25 鈴木聡著「濱林生之助に関する一考察―濱林はなぜ小樽高等商業学校教授に転出できたのか」『鳥羽商船高等専門学校紀要第 37 号』招収、P56、鳥羽商船高等専門学校、2014

25 専修大学学会編『専修人文論集　第 41 号、1988

26 刈田元司著「透明な学者小稲さん(小稲義男氏追悼)」『英語青年 10 月号』所収、研究社、1991

| | 臨時教員養成所 | | | | | | 高等師範 | | 帝大 | | | 外国語学校 | | 文検 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 氏名 | 尾崎乕四郎 | 奥田愛正 | 松川昇太郎 | 鈴木長作 | 岩野由岐夫 | 野村春雄 | 濱林生之助 | 米山芳成 | 佐々木達 | 山本忠雄 | 安良岡康作 | 小稲義男 | 小川芳男 | 鈴木清 |
| 生没年 | 1902-1991 | 1903-1981 | 1904-1976 | 1905-1990 | 1906-2007 | 1910-1992 | 1887-1947 | 1909－ | 1904-1986 | 1904-1991 | 1917-2001 | 1907-1991 | 1908-1990 | 1907-1990 |
| 学歴 | 新潟県高田師範学校 | 鹿児島県立大島中学校 | 専門学校入学者検定試験 | 埼玉県立熊谷中学校 | 東京府立第四中学校 | | 三重師範学校 | 山梨県立甲府中学校 | 第八高等学校 | 大阪府立八尾中学 | 第二東京市立中学校 | | 岡山黌 | 山口高等学校理科甲類第三学年中退 |
| | 東京高等師範学校附設東京第一臨時教員養成所 | 東京医学専門学校 | 東京高等師範学校附設東京第一臨時教員養成所 | | | | | | | 大阪高等学校 | 第一高等学校 | | | |
| 最終学歴 | 東京高等師範学校研究科中退 | 東京高等師範学校附設東京第一臨時教員養成所 | 文部省高等教員検定試験合格(英語) | 東京高等師範学校附設東京第一臨時教員養成所 | 東京高等師範学校附設東京第一臨時教員養成所 | 東京高等師範学校附設東京第一臨時教員養成所 | 広島高等師範学校 | 東京高等師範学校 | 東京帝国大学 | 東京帝国大学 | 東京帝国大学 | 東京外国語学校 | 東京外国語学校 | 文部省中等教員検定試験合格（数学） |
| 専門分野 | 地理 | 数学 | 英語 | 英語 | 英語 | 英語 | 英語 | 理科 | 英語 | 英語 | 国語 | 英語 | 英語 | 数学 |
| 卒業時の年齢 | 22歳 | 22歳 | 20歳 | 21歳 | 20歳 | 21歳 | 23歳 | 24歳 | 26歳 | 23歳 | 22歳 | 22歳 | 23歳 | 24歳 |
| 初任地の學校の種類 | 尋常・高等小学校 | 旧制実業学校 | 旧制実業学校 | 旧制中学校 | 旧制中学校 | 尋常高等小学校 | 旧制中学校 | 旧制中学校 | 旧制大学 | 旧制中学校 | 旧制師範学校 | | 旧制高等女学校 | 尋常高等小学校 |
| 赴任先(勤務先)一覧 | 春日新田尋常・高等小学校 | 三重県立志摩水産学校 | 三重県立松阪商業学校 | 秋田県立秋田中学校 | 東京府立第四中学校 | 埼玉県北足立郡芝尋常高等小学校代用教員8 | 鹿児島県立川内中学校 | 大阪府立住吉中学校 | 東京帝国大学(副手・講師) | 広島県立第一中学校 | 長野県立長野師範学校 | 東京高等商船学校 | 新潟県立高田高等女学校 | 島根県簸川郡荒木村尋常高等小学校代用教員 |
| | 岡山県立女子師範学校 | 鹿児島県立大島中学校 | 神奈川県立湘南中学校 | 埼玉県立熊谷中学校 | 東京都立第四中学校 | 埼玉県北足立郡芝尋常高等小学校訓導 | 福島県立福島中学校 | 島根県立師範学校 | 東京外事専門学校教授 | 広島高等師範学校教授 | 東京第二師範学校女子部 | 清水高等商船学校 | 米沢高等工業学校 | 島根県簸川郡出西尋常高等小学校代用教員 |
| | 鴨川尋常・高等小学校 | 鹿児島県立大島中学校長兼安陵中学校長 | 藤沢市立藤沢高等女学校長 | 埼玉県立熊谷高等学校 | (新制)新宿区牛込第三中学校 | 埼玉県立粕壁中学校 | 小樽高等商業学校教授 | 第二東京市立中学校 | 東京外国語大学教授 | 広島文理科大学助教授 | 東京学芸大学教授 | 東京商船大学 | 東京外国語学校 | 鳥取県立米子中学校 |
| | 千葉県立長狭中学校 | 臨時北部南西諸島政庁文教部長 | 東京高等師範学校嘱託講師 | 埼玉県立児玉高等学校長 | (新制)新宿区落合第二中学校長 | 埼玉県立浦和中学校 | 小樽経済専門学校教授 | 東京都立上野中学校 | | 広島文理科大学教授 | | | 東京外事専門学校 | 島根県立工業学校修道館 |
| | 千葉県立千葉女子師範学校 | 兼行政特別監査部長 | 藤沢市立第一中学校長(新制) | 埼玉県立春日部女子高等学校長 | (新制)世田谷区千歳中学校長 | 埼玉県立川口中学校 | | 東京都立上野高校 | | 大阪女子大学教授 | | | 東京外国語大学 | 鹿児島県立加治木中学校 |
| | 東京第一師範学校教授 | 奄美群島政府文教部長 | 中学校設置基準設定委委員 | 埼玉県立久喜高等学校長 | (新制)大田区馬込中学校長 | 埼玉県立川口高等学校 | | 東京都立江東工業高等学校長 | | 神戸大学教授学部長 | | | 東京外国語大学学長 | 鳥取県立米子農工学校 |
| | 東京学芸大学講師 | 琉球臨時中央政府文教局長 | 神奈川県教育委員会 | | (新制)練馬区立大泉中学校長 | 埼玉県立与野高等学校 | | 東京都立工芸高等学校長 | | | | | | 鳥取県立米子工業学校理数科教授 |
| | 東京学芸大学教授 | 琉球政府文教局長 | 神奈川県立湘南高等学校長 | | | 埼玉県立浦和高等学校 | | | | | | | | 鳥取県立米子農商学校 |
| | | 琉球大学理事 | | | | 埼玉県立与野高等学校長 | | | | | | | | 鳥取県米子市立第三中学校 |
| | | 琉球生命 | | | | | | | | | | | | 鳥取県西伯郡法勝寺村外西ヶ村中学校組合公立学校長 |
| | | 協栄生命 | | | | | | | | | | | | 鳥取県米子市立第三中学校教諭 |
| | | | | | | | | | | | | | | 鳥取県教育委員会事務局 |
| | | | | | | | | | | | | | | 鳥取県米子市立第一中学校長 |

**表１　尾崎・奥田・松川・鈴木(長)・岩野・野村(春)・濱林・米山・佐々木・山本・安良岡・小稲・小川・鈴木(清)学歴・赴任先対象表**

# 東京第一臨時教員養成所卒業生の赴任地決定及びその後の動向に関する一考察
## ―他機関卒業生との対比して

| | 臨時教員養成所 | | | | | | 高等師範 | | 帝大 | | | 外国語学校 | | 文検 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 氏名 | 尾崎哥四郎 | 奥田愛正 | 松川昇太郎 | 鈴木長作 | 岩野由岐夫 | 野村春雄 | 濱林生之助 | 米山芳成 | 佐々木達 | 山本忠雄 | 安良岡康作 | 小稲義男 | 小川芳男 | 鈴木清 |
| 生没年 | 1902-1991 | 1903-1981 | 1904-1976 | 1905-1990 | 1906-2007 | 1910-1992 | 1887-1947 | 1909－ | 1904-1986 | 1904-1991 | 1917-2001 | 1907-1991 | 1908-1990 | 1907-1990 |
| 高等官八等の初任時の年齢 | | | | | | | | | | | | | | |
| 初叙位(正八位)時の年齢 | | | | | | | | | | | | | | |
| 高等官七等への初任時の年齢 | 29歳 | 34歳 | 25歳 | 34歳 | 38歳 | 46歳 | 32歳 | 38歳 | | 25歳 | 34歳 | 34歳 | 32歳 | 38歳 |
| 初叙位(従七位)時の年齢 | 29歳 | 34歳 | 25歳 | 34歳 | 38歳 | 46歳 | 32歳 | 38歳 | | 25歳 | 34歳 | 34歳 | 32歳 | 38歳 |
| 高等官六等の年齢 | 31歳 | 36歳 | 27歳 | 37歳 | 40歳 | 48歳 | 35歳 | 40歳 | | 27歳 | 37歳 | 37歳 | 35歳 | 40歳 |
| 正七位の年齢 | 31歳 | 36歳 | 27歳 | 37歳 | 40歳 | 48歳 | 35歳 | 40歳 | | 27歳 | 37歳 | 37歳 | 35歳 | 40歳 |
| 高等官五等の年齢 | 33歳 | 39歳 | 30歳 | 39歳 | 46歳 | 51歳 | 37歳 | 49歳 | | 29歳 | 39歳 | 39歳 | 37歳 | 49歳 |
| 従六位の年齢 | 33歳 | 39歳 | 30歳 | 40歳 | 46歳 | 51歳 | 37歳 | 49歳 | | 29歳 | 40歳 | 40歳 | 37歳 | 49歳 |
| 正六位の年齢 | 37歳 | | 41歳 | 45歳 | 54歳 | 55歳 | 39歳 | 51歳 | 46歳 | 32歳 | 45歳 | 45歳 | 38歳 | 54歳 |
| 高等官四等の年齢 | 37歳 | | 41歳 | 48歳 | 54歳 | 55歳 | 39歳 | 51歳 | 46歳 | 32歳 | 48歳 | 48歳 | 39歳 | 54歳 |
| 従五位の年齢 | 49歳 | | | 50歳 | | 82歳 | 42歳 | 53歳 | 49歳 | 34歳 | 50歳 | 50歳 | 43歳 | 83歳 |
| 正五位の年齢 | 54歳 | | | 55歳 | | | 47歳 | 55歳 | 54歳 | 39歳 | 55歳 | 55歳 | 49歳 | |
| 高等官三等の年齢 | 49歳 | | | 55歳 | | | 48歳 | | 49歳 | 34歳 | 55歳 | 55歳 | 45歳14 | |
| 従四位の年齢 | 59歳15 | | | 85歳 | | | 52歳 | | 57歳 | 44歳 | 84歳 | | 54歳 | |
| 正四位の年齢 | 89歳 | | | | | | 57歳 | | 82歳 | 53歳 | | | 60歳 | |
| 高等官二等の年齢 | | | | | | | 55歳 | | | 53歳 | | | 53歳 | |
| 従三位の年齢 | | | | | | | 60 | | | 87歳 | | | 81歳 | |
| 公務員時の最終職位 | 東京学芸大学名誉教授 | | (新制)公立高等学校長 | (新制)公立高等学校長 | (新制)公立中学校長 | | 小樽経済専門学校教授 | (新制)公立高等学校長 | 東京外国語大学名誉教授 | 神戸大学名誉教授 | 東京学芸大学名誉教授 | 上智大学名誉教授 | 東京外国語大学学長 | (新制)公立中学校長 |
| 著作 | 13冊 | — | 10冊 | 2冊 | 5冊 | — | 44冊 | 6冊 | 11冊12 | 26冊 | 14冊 | 8冊 | 102冊 | — |
| 論文等 | 8本 | — | 5本 | 0本 | 0本 | — | 255本 | | — | 98本 | — | 8本 | — | — |
| 公務員定年(退職)後の再就職先 | 聖徳短期大学講師25 | 鹿児島県議会議員 | 神奈川大学教授 | 越生高等学校副校長 | 育英工業高等専門学校教員 | 埼玉県立大宮商業高等学校非常勤講師 | なし（死亡のため） | | 東京外国語大学非常勤講師 | 南山大学教授 | 専修大学教授 | | 京都外国語大学客員教授 | 学校法人米子北高等学校教諭 |
| | | | | 東京成徳女子高校教諭 | | 学校法人若芝学園さかえ幼稚園園長 | | | | 大谷女子大学教授 | | | 神田外国語大学学長 | 学校法人米子北高等学校教頭 |
| | | | | | | 学校法人若芝学園さかえ幼稚園講師 | | | | | | | | 学校法人米子北高等学校講師 |
| 叙勲の種類 | 勲三等旭日中授章 | 勲五等瑞宝双光章 | | 勲四等旭日小授章 | 勲五等瑞宝双光章 | 勲四等瑞宝小綬章 | 勲三等瑞宝中綬章 | | 勲三等瑞宝中綬章 | 勲二等瑞宝重光章 | 勲四等旭日小授章 | 勲四等旭日小授章 | 勲二等旭日重光章 | 勲五等瑞宝双光章 |
| 叙勲時の年齢 | 88歳 | 72歳 | | 75歳 | 88歳 | 82歳 | 58歳 | | 71歳 | 71歳 | 84歳 | 77歳 | 71歳 | 83歳 |
| 最終叙位 | 正四位 | | | 従四位 | 従五位 | 従五位 | 従三位 | | 正四位 | 従三位 | 従四位 | 従四位 | 従三位 | 従五位 |
| 叙位の授与形式 | 勅授 | | | 勅授 | 奏授 | 奏授 | 勅授 | | 勅授 | 勅授 | 勅授 | 勅授 | 勅授 | 奏授 |

表２　尾崎・奥田・松川・鈴木(長)・岩野・野村(春)・濱林・米山・佐々木・山本・安良岡・小稲・小川・鈴木(清)任官年齢推移・最終職位・業績・天下り先・叙位・叙勲対象表

# The involvement with Hori Teikichi's disarmament policy before the outbreak of the Pacific War

Toba National College of Technology General Education Department
Associate Professor Takeshi Hashiyama

## Introduction

This time, I will consider Teikichi Hori[1] from Kitsuki City, Oita Prefecture, who was Isoroku Yamamoto's sworn friend from the Marine Academy. From an early age, Teikichi was taken by his father to visit not only the nearby Usa-jingu Shrine, but also the Ise-jingu Shrine.

By the way, from 1933 to 1934, a large-scale personnel change was carried out within the Navy, called the "Osumi Personnel", which derives from the name of the minister then. At that time, within the naval department, there were two conflicting structures, in other words, the treaty faction (international cooperation faction) and the fleet faction (foreign hardliners). And the last stronghold in this "Personnel Affair" was Vice Admiral Teikichi Hori. It is "A Retired Personnel Affair".

I will mainly analyze the next. That is to say, in "the battle of the wings", in the end, the central figure of the former, Teikichi Hori, who was said to be the navy's most talented person, was forced to retire. In addition, I will consider whether the Pacific War could have been avoided if Hori had not been overthrown by the "Osumi personnel" and had smoothly taken up important posts such as Minister of the Navy.

## 1. A person named Teikichi Hori

It can be said that Teikichi Hori's life in the navy was about how to promote international cooperation and disarmament. It is a way of life that is inevitably guided for those who have the conviction of "the navy for peace" to live as a soldier. During this period, Hori was a lieutenant colonel to a major general, and he was not in a position responsible for making policy decisions himself, but that certainly did not detract from Hori's reputation.

Teikichi Hori was born on August 16, 1883 (Meiji 16) as the second son of Yasaburo Yano in Yasaka Village, Hayami County, Oita Prefecture (now Kitsuki City, Oita Prefecture). His mother was Tama (the daughter of a samurai family from Hiji-machi, Hayami-gun, Oita

[1] **堀　悌吉**（ほり　ていきち、1883〈明治 17 年〉-1959〈昭和 34 年〉)日本の海軍軍人、政治家。海軍軍人としての最終階級は海軍中将。実業家としては、日本飛行機社長、浦賀船渠（現：住友重機械工業）社長を歴任した。海兵隊 32 期首席。大分県杵築市出身。

令和 5 年 3 月 23 日受理

Prefecture (now)), and his father, Yasaburo Yano, was engaged in businesses such as soy sauce brewing in addition to agriculture. He was known as a talented and versatile person, as well as a man of character, as he taught academics to his children and had a hobby of writing Chinese poems, and his family budget was well-off.

At the age of 10, Teikichi was adopted by Shoji Hori and became the head of the Hori family. However, his father-in-law, Masatsugu Hori, died before he was adopted by Teikichi, and the Hori family had no family, so he was adopted only in name in order to keep the Hori family alive, and he continued to be "Yano Yasaburo's son." Also, reading Defoe's "Robinson Crusoe" and the outbreak of the Sino-Japanese War (Meiji 27) inspired him to become a naval officer. After graduating from Kitsuki Junior High School (currently Oita Prefectural Kitsuki High School), he entered the Naval Academy (32nd class). The principal of Kitsuki Junior High School and his father Yasaburo Yano opposed Hori's admission to the military academy. Also, Hori's father is said to have told Hori, "You don't need to worry about school fees, so go to another school and become a doctor."

Isoroku Yamamoto[2], Koichi Shiozawa[3], and Shigetaro Shimada[4] are among the classmates of the 32nd class of soldiers. In particular, Isoroku Yamamoto was a sworn friend. When he entered the military academy in 1901, he was number 3 with 190 students. He always competed for the top position with Koichi Shiozawa (the 32nd soldier's junior), and gave up the top position to Shiozawa when he entered the school and in the first year, but after that he passed the top (class head).

He participated in the Battle of Tsushima on May 27, 1905 (Meiji 38) as a naval ensign cadet on the battleship"Mikasa[5]". Witnessing the devastation of the sinking Russian naval

---

[2] **山本 五十六**（やまもと いそろく、1884 年〈明治 17 年〉- 1943 年〈昭和 18 年〉）は、日本の海軍軍人。最終階級は元帥海軍大将。旧姓は高野。海軍兵学校 32 期生。第 26、27 代連合艦隊司令長官。前線視察の際、ブーゲンビル島の上空で戦死。皇族・華族ではない平民が国葬にされた日本初の人物でもある。新潟県長岡市出身。

[3] **塩沢 幸一**（しおざわ こういち、1883 年〈明治 16 年〉- 1943 年〈昭和 18 年〉）は、日本の海軍軍人。海兵 32 期次席・海大 13 期。最終階級は海軍大将。長野県上伊那郡中川村出身。実家は「養命酒」で有名な養命酒製造で塩沢はその四男である。

[4] **嶋田 繁太郎**（しまだ しげたろう、1883 年〈明治 16 年〉- 1976 年〈昭和 51 年〉）は、日本の海軍軍人、政治家。最終階級は海軍大将。海兵 32 期・海大 13 期。海軍大臣（第 22 代）。軍令部総長（第 17 代）。A 級戦犯として終身刑。東京都出身。

[5] **軍艦三笠（みかさ）**は、大日本帝国海軍の戦艦。日露戦争の日本海海戦で連合艦隊旗艦を務めた。神奈川県横須賀市に現存し、公開されており、日本では世界の三大記念艦の一つとされている。イギリスのヴィッカース社で建造され、1902 年（明治 35 年）3 月に竣工。奈良県にある三笠山（春日山）にちなんで命名された。 1904 年（明治 37 年）からの日露戦争では連合艦隊旗艦を務め、連合艦隊司令長官の東郷平八郎大将らが座乗した。

vessels one after another from the ship of Mikasa had a great influence on Hori, and became the basis of Hori's view of the war.

## 2. Washington Conference

Hori Teikichi was involved in most of the disarmament conferences from the Taisho era to the Showa era.

The Washington Conference was held in the midst of post-World War I changes. World War I ended in victory for the Allies, and in 1919 (Taisho 8), the Paris Peace Conference was held and the Treaty of Versailles was signed. Prior to this, a revolution had broken out in Russia and the world's first socialist state, the Soviet Union, was born[6]. On the other hand, the United States seized the initiative in international affairs, and the League of Nations was established the following year at the initiative of President Wilson[7] of the United States, and Japan became a permanent member of the council. However, there was a problem that the League of Nations did not include countries that would have a great influence on the international community, such as the United States, the advocating country, and the post-revolutionary Soviet Union.

By the way, the Washington Conference was convened by US President Harding[8] in 1921 to discuss naval disarmament and issues between nations in the Pacific and Far East. At the same time, the Navy was conducting research on the League of Nations and the issue of arms limitation. Hori Teikichi had already been promoted to lieutenant colonel in 1919.

Each country participating in the Washington Conference sent top political, diplomatic, and military personnel of the time as full powers. In Japan, Tomosaburo Kato[9], the incumbent Minister of the Navy at the time, was appointed chief plenipotentiary, and in addition to

---

[6] **ロシア革命**（Russian Revolution）とは、1917 年にロシア帝国で起きた 2 度の革命のことを指す名称である。特に史上初の社会主義国家(ソビエト社会主義共和国連邦)樹立につながったことに重点を置く場合には、十月革命のことを意味している。一方、広義には 1905 年のロシア第一革命も含めた長期の諸革命運動を意味する。

[7] **トーマス・ウッドロウ・ウィルソン**〈(Thomas Woodrow Wilson)、1856 年 - 1924 年〉は、アメリカ合衆国の政治家、政治学者。第 28 代アメリカ合衆国大統領を務めた。アンドリュー・ジャクソンの次にホワイトハウスで連続 2 期を務めた 2 人目の民主党の大統領である。「行政学の父」とも呼ばれる。

[8] **ウォレン・ガメイリアル・ハーディング**〈(Warren Gamaliel Harding）, 1865 年 - 1923 年〉は、アメリカ合衆国の政治家。第 29 代大統領。大統領に選ばれた最初の現職連邦上院議員であり、在職中に死去した 6 人目の大統領である。

[9] **加藤 友三郎**（かとう ともさぶろう、1861 年〈文久元年〉- 1923 年〈大正 12 年〉）は、日本の海軍軍人、政治家。階級は海軍大将、没後元帥海軍大将。日露戦争で連合艦隊参謀長（日本海海戦時、第一艦隊参謀長兼任)、ワシントン会議で日本首席全権委員を務める。海軍大臣（第 8 代)、内閣総理大臣（第 21 代）を歴任し、山梨軍縮やシベリア出兵撤兵を成し遂げた。広島県広島市出身。

Kijuro Shidehara[10], the ambassador to the United States, Lieutenant Colonel Teikichi Hori was appointed as chief plenipotentiary of Kato. The party left Yokohama on October 10, 1921, and arrived in Washington on October 23. For Teikichi Hori, this was his second visit to Washington since he visited on the warship Tsukuba[11] when he was a second lieutenant.

After the First World War, a race to expand armaments broke out between countries, and the fierce competition to build ships between Japan and the United States in particular was a huge financial burden. Following the Russo-Japanese War in 1907 (Meiji 40), the Imperial Japanese Navy set the goal of constructing the 88 Fleet in accordance with the Imperial Defense Policy. (The 88 fleet is to build eight 20,000-ton class battleships and eight 18,000-ton class battlecruisers.) However, it costs about 1.1 billion yen, and the navy budget in 1920 is 26.5% of the total national budget (1.54 billion yen), and when combined with the army budget, the ratio of the military budget exceeds 40%, putting pressure on the national finances.

In February 1946 (Showa 21), after the end of the Pacific War, Teikichi compiled the "Kafu Conference Centered on Restrictions on Naval Armament." In this record, Teikichi observes that at the time of World War I, even though Japan entered the war on the side of the Allied Powers, there were comments that sided with Germany, which was supposed to be an enemy country, and the national interest was greatly damaged.

The Washington Conference began on October 12, 1921 (Taisho 10). At the beginning of the meeting, US Secretary of State Hughes[12], who served as the chairman, made a bold proposal regarding naval armament restrictions for Japan, the United Kingdom, and the United States. Considering the suspension of ship construction for the next 10 years, the closure of all capital ships under construction and some outdated ships, and the current forces, capital ships of Japan, the United States and the United Kingdom (standard displacement of

---

[10] **幣原 喜重郎**（しではら きじゅうろう、1872 年〈明治 5 年〉- 1951 年〈昭和 26 年〉）は、日本の政治家・外交官。外務大臣（第 40・41・43・44 代）、貴族院議員、内閣総理大臣臨時代理、内閣総理大臣（第 44 代）、第一復員大臣（初代）、第二復員大臣（初代）、復員庁総裁（初代）、副総理、衆議院議員、衆議院議長（第 40 代）などを歴任。大阪府門真市出身。

[11] **軍艦「筑波（つくば）」**: 1871 年（明治 4 年）に日本海軍がイギリス人から購入し、「筑波」と改名された。 1887 年（明治 20 年）までの正式名は「筑波艦」である。海軍兵学寮（のち海軍兵学校）の練習艦となり、1875 年（明治 8 年）11 月にはサンフランシスコまで航海するなど、遠洋練習航海のさきがけとなった。他に測量任務にも従事した。

[12] **チャールズ・エヴァンズ・ヒューズ**（**Charles Evans Hughes Sr.** 1862 年- 1948 年）は、アメリカ合衆国の政治家、法律家。ニューヨーク州知事（1907 年 - 1910 年）、ハーディング、クーリッジ政権の国務長官（1921 年 - 1925 年）、連邦最高裁判所長官（1930 年 - 1941 年）。1916 年の共和党大統領候補。1881 年ブラウン大学を同期最年少（19 歳）かつ 2 番で卒業、1884 年コロンビア大学法科大学院をトップクラスの成績で修了。コーネル大学ロースクール教授を務めた（1891 年 - 1893 年）

35,000 tons or less, gun caliber 16 inches) <approximately 40 centimeters> or less) proposed a gross tonnage ratio of 5:5:3.

In response, Tomosaburo Kato, plenipotentiary of Japan, gave an opening speech stating that he approved Hughes' draft in principle and agreed to complete naval disarmament. This remark by Japan, which was seen as the most vehemently opposed to disarmament among the participating countries, had an almost moving impact on the representatives of each country, and the fact that the Conference on Disarmament subsequently reached agreement among the countries in a relatively short time. It was an opportunity to create.

However, in response to the American proposal, Kanji Kato[13], chief of staff, opposed Tomosaburo Kato's plenipotentiary, saying that from a strategic point of view he could not compromise on securing 70% of the U.S. forces. "70% against the United States" is a figure derived from research on how much armaments would be required to repel an attack by the US fleet against Japan.

This is based on the military strategy assertion of the Imperial Japanese Navy from around the end of the Meiji period. In order for the enemy fleet to advance, more than 50% of the intercepting fleet is required. It requires 70% of the military strength. This figure of "70%" will bind the Imperial Japanese Navy in the future.

On the other hand, Hori's argument is that it should be practically considered not only by the ratio, but also by taking into consideration the performance of the ship and the old and new. In the "Kafu Conference Concerning Restrictions on Naval Armaments: Deliberations," Teikichi said, "Negotiations turned into ratio disputes. It was one of the causes that led the nation to a crisis by falling into the mistake of emphasizing strength"

The Washington Conference was adjourned at the end of the year, and Teikichi Hori had to return to Japan in haste to give an interim report. On December 27, Kato Tomosaburo Plenipotentiary ordered Teikichi to write. This is the "Kato Plenipotentiary Message". Tomosaburo Kato expressed the following view of national defense.

「先般ノ欧州大戦後主トシテ政治家方面ノ国防論ハ世界ヲ通シテ同様ナルガ如シ、即チ国防ハ軍人ノ専有物ニアラズ、戦争モ亦軍人ノミニテ為シ得ベキモノニ非ズ、国家総動員シテ之ニ当ルニ非ザレバ目的ヲ達シ、（中略）斯ク考フレバ国防ハ国力ニ相応スル武力ヲ整フルト同時ニ国力ヲ滋養シ一方外交手段ニ依リ戦ヲ避クルコトガ目下ノ時勢ニ於テ国防ノ本義ナリト信ズ」

---

[13] **加藤 寛治**（かとう ひろはる/かんじ、1870 年〈明治 3 年〉 - 1939 年〈昭和 14 年〉）は、明治、大正、昭和期の日本の海軍軍人、海軍大将。福井県福井市出身。元福井藩士、海軍大尉・加藤直方の長男。息子・孝治は陸軍大将・武藤信義の養子。艦隊派の中心人物のひとり。

The fact that Teikichi had him write down his important message and had him carry it to Japan to make sure everything was complete shows that Teikichi had a deep understanding of his thoughts and that Tomosaburo Kato highly regarded him as a person who could fulfill that role. This message reflects the thoughts of Teikichi himself, who compiled the oral statements, and it can be said that Teikichi is a beloved disciple of Tomosaburo.

On his way back to Japan, Teikichi met his younger brother Shizuo Hori, who had successfully emigrated to Canada, for the first time in a while. In the following year, 1922, he returned to Yokohama, and on February 6, he was assigned to the Minister's Secretariat, where he engaged in clerical work concerning the ratification of the Washington Convention.

Tomosaburo Kato made a wise decision based on the big picture that it was important to maintain a relationship that would not go to war with the United States and accepted the American proposal ratio. As a result of the Washington Conference, the capital ship/aircraft carrier ownership ratio was 5 for the United Kingdom and the United States, 3 for Japan, and 1.75 for Italy and France. Kato was internationally acclaimed as a great "Admiral Statesman".

Tomosaburo Kato will become the 21st Prime Minister after the Washington Conference. Although he died in 1923 (Taisho 12), his influence on the navy was great, and Katsunoshin Yamanashi[14] and Teikichi Hori, who inherited Kato's view of national defense and promoted disarmament, are said to be "the treaty faction". On the other hand, many people, including Kanji Kato, the chief of staff, and Nobumasa Suetsugu[15], the deputy of the chief of staff, regarded Japan's diplomacy as a humiliation because the treaty was a unilateral concession on the part of Japan. They are people of the military order system and are called "fleet faction".

At the Washington Conference, Tomosaburo Kato decided that Japan accepted the "60%" ratio. However, if the conference breaks down, it will become a free shipbuilding competition, and rather than a calm analysis that Japan, which is inferior in national power, will lower its ratio to the United States, the idea of sticking to tactics against the United States and "face-to-face confrontation with the United States" is grounded in the Navy. It flowed like a pulse, and at some point, the emotional theory erupted. At the Washington Conference,

---

[14] **山梨 勝之進**（やまなし かつのしん、1877 年〈明治 10 年〉 - 1967 年〈昭和 42 年〉）は、日本の海軍軍人。海兵 25 期次席・海大 5 期。最終階級は海軍大将。主だった軍歴を軍政部門に歩み、山本権兵衛・加藤友三郎の系譜を継ぐ人物と目されていた、いわゆる条約派の 1 人。また帝国海軍の 77 名の大将のうち、艦隊司令長官職を経験していない 1 人である。宮城県仙台市出身。

[15] **末次 信正**（すえつぐ のぶまさ、1880 年〈明治 13 年〉- 1944 年〈昭和 19 年〉）は、日本の海軍軍人、政治家。最終階級は海軍大将。第 1 次近衛内閣の内務大臣。山口県出身。艦隊派の中心人物のひとり。

apart from naval disarmament, a four-way treaty (Britain, the United States, Japan, and France) was concluded, and the Anglo-Japanese alliance was annulled. In addition to these four countries, China, Italy, and other countries were also included in a nine-nation treaty, stipulating respect for China's sovereignty and opening the doors of each country in China. With this new international order, international cooperative diplomacy called the Washington system was promoted, and in Japan it was called Shidehara Diplomacy under Foreign Minister Kijuro Shidehara.

On the other hand, on September 1, 1923, the Great Kanto Earthquake occurred, causing enormous damage to the capital city of Tokyo. At this time, Hori's family was living in Kamakura, and his house collapsed. Her wife Chiyoko, who had been watching over her, desperately lifted the ceiling with her helper and managed to crawl out with her two daughters from her collapsed house with a little light. She borrowed a bed from a nearby hotel and lay down on the road to wait for Teikichi's return. She managed to spend nearly two weeks in Kamakura, and together with Hori, who had returned from the fleet, took refuge at her acquaintance's house. After a while she moved out in an Admiralty truck and was able to settle down anyway.

Not long after that, on November 20th, Teikichi became the captain of the light cruiser Isuzu[16], which had just been completed in August, took office.

## 3. League of Nations and Geneva Conference

In December 1925, Teikichi Hori became a staff officer of the military general staff and a part-time staff member of the Ministry of Foreign Affairs, and went to France again. This is probably because he was stationed in France during World War I and was evaluated for his knowledge of European affairs.

While Teikichi went to France, his family stayed with an acquaintance in Beppu city in Oita prefecture. He must have worried about his wife, Chiyoko, who has a newborn son, Tadashi, and two young daughters, Kazuko and Sumiko. Teikichi was a person who was very considerate of his family.

From the first year of the Taisho era to the beginning of the Showa era, when Teikichi was in charge of disarmament-related missions in France, the movements surrounding disarmament were complicated. In order to achieve its ultimate goal of establishing peace, the

---

[16] **五十鈴**（いすず）は、大日本帝国海軍の軽巡洋艦。長良型の 2 番艦である。その艦名は、三重県伊勢市（伊勢神宮内宮）を流れる五十鈴川より名づけられた。完成時は高速軽巡洋艦として水雷戦隊の旗艦に適した優秀な艦船であり、歴代艦長からは堀悌吉、山本五十六など後に著名になった指揮官も輩出した。1944 年 9 月 14 日には防空巡洋艦として改装された。

League of Nations established the Advisory Committee on Army, Navy, and Air Force Issues at the time of its founding to study the current state of the armaments of each country and comprehensively deliberated on the reduction of armaments of the Army, Navy, and Air Force. However, the disarmament issue did not make much progress, and in 1926 (Taisho 15), the Disarmament Preparatory Commission was established, with 10 member nations, including Japan, and six nations, including the United States and the Soviet Union, which were not members. Teikichi served as an attendant to the Imperial Representative Committee until July 1927. Even in this preparatory committee, the interests of each country conflicted, and the disarmament plenary session was held in February 1932 (Showa 7). But, without seeing the results, it was a natural flow due to Germany's withdrawal from the federation.

During this period, the navies were competing to build auxiliary ships, a blind spot in Washington's treaty. This is because the Washington Conference limited the number of capital ships, leaving auxiliary ships at a later date. The Japanese Navy, which was short of 60% of its capital ships, was also focusing on plans to replenish large cruisers and submarines. U.S. President Coolidge[17], who concerned that the significance of the Washington Naval Treaty would be lost due to the intensification of the competition for auxiliary ships, called for a conference on the limitation of auxiliary ships among the five countries participating in the Washington Conference, but France and Italy refused. The Geneva Conference on Disarmament was to be held among the three countries.

Japan sent Admiral Makoto Saito[18] as chief plenipotentiary, and Teikichi, who had already been involved in disarmament issues in the League of Nations, was appointed chief plenipotentiary. The Geneva Conference on Disarmament started in June 1927, and Japan aimed to secure a large cruiser "70%" ratio, but Saito Plenipotentiary, who has strong leadership, suppressed some hardliners and aimed for establishment. However, due to the

---

[17] **ジョン・カルビン・クーリッジ・ジュニア**（John Calvin Coolidge Jr.　1872 年 - 1933 年）は、アメリカ合衆国の政治家。第 46 代マサチューセッツ州副知事、第 48 代マサチューセッツ州知事、ウォレン・ハーディング政権にて第 29 代アメリカ合衆国副大統領、第 30 代アメリカ合衆国大統領を歴任した。大統領は 1923 年 8 月 2 日から 1929 年 3 月 4 日まで在任した。

[18] **斎藤 実**（さいとう まこと、1858 年〈安政 5 年〉- 1936 年〈昭和 11 年〉）は、日本の海軍軍人、政治家。岩手県奥州市出身。階級は海軍大将。第一次西園寺・第二次桂・第二次西園寺・第三次桂・第一次山本の 5 内閣で海軍大臣を務めた。シーメンス汚職事件により大臣を引責辞任し、その後、ジュネーブ海軍軍縮会議の主席全権を務めた。また、総理大臣であった犬養毅が海軍将校らによって殺害された五・一五事件のあとの第 30 代内閣総理大臣として、2 年 1 か月という当時としては長い政権を保ったが、政府批判の高まりにより内閣総辞職した。その後二・二六事件で暗殺された。

hard-line stance of the central navy, which was caught up in the "70%," conflict between Japan and the United States was unavoidable. The meeting ended in failure when it was adjourned in August without producing any results due to the fierce confrontation between the United States and the United Kingdom. Since these meetings were held in Geneva and the naval office was in Paris, Hori went to Geneva for each meeting and spent more days there than he did in Paris. Paris is also a place that can be called a second home for Teikichi.

Teikichi, who was relieved of his duties at the conclusion of the Geneva Conference, returned to Kobe on October 10, 1927 (Showa 2) and was welcomed by his family in Beppu. On December 1, he was given the command of the battleship Mutsu (32,720 tons). This is his first sea service in about two years. He became a battleship captain in his fourth year as a colonel, and received a special salary given to those who commanded a battleship or aircraft carrier of 25,000 tons or more in less than five years as a colonel. When the battleship Mutsu and the fleet on which Hori was on board entered Beppu, people from Teikichi's hometown of Kitsuki and Beppu often came to see the ships. Some people remembered how Teikichi treated such people with courtesy and without being arrogant.

In December 1928, Teikichi was promoted to Rear Admiral and became Chief of Staff of the 2nd Fleet. The commander-in-chief at that time was Lieutenant General Mineo Osumi[19], and later, when he was Minister of the Navy, he was the person who forced Teikichi into a reserve role in "Osumi Personnel". At that time, training for night battles was continued with the idea of supplementing the restrictions imposed by the Washington Conference with the improvement of skills through training. Prior to the decisive battle of the main force of the fleet, he aimed to reduce the enemy's main force in the night battle and gain a chance of victory in the decisive battle the next morning. Torpedo boats are the main force in night battles, but Hori is an officer in the gunnery department and seems to have had a hard time due to his lack of experience with torpedo units.

## 4. London Naval Treaty

Teikichi Hori was a unique naval officer who created records to convey the truth and valued preserving them. Concerning the London Naval Treaty, in which he himself was deeply involved, he created a record entitled "The History of the Conclusion of the Naval Treaty with Atsushi Rinkobo" (Reference 1). After his death, it was donated by Katsunoshin Yamanashi

---

[19] **大角 岑生**（おおすみ みねお、1876 年〈明治 9 年〉- 1941 年〈昭和 16 年〉）は、大正から昭和にかけての日本の海軍軍人、政治家、華族。海軍大将。愛知県稲沢市出身で本籍は高知県。軍令部からは将来の軍拡路線を妨害する恐れのある将官の追放を要求された。谷口尚真のほか、山梨勝之進、左近司政三、寺島健、堀悌吉ら次官、軍務局長経験者、軍事普及部委員長・坂野常善らを、大角は自らの署名つき辞令で追放した。これが「大角人事」と呼ばれる恣意的な条約派追放人事である。

to the Japan Maritime Self-Defense Force Officer Academy along with related materials. These historical materials left by Hori are indispensable historical materials for research on the Treaty of London.

In 1952 (Showa 27), after the war, Hori left a memo about the creation and preservation of the "Conclusion Process"("Documents" 1). Originally, "The Background of the Conclusion of the Naval Treaty" was written by Teikichi in the summer of 1930 (Showa 5), picking up the gist of events related to the London Conference, and writing it down in pencil, but it was preferable for the control within the Navy Department. It was scheduled to be incinerated because it was not there. However, with the help of Mineichi Koga[20], he escaped being incinerated and returned to Teikichi. It still exists today, and many valuable historical materials related to Hori himself and the prewar navy were discovered here.

Teikichi Hori not only created records, but also left information about records, so-called metadata. In other words, there is no doubt that it was because he believed that the "truth" would someday emerge from the records he left behind.

The 1930 London Naval Treaty and its affiliation with the "Supreme Commander-in-chief" issue[21] has been the subject of much research as a watershed for the subsequent catastrophe.

The London Naval Conference was held on the topic of the ratio of auxiliary ships (cruisers and submarines) between countries, which had been a pending issue since the Washington Treaty.

The Imperial Japanese Navy has set three major principles: (1) the overall ratio of auxiliary ships to the United States should be 70%; (2) Above all, large cruisers (less than 10,000 tons, equipped with 8-inch guns) and (3) submarines to maintain the current force. Chief plenipotentiary Reijiro Wakatsuki[22], Minister of the Navy Takeshi Takarabe[23],

---

[20] **古賀 峯一**（こが みねいち、1885 年〈明治 18 年〉 - 1944 年〈昭和 19 年〉）は、日本の海軍軍人。最終階級は元帥海軍大将。 海兵 34 期・海大 15 期。連合艦隊司令長官在職中に海軍乙事件にて殉職。彼は 1930 年（昭和 5 年）当時海軍省副官として堀悌吉らと条約締結に動いた人物であり、堀悌吉とのあうんの呼吸が歴史的に貴重な史料を焼却から救った。佐賀県有田町出身。

[21] **統帥権干犯問題（とうすいけんかんぱんもんだい）**：昭和 5 年（1930）浜口雄幸内閣のロンドン海軍軍縮条約調印をめぐる政治問題。海軍軍令部の承認なしに兵力量を決定することは天皇の統帥権を犯すものだとして、右翼や政友会は同内閣を攻撃した。

[22] **若槻 禮次郎**（わかつき れいじろう、1866 年〈慶応 2 年〉- 1949 年〈昭和 24 年〉）は、日本の大蔵官僚、政治家。貴族院議員、大蔵大臣（第 18・20 代）、内務大臣（第 41・42 代）、内閣総理大臣（第 25・28 代）、拓務大臣（第 4 代）を歴任した。島根県松江市出身。

[23] **財部 彪**（たからべ たけし、1867 年〈慶応 3 年〉 - 1949 年〈昭和 24 年〉）は、日本の軍人、政治家。海兵 15 期首席 最終階級は海軍大将。宮崎県都城市出身。妻の「いね」は、山本権兵衛（海軍大将）の娘。明治 26 年（1893 年）、日清戦争で出征。日露戦争では、大本営作戦参謀を務める。以後、海軍次官を務め、1919 年（大正 8 年）、海

Ambassador to the UK Tsuneo Matsudaira[24], Chief aide Seizou Sakonji [25]and Junior aide Isoroku Yamamoto were also present at this meeting.

The conference opened on January 21, 1930, and although each country negotiated repeatedly, there was little prospect that Japan's demands would be accepted. Domestically, there were differences of opinion between the Admiralty and the General Staff, as well as disagreements at the Plenipotentiary in London. Osachi Hamaguchi[26] Prime Minister advocates international cooperation and fiscal austerity, and if the conference breaks down, Japan, which has been in a serious recession since the financial crisis of 1927, will not be able to withstand the shipbuilding race. he was determined that he had to make a treaty.

A compromise between Japan and the United States was drawn up in this time, but in terms of the total tonnage of auxiliary ships, it was about 70% for the United States, and the breakdown was 70% for light cruisers and destroyers, but about 60% for large cruisers, the number of submarines was the same as that of Japan and the United States. Vice Minister Yamanashi and Director General Hori of the Ministry of Navy (Treaty faction) were dissatisfied, but they thought that acceptance was unavoidable from a national perspective. However, the Navy General Staff (fleet faction), including Chief of the General Staff Kato and Deputy Chief Suetsugu, advocated a hard-line argument that they should give priority to tactics and not give up even one step, and they were planning various schemes. Vice-Minister Yamanashi asked General Keisuke Okada[27], a senior military councilor from the same town as

---

軍大将。加藤友三郎内閣で海軍大臣となり、その後、第 2 次山本内閣、加藤高明内閣、第 1 次若槻内閣、濱口内閣の 4 内閣において海相を務める。

[24] **松平 恆雄**（まつだいら つねお、1877 年〈明治 10 年〉 - 1949 年〈昭和 24 年〉）は、日本の外交官、政治家。外務次官、駐英大使、駐米大使、宮内大臣、初代参議院議長を歴任した。福島県会津若松市出身。

[25] **左近司 政三**（さこんじ せいぞう、1879 年〈明治 12 年〉 - 1969 年〈昭和 44 年〉）は、日本の海軍軍人。政治家。最終階級は海軍中将。第 3 次近衛文麿内閣の商工大臣。鈴木貫太郎内閣の国務大臣。山形県米沢市出身。

[26] **濱口 雄幸**（はまぐち おさち、1870 年〈明治 3 年〉- 1931 年〈昭和 6 年〉）は、日本の大蔵官僚、政治家。大蔵大臣（第 25 代）、内務大臣（第 43 代）、内閣総理大臣（第 27 代）、立憲民政党総裁などを歴任した。その風貌から「ライオン宰相」と呼ばれた。高知県高知市出身。

[27] **岡田 啓介**（おかだ けいすけ、1868 年〈慶応 4 年〉- 1952 年〈昭和 27 年〉）は、日本の軍人、政治家。最終階級は海軍大将。田中義一内閣で海軍大臣を務めたのち、斎藤内閣でも海軍長老として海軍大臣を再び拝命して五・一五事件後の騒然とした海軍省部内を収めた。その斎藤内閣が瓦解したあと大命降下を受けて内閣総理大臣に就任、岡田内閣では一時拓務大臣と逓信大臣を兼任している。二・二六事件で反乱軍に襲撃されたが、義弟で秘書官を務めていた松尾伝蔵が身代わりとなり、奇跡的に難を逃れた。第二次世界大戦中は東条内閣打倒を自らの責務ととらえ倒閣運動を主導した。福井県出身。

Kato (Fukui Prefecture), to help persuade Kato.

At the end of March, the "Future Policy" was drafted by Director of the Military Affairs Bureau Hori. It said that no compromises were acceptable, but that naval policy would be best served within government policy even if it was not accepted by the government. Both Director Kato and Deputy Director Suetsugu raised no objection to this. On April 1, Prime Minister Osachi Hamaguchi explained the revised government draft to General Okada, Chief of the General Staff Kato, and Vice Minister Yamanashi, saying that there was no choice but to compromise. Director Kato said that it would be a problem in terms of tactics, but there was no significance to the reunion draft. The Circular Draft was approved by Cabinet and submitted to the Plenipotentiary in London.

The Treaty of London was signed on April 22, and a disarmament treaty between Japan, Great Britain and the United States was concluded based on the compromise proposal. However, the London Treaty involved not only the Cabinet, the Navy, and the Ministry of Foreign Affairs, but also political parties, parliament, the Privy Council, the Army, and the private right wing, and it developed into a fierce political conflict. Seeing the actions of the Ministry of the Navy and the General Staff, the opposition party "Seiyukai" (President Tsuyoshi Inukai[28]) began to make a fuss at the 58th meeting of the Imperial Diet, claiming that the government, rather than the General Staff, had decided on the number of troops. In the case of the navy, it was the chief of the navy who supported the emperor's supreme command (the right to command the army and navy), but the logic was that the government's signing of a treaty against the chief of the navy violated the supreme command. The word "conflict of supreme command" appeared, and the dissenting opinion within the navy, which had calmed down once, was ignited, and Kato, Suetsugu and other leaders of the naval general headquarters began to scheme again, such as taking out Admiral Heihachiro Togo[29]. Prime

---

[28] **犬養 毅**（いぬかい つよし、1855 年〈安政 2 年〉- 1932 年〈昭和 7 年〉）は、日本の政治家。中国進歩党代表者、立憲国民党総理、革新倶楽部代表者、立憲政友会総裁（第 6 代）、文部大臣（第 13・31 代）、逓信大臣（第 27・29 代）、内閣総理大臣（第 29 代）、外務大臣（第 45 代）、内務大臣（第 50 代）などを歴任した。五・一五事件で暗殺される。岡山県岡山市出身。

[29] **東郷 平八郎**（とうごう へいはちろう、1848 年〈弘化 4 年〉 - 1934 年〈昭和 9 年〉）は、日本の海軍軍人。最終階級は元帥海軍大将。日露戦争では連合艦隊司令長官として指揮を執り日本海海戦での完勝により国内外で英雄視された。明治時代の日本海軍の指揮官として日清及び日露戦争の勝利に大きく貢献し、日本の国際的地位を「五大国」の一員とするまでに引き上げた一人である。特に、日露戦争(1904 年 2 月-1905 年 9 月)においては、連合艦隊を率いて日本海海戦で当時世界屈指の戦力を誇ったロシア帝国海軍バルチック艦隊を一方的に破って世界の注目を集め、その名を広く知られることとなった。鹿児島県鹿児島市出身。

Minister Osachi Hamaguchi overcame the Diet with the support of senior vassals and public opinion, and succeeded in working with the Privy Council. On October 2nd, the treaty was ratified, and the problem of tampering with the Japanese government came to an end.

This issue of supreme supremacy was a movement to overthrow the cabinet without resorting to any means by the "Seiyukai", but within the navy, the Chief of the Naval General Staff, the Deputy Chief of the Navy, the Minister of the Navy, and the Vice-Minister were replaced in the form of a quarrel and defeat, but it created a confrontation between the treaty faction and the fleet faction, leaving a big lump inside. On November 14, Prime Minister Osachi Hamaguchi was shot assassinated. This act invigorated the movement to deny party politics by the military and the right wing. It is an irony of history that Inukai himself, who had attacked the government with the theory that he had committed a crime, was assassinated in a coup d'état (May 15 Incident)[30] by naval officers.

Looking back, the four men who dealt with the London Treaty at the Admiralty and the General Staff participated in the Washington Conference as entourages. Yamanashi and Hori, who accepted Tomozaburo Kato's 60% plenipotentiary power over the United States, were in the Ministry of Navy, while Kato and Suetsugu, who strongly opposed it, were in the Naval General Staff. Naturally, it is clear that coordination between the Ministry of the Navy and the Naval General Staff will be difficult, but even with this appointment, the composition of the treaty faction and the fleet faction can be seen and hidden. Kato and Suetsugu may have been placed in positions of responsibility as the Chief of the General Staff and Deputy Chief of the General Staff, and they may have tried to suppress their arbitrary words and deeds, but in fact they were unable to suppress their schemes.

Kanji Kato was seen as the leader of "Kantaiha", but Hori believes that Suetsugu was actually behind the scenes and that Kato was just being made to dance. Even when Kato was convinced and the situation was about to settle down, Suetsugu told him to change his attitude many times, and each time he was swayed.

In addition, I would like to mention a few about Isoroku Yamamoto, who was a junior attendant. In the file related to disarmament left by Teikichi Hori, Yamamoto entrusted materials related to the London Conference, such as top-secret telegrams sent by Yamamoto to Hori, in September 1934 (Showa 9). It was during this period that Yamamoto became the naval representative for the preliminary negotiations of the Second London Disarmament Conference.

Yamamoto is often seen as a "conventionist," but Yamamoto in London is a little

---

[30] **五・一五事件**（ごいちごじけん）は、1932 年（昭和 7 年）5 月 15 日に日本で起きた反乱事件。武装した海軍の青年将校たちが内閣総理大臣官邸に乱入し、内閣総理大臣犬養毅を殺害した。

different. When Okinori Kaya[31], Vice-Minister of Finance, gave his financial opinion, Yamamoto yelled at Kaya and lashed out at the plenipotentiary group, which was moving to accept the compromise. Then, he sent a secret telegram addressed to Teikichi Hori about the state of the "School Committee". Yamamoto had already been stationed in the United States twice, and must have been well acquainted with the power of the United States. He must have been well acquainted with the ideas of Hori, Yamanashi and Koga. Yamamoto could have predicted that the meeting would break down and Japan would be at an overwhelming disadvantage as the shipbuilding race continued, but it is a little hard to understand why he is making hard-line arguments. Whether he dared to suppress the more hard-line attendants by advocating a hard-line argument, or whether Yamamoto himself was also constrained by the ratio will need to be examined. Minoru Nomura[32] thought that if he pushed Yamamoto's hard-line argument one more time, the United States and Britain would make concessions. It is believed that Yamamoto changed to the "Treaty faction" on June 11, when he returned to Japan from London and learned of the predicament of Yamanashi and Hori.

## 5. Shanghai incident

In November 1931 (Showa 6), Rear Admiral Hori became a military officer, and on December 1, he was appointed commander of the 3rd Squadron, boarded the light cruiser flagship "Naka", and the first Shanghai Incident[33] that broke out in January of the following year was one of the factors that determined Hori's fate.

Due to the Manchurian Incident triggered by the Ryujouko Incident[34] on September 18th of this year, the Japanese army occupied three provinces in the northeastern part of

---

[31] **賀屋 興宣**（かや おきのり、1889 年〈明治 22 年〉 - 1977 年〈昭和 52 年〉）は、日本の政治家、大蔵官僚。大蔵省主計局長、大蔵次官などを歴任した。大蔵省退官後、東條内閣などで大蔵大臣を務め、戦時財政における中心的な役割を担った。広島県広島市出身。

[32] **野村 実**（のむら みのる、1922 年〈大正 11 年〉- 2001 年〈平成 13 年〉）は、日本の海軍軍人、軍事史研究者。専門は日本海軍史。滋賀県彦根市出身。

[33] **第一次上海事変**（だいいちじシャンハイじへん）は、1932 年（昭和 7 年）1 月 28 日から 3 月 3 日にかけて戦われた中華民国の上海共同租界で起きた日中両軍の衝突である。この戦いで日本側は第一次世界大戦・青島の戦い（戦死者 273 名負傷者 972 名）を上回る戦死者約 770 名負傷者 2300 名以上という損害を出し、日露戦争以来の大激戦となった。

[34] **柳条湖事件**（りゅうじょうこじけん）は、満州事変の発端となる鉄道爆破事件である。1931 年（昭和 6 年、民国 20 年）9 月 18 日、満州（現在の中国東北部）の奉天（現在の瀋陽市）近郊の柳条湖（りゅうじょうこ）付近で、大日本帝国の関東軍が南満州鉄道（満鉄）の線路を爆破した事件である。関東軍はこれを中国軍による犯行と発表することで、満州における軍事展開およびその占領の口実として利用した。

China, but the anti-Japanese movement intensified in China, and violent movements were also developed in Shanghai. The navy was tasked with protecting Japanese residents in Shanghai. On January 18, 1932, an attack on a Japanese monk by Chinese took place, and Consul General Muramatsu issued an ultimatum to the mayor of Shanghai requesting an apology for the incident and the release of anti-Japanese groups. On January 28, the Chinese side approved Japan's request. With this, the incident seemed to come to an end, but Koichi Shiozawa, commander of the Fleet, deployed a land force and collided with the 19th Route Army on the Chinese side, turning into a street battle. In the 32nd term, Shiozawa was competing with Teikichi Hori for the chairmanship.

Commander Hori's 3rd Squadron received an order to be dispatched to Shanghai in a hurry, headed to Shanghai, and began security duties from the 30th. When the 3rd Fleet was organized on February 3, the 3rd Squadron was placed under command along with the 1st bereaved Fleet, the 1st Torpedo Squadron, and the 1st Air Squadron. Vice Admiral Kichisaburo Nomura[35] was appointed Commander-in-Chief of the Third Fleet.

Hori wrote in his memoirs that he did not anticipate a battle and his preparations for the battle were inadequate. It is said that it was aimed precisely like this.

But for those looking to down Hori, this was an opportunity. Criticism of the temporary evacuation in response to the sudden artillery fire spread. In addition, there was a person who focused on Kanji Kato about Hori.

According to Hori's memoirs, Nobumasa Suetsugu tried to bring the ships under command of the 3rd Squadron, but Hori refused, and did not allow the offer of shooting to defend the land battle on the grounds that it would harm the surrounding residents. In addition, Hori orders the land expeditionary force to provide medical aid to the residents, dispose of the unexploded ordnance, and strives to avoid future troubles.

The Shanghai Incident came to an end on March 3 when Japan, after withdrawing the Chinese army, called off the fighting. A ceasefire agreement was signed on May 5, but just before that, on April 29, at a celebration of Tencho-setsu held in Shanghai, by bombs that Koreans threw Kichisaburo Nomura, Commander of the 3rd Fleet, and Hori's Kitsuki Junior High School, Minister Aoi Shigemitsu[36], who is also an alumnus, was injured.

---

[35] **野村 吉三郎**（のむら きちさぶろう、1877 年〈明治 10 年〉- 1964 年〈昭和 39 年〉）は、昭和初期に活躍した日本の海軍軍人、外交官、政治家。海兵 26 期次席。和歌山県和歌山市出身。国際法の権威として知られ、阿部内閣で外務大臣をつとめたのち、第二次近衛内閣のとき駐米大使に任じられ、真珠湾攻撃の日まで日米交渉に奔走して戦争回避を模索した。

[36] **重光 葵**（しげみつ まもる、1887 年〈明治 20 年〉- 1957 年〈昭和 32 年〉）は、日本の外交官・政治家。大分県豊後大野市出身だった。しかし母の実家に子供がなかったため養子となり重光家 26 代目の当主となった。旧制杵築中

## 6. “Osumi Personnel”

The conflict within the Navy over the London Treaty is said to be a conflict between the treaty faction centered on the Ministry of the Navy and the fleet faction centered on the Naval General Staff. Teikichi Hori was thought to follow Gonbei Yamamoto[37], Tomozaburo Kato, and Katsunoshin Yamanasi. However, after the conclusion of the Treaty of London, the Fleet Faction aimed to make a comeback, and planned to drive out these candidates for the Minister of the Navy by demoting them or transferring them to the reserves. It was a pretty hard line.

In June 1930, Kanji Kato was replaced by Naomasa Taniguchi[38] as Chief of the Naval General Staff. At the same time Katsunoshin Yamanashi was replaced as vice-minister of the navy, and Nobumasa Suetugu was replaced as deputy chief of the military general office by Osami Nagano[39]. Furthermore, after the ratification of the treaty, Takarabe also became the new navy minister in October, but at this stage, those who were in favor of the treaty or who were close to it were in an advantageous position.

In February 1931, Fushiminomiya[40] became the Chief of the Naval General Staff. Although military personnel of the imperial family were often seen as decorations, Fushiminomiya went beyond that and had a strong influence on navy personnel affairs and policies.

In December, the situation changed completely when Osumi Mineo became Minister of the Navy. Osumi was an intermediate faction, but he quickly approached the Fleet faction

---

学、第五高等学校独法科を経て、東京帝国大学法科大学（現：東京大学法学部）卒業。

[37] **山本 権兵衛**（やまもと ごんべえ、1852 年〈嘉永 5 年〉- 1933 年〈昭和 8 年〉）は、日本の海軍軍人、政治家。階級は海軍大将。海軍大臣（第 5 代）、内閣総理大臣（第 16・22 代）、外務大臣（第 37 代）などを歴任した。鹿児島県鹿児島市出身。

[38] **谷口 尚真**（たにぐち なおみ、1870 年〈明治 3 年〉 - 1941 年〈昭和 16 年〉）は、日本の海軍軍人。18 代連合艦隊司令長官、14 代軍令部長を務めた海軍大将。海軍良識派を代表した一人と言われる提督である。広島市出身。

[39] **永野 修身**（ながの おさみ、1880 年〈明治 13 年〉 - 1947 年〈昭和 22 年〉）は、日本の海軍軍人、教育者。海軍兵学校 28 期、海軍大学校甲種 8 期。第 24 代連合艦隊司令長官。第 38 代海軍大臣。第 16 代軍令部総長。海軍の三顕職である連合艦隊司令長官、海軍大臣、軍令部総長を全て経験した唯一の軍人。千葉工業大学の創設発案者。A 級戦犯の容疑で東京裁判中に巣鴨プリズンで急性肺炎を患い、米国陸軍病院（US Army Hosp）へ搬送され治療を受けたがその後死亡する。高知県出身。

[40] **伏見宮博恭王**（ふしみのみやひろやすおう、1875 年〈明治 8 年〉- 1946 年〈昭和 21 年〉）は、日本の皇族、海軍軍人。海軍兵学校（ドイツ帝国）卒業、海軍大学校（ドイツ帝国）卒業（海軍兵学校（日本）18 期相当）。議定官、軍令部総長を務めた。日露戦争では連合艦隊旗艦「三笠」分隊長として黄海海戦に参加し戦傷を負う。艦長や艦隊司令長官を務める等、皇族出身の軍人の中では実戦経験が豊富であった。

and made personnel appointments with that intention in mind. This is the treaty faction sweeping personnel affairs, which is called "Osumi Personnel Affairs". "These Personnel Affairs" forced many general officers with excellent international sensibilities into the reserve service, resulting in a serious shortage of human resources within the navy.

The treaty faction's first target was Katsunoshin Yamanashi. He became a military councilor in December, and was relegated to the reserve in March 1933, just three months later.

Yamanashi was promoted to Admiral in April 1932 after serving as Vice Minister of the Navy, Sasebo Naval Base Chief, and Kure Naval Base Chief. 1933) was relegated to reserve duty in March. According to Hori, it is observed that Nobumasa Suetsugu was looking for a chance to expel Yamanashi as his old enemy from early on.

Six months after that, in September, Naomasa Taniguchi and others were promoted from military counselor to reserve duty, and in March 1934, Seizo Sakonji and Ken Terashima[41] left active duty. Sakonji was the chief of staff at the London Conference and was instrumental in the conclusion of the treaty. During his tenure as Director of the Military Affairs Bureau, Terashima was opposed to the revised bill to expand the authority of the Military General Staff, which was posted by the Military General Staff. He was relieved of duty only 18 days after being appointed Commander-in-Chief of the Training Squadron by the Chief of Warfare, and was placed in reserve in March 1934. This is clearly a retaliation by the General Staff.

Kanji Kato and Nobumasa Suetsugu of the Fleet faction plotted with a truly gruesome way to overthrow Teikichi Hori, the hope of the treaty faction, who was the last target. It was a conspiracy that could create groundless rumors.

Under these circumstances, Isoroku Yamamoto went to London as a preliminary negotiating representative for the second London conference. Yamamoto was worried about the situation around Hori Teikichi, thinking about Yamamoto's time in London. On September 11, 1934, just before his departure, he made a statement about Hori for Fushiminomiya who had influence within the navy.

Yamamoto appealed to Prince Fushimi, "When I checked with subordinates and staff members about the bad reputation of my old friend Hori Teikichi, there was no basis for it." And "I have never complained to my boss about 'the Personnel Affairs' of an old friend, but fairness in personnel matters is the only way to unite the navy" he said. In response, Prince Fushimi said, "I feel the same way, and I am deeply thinking about the fairness of 'Personnel

---

[41] **寺島 健**（てらしま けん、1882 年〈明治 15 年〉 - 1972 年〈昭和 47 年〉）は、日本の海軍軍人、政治家。海軍中将で予備役となったのち、東條内閣で逓信大臣、鉄道大臣を務めた。和歌山県出身。

Affairs' regarding Mr. Hori, so I would like you to rest assured."

However, the highest promotion conference was held on October 26, 1934, and finally it was decided that Teikichi Hori would be transferred to the reserve. For Kanji Kato, it was the precious day when the remaining treaty faction generals were transferred to the reserve. In the end, Teikichi Hori was transferred to the reserve on December 15th. In 1905 (Meiji 38), he put an end to his 29 years of life in the navy since he was commissioned as a second lieutenant. He was only 51 years old at the time.

## In conclusion

Teikichi Hori sees that Nobumasa Suetsugu was the one who not only forced him into the reserve, but also misled Japan and the navy. Military politicians such as Hori and Yamanashi, who were capable of calmly analyzing the situation, were driven out of the Navy not only because of their views on the nation, strategy, and the United Kingdom and the United States, but also because of their personal greed for honor.

Shigetaro Shimada, who was the naval minister at the start of the Pacific War, reminisced after the war, saying, "If Teikichi Hori and others were still there, things might have turned out differently when the war broke out." Originally, Hori had a vision that Japan's national interest was to aim for happiness for all people in the world. This is also reflected in his phrase "World Equality Civilization". It's amazing that he had such thoughts at that time. However, this idea, which is commonplace in modern times, would have been regarded as heresy by the Navy at the time. Teikichi Hori was seen as a person who succeeded the mainstream of naval military administration, and his view of national defense was exactly suitable for it, but as a naval officer, he was a "heretic" person in a sense. He asserted that "war is both evil and vicious," and believed that Japan's national interest was not to pursue the interests of a single country, but to contribute to the "equal" prosperity of the people of the world. In addition, he had a different idea from the mainstream of the navy in operations against the United States.

On the first anniversary of Teikichi Hori's death, a memorial service was held at his home in Setagaya. Yamanashi and other naval personnel who participated in the event said that one of the reasons why Hori became a reserve officer so early was that he was too forward-looking and said strange things, so his subordinates and people around him could not understand the true intentions. In addition, they said that he may have been misunderstood. Certainly, there may have been such a side, but as a military elite with a sharp mind, Hori never wavered from the conviction that "contributing to the navy and Japan that he hoped was his way of life." In the navy in the early Showa period, there was probably no room for someone like Teikichi Hori to be accepted.

【参考文献】

・宮野澄『不遇の提督　堀悌吉』、光人社、1990 年。
・大分県先哲史料館編『大分県先哲叢書　堀悌吉資料集』、全巻、
大分県教育委員会、2005, 2006, 2016 年。
・細谷千博・斎藤真編『ワシントン体制と日米関係』東京大学出版会、1978 年。
・平井義人「「生桑区百手座記録」に見る明治―堀悌吉研究資料として―」
大分県先哲史料館『史料館研究紀要』
・麻田貞雄『両大戦間の日米関係　海軍と政策決定過程』、東京大学出版会、1993 年。
・軍事史学会編『大本営陸軍部戦争指導班　機密戦争日誌』上、錦正社、1998 年。
・秦郁彦『統帥権と帝国陸海軍の時代』、平凡社、2005 年。
・秦郁彦「条約派と艦隊派―海軍の派閥系譜―」
（『昭和史の軍部と政治Ⅰ』、第一法規出版、1983 年。）
・半藤一利「山本五十六の畏友堀悌吉「派閥抗争」に倒る」
（『日本海軍の栄光と挫折』PHP 研究所　1994 年。）
・工藤美知尋『海軍良識派の研究―日本海軍のリーダーたち』、光人社、2011 年。
・防衛庁防衛研究所戦史室『大本営陸軍部 2　1941 年 12 月まで』朝雲新聞社、1968 年。
・防衛庁防衛研究所戦史室『大本営陸軍部大東亜戦争開戦経緯 4』朝雲新聞社、1974 年。
・防衛庁防衛研究所戦史室『大本営陸軍部大東亜戦争開戦経緯 5』朝雲新聞社、1974 年。
・日本国際政治学会　太平洋戦争原因研究部編『太平洋戦争への道　開戦外交史』、新版、
全 8 巻、朝日新聞社、1987-1988 年。
・Chapman, John W(ed .&tr.), *The Price of Admiralty. The War Diary of the German Naval Attach in Japan, 1939-1943*, Vol.4, Ripe, 1989.
・Morison, Samuel Eliot, *History of United States Naval Operations in World War II, Vol.III, The Rising Sun in the Pacific: 1931-April 1942*, reprint-ed, Edison, NJ, 2001.
・戸高一成編『証言録　海軍反省会 2』PHP 研究所　2011 年。
・「歴史読本」編集部編『日米開戦と山本五十六　日本の論理とリーダーの決断』、新人物往来社、2011 年。
・工藤美知尋『山本五十六の真実　連合艦隊司令長官の苦悩』、潮書房光人社、2015 年。

# 研 究 活 動 記 録

**2021 年 10 月 1 日から 2022 年 9 月 30 日までに発表した研究活動記録**

〔著〕　著書（翻訳書を含む）
〔論〕　論文（研究報告・総説・報告・解説を含む）
〔学〕　学会発表（学会及び講習会にかかる概要・要旨・予稿集を含む）
〔外〕　学外各種委員会研究（研究会にかかる概要・要旨・予稿集を含む）

和泉充

〔論〕Antomne Caunes, Hayato Imamichi, Nagisa Kawasumi, Mitsuru Izumi, Tetsuya Ida : Simulation of the Waveform Control Pulse Magnetization of a High-Temperature Superconducting Bulk with Negative Feedback,　IEEE Transactions on Applied Superconductivity, 32, Issue 4, December 2021, 5pp, Article number 6800305. DOI: 10.1109/TASC.2021.3138835

〔論〕S. Takei, M. Izumi, K. Yamaguchi, T. Ida, E. Shaanika : Double Armature HTS Bulk Synchronous Machine for Contra-Rotating Turbine Generator,　IEEE Transactions on Applied Superconductivity, 32, Issue 4, February 2022, 5pp, Article number 5201305. DOI: 10.1109/TASC.2022.3148696

〔論〕Antomne A. Caunes, Hayato Imamichi, Nagisa Kawasumi, Mitsuru Izumi, Tetsuya Ida : Waveform Control Pulse Magnetization of GdBaCuO Bulk Near Operating Temperature of Our Superconducting Rotating Machine, Antomne Caunes, Hayato Imamichi, Nagisa Kawasumi, Mitsuru Izumi, Tetsuya Ida, IEEE Transactions on Applied Superconductivity, 32, Issue 4, March 2022, 5pp, Article number 6801105.　DOI: 10.1109/TASC.2022.3162809

〔論〕（解説）和泉充 : 船舶用高温超電導回転機技術の現状と将来展望 -船舶推進から海潮流発電まで-，低温工学 57 巻 2 号　特集号 : 電力・産業応用に向けて加速する超電導回転機技術，pp. 79-86，2022 年.　DOI: 10.2221/jcsj.57.79

〔学〕Mitsuru Izumi, Erasmus Shaanika, Kota Yamaguchi, Antomne Caunes, Tetsuya Ida, Motohiro Miki: HTS Bulk Superconductors and Applications in Rotating Machines, 7th International Conference on Superconductivity and Magnetism (7th ICSM), Fri, October 22, 2021 –Thu, October 28, 2021, Milas-Bodrum, Turkey , ID:348,（招待講演）Oct. 22 2021.

〔学〕Mitsuru Izumi: HTS Bulk and Applications in Rotating Machines, 12th International Workshop on Processing and Applications of Superconducting Bulk Materials, November 11 - 14, 2021, SHANGHAI, CHINA, Session S-I,（招待講演）Nov. 13 2021.

〔学〕Antomne Caunes, Hayato Imamichi, Nagisa Kawasumi, Mitsuru Izumi, Tetsuya Ida : Numerical modeling of the pulse field magnetization of the bulk array used as the field poles of a superconducting machine, MT27, 27th International Conference on Magnet Technology, Nov. 15-19, 2021, FRI-OR7-502-07,Nov 19, 2021, 11:30 AM（口頭選抜講演）,Fukuoka Convention Center.　https://indico.cern.ch/event/975584/contributions/4427180/

〔学〕Petrus Kambo, Yuhi Yamanouchi, Antomne A. Caunes, Masahiro Watasaki, Kota Yamaguchi, Mitsuru Izumi and Tetsuya Ida : Conceptual design of a linear generator suitable for marine energy power generation, MT27, 27th International Conference on Magnet Technology, Nov. 15-19, 2021,Revised 24 November 2021 15:51（ポスター発表）, Fukuoka Convention Center.　https://indico.cern.ch/event/975584/contributions/4427170/attachments/2351948/4012513/THU-PO3-508-03_Petrus.pdf

〔外〕電気学会超電導機器技術委員会「超電導機器の将来的な技術動向協同研究委員会」，2021 年 12 月から 2 年間，電気学会電力・エネルギー部門「超電導バルクの産業応用調査専門委員会活動のまとめ」総括講演，2022 年 9 月 21 日

〔外〕電気学会「超電導材料創出のためのインフォマティクスに関する調査専門委員会」，2022 年 1 月から 2 年間

**商船学科**

**小田真輝**

〔学〕松村哲太，藤野俊和，地引達弘，岩本勝美，小田真輝 : 溝形状表面テクスチャリングによる往復動潤滑面の摩擦低減効果とその設計指針，日本マリンエンジニアリング学会誌，第 57 巻第 5 号 89-99，2022

**情報機械システム工学科**

**江崎修央**

〔著〕江崎修央 :「うみログ ―IoT デバイス」，スマート水産業入門，緑書房，2022 年 3 月 20 日

〔著〕江崎修央 :「スマート養殖 実装と課題 『スマート水産業の展開と課題 海洋観測機の養殖現場への実装』」，養殖ビジネス 2022 年 6 月号，緑書房，2022 年 6 月 1 日

〔著〕江崎修央 :「AI により餌付けを自動で制御する基礎システムの開発」，果実日本第 77 巻 2022 年 9 月号，日本園芸農業協同組合連合会

〔論〕江崎修央，中川弘之，吉原貴仁 : 地域 DX 推進と人財育成に向けた包括連携に基づく教育実践，システム制御情報学会誌 66 (6)，p227-231，2022

〔論〕Nobuo Ezaki: Automatic feeding by activity determination for fish farming, 2022 LRI-FRI-IPB-FFTC Joint Symposium Intelligent Production of Livestock Industry and Aquaculture, September 30, 2022

〔学〕萩野翔貴，中井一文，重永貴博，江崎修央：アンケートを用いた練習日誌の集計とフィードバックのシステム，第 84 回全国大会講演論文集 p.285-286，2022
〔学〕高松諭利，世古渡紀也，中古賀理，江崎修央，小林智彦：魚類養殖を対象とした画像処理・機械学習を用いた活性判定による自動給餌，映像情報メディア学会技術報告，2022-02-AIT-ME-MMS-IE-ITS
〔学〕姫子松宏太，辻陸玖，出江幸重，北原司，中古賀理，江崎修央，高橋完，山端直人：害獣檻における自動誘引のための鹿検出と給餌パターンの導出，映像情報メディア学会技術報告，2022-02-AIT-ME-MMS-IE-ITS

**増山裕之**
〔学〕Hiroyuki Masuyama: Investigation on Driving Signal of Sound Source Element in Reflection Point Search by Rectangular Sound Source, Proc. Symp. on Ultrasonic Electronics, 42, 1Pb2-7, 2021.10

**一般教育科**
**鈴木聡**
〔論〕鈴木聡：戦前～戦後初期における高等教育機関の教員人事に関する一考察，鳥羽商船高等専門学校紀要第 44 号，2022 年 3 月
〔論〕（書評）鈴木聡：書評 見坊行徳・稲川智樹共著『辞典語辞典』，鳥羽商船高等専門学校紀要第 44 号，2022 年 3 月
〔論〕（書評）鈴木聡：書評 田中実著『詩集シェイクスピア物語 羅人どん』，『詩集米寿』所収 P90-P92，朝日出版社，2022 年 8 月
〔論〕（翻訳）鈴木聡：翻訳 キャサリン・マンスフィールド作『園遊会』，鳥羽商船高等専門学校紀要第 44 号，2022 年 3 月
〔学〕鈴木聡：臨時教員養成所卒業生の国家としての評価―他機関卒業生と比較して，日本英語教育史学会第 286 回研究例会，2022 年 1 月 8 日

**中平希**
〔著〕中平希：「アンドレア・グリッティー激動期のヴェネツィア共和国元首」，イタリア史研究会編『イタリア史のフロンティア』，昭和堂，184～186 頁，2022 年

**山田英生**
〔論〕平川武仁，大庭恵一，山田英生：高等教育機関の学生における遠隔授業と面接授業期間のストレッサーとストレス反応, 大分工業高等専門学校紀要, 58, 9-15, 2021.11
〔論〕平川武仁，大庭恵一，山田英生：COVID-19 への感染症予防を踏まえた大学体育実技授業の実践研究，鳥羽商船高等専門学校紀要，44，2022.3

〔論〕平川武仁，大庭恵一，山田英生：夏季オリンピックにおける三つの世界モデルによる国際競技力の変化，大阪体育大学紀要，53，47-63，2022.3

**枦山剛**

〔論〕枦山剛：Isoroku Yamamoto’s military strategy in the outbreak of the Pacific War ，鳥羽商船高等専門学校紀要第 44 号，60-74 頁，2022 年 3 月

〔学〕枦山剛：「太平洋戦争勃発における山本五十六の軍事戦略」，2022 年度日本比較文化学会関西支部例会（於：同志社大学今出川キャンパス），2022 年 3 月 19 日

〔学〕枦山剛：「太平洋戦争勃発における山本五十六の軍事戦略とハル・ノート」，日本比較文化学会第 44 回全国大会 2022 年度国際学術大会（於：山形大学小白川キャンパス），2022 年 5 月 21 日

ISSN 2434-1096

# ANNUAL REPORTS OF NATIONAL INSTITUTE OF TECHNOLOGY, TOBA COLLEGE

No.45
March 2023

CONTENTS

Utilization of ERM (Engine-room Resource Management) by using active learning on training ship “TOBAMARU” ····· Takehiko YAMANO ····· 1

Cautions in introducing a bibliometric approach to the study of word usage ····· Satoshi SUZUKI ····· 5

A Study on the Destination of Graduates the First Temporary Teacher Training Institute of Tokyo and Trends Afterward: A Comparison with Graduates of Other Institutions ····· Satoshi SUZUKI ····· 28

The involvement with Hori Teikichi's disarmament policy before the outbreak of the Pacific War ····· Takeshi HASHIYAMA ····· 49

A List of Research Activities ····· 68